

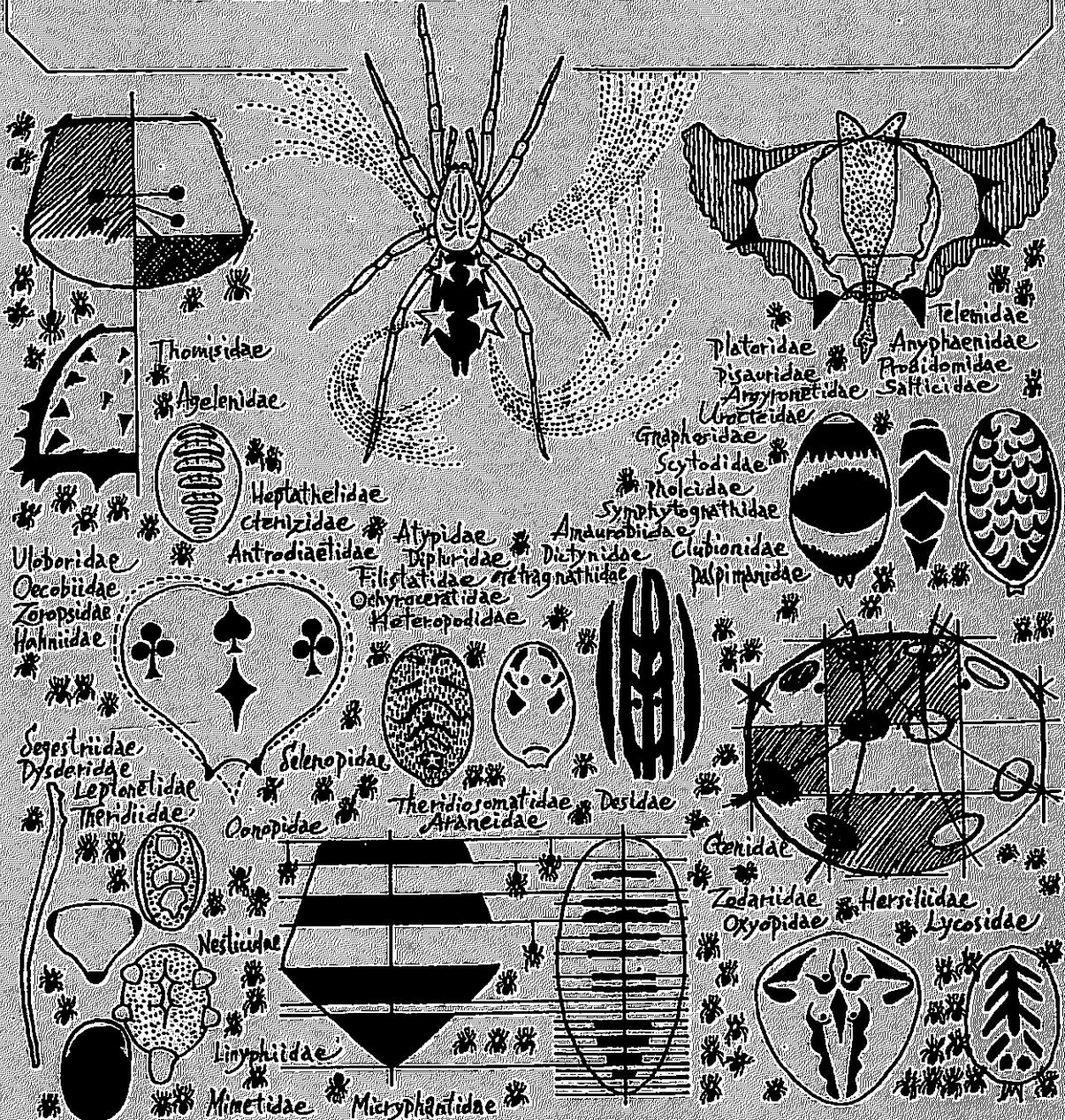
KISHIDAIA

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No. 58

1989-8

KISHIDAIA発刊 20周年記念号



東京蜘蛛談話会会誌

K I S H I D A I A
Bulletin of Tokyo Spider Study Group
No. 58 Aug. 1989

— 目 次 —

東京蜘蛛談話会会誌 KISHIDAI A 発刊 20 周年記念号

談話会活動写真集

記念文

萱嶋 泉：	本田正次先生に聞いた岸田久吉先生のことども	1
小澤 實樹：	素晴らしいクモと人間たち	4
浜村 徹三：	私とクモの長いつきあい	6
大河内哲二：	「KISHIDAI A」発刊 20 周年に寄せて	7
松本 譲治：	KISHIDAI A 発行 20 周年に寄せて	9
小野 展嗣：	自問自答	10
佐藤 幸子：	KISHIDAI A と私	16
池田 博明：	談話会をクモの博物学的研究のメッカに	17
高橋 登：	東京蜘蛛談話会と私	18
板倉 泰弘：	談話会と私——3 年前の印象	19
新海 明：	バック・トゥ・ザ・フューチャー	20
谷川 明男：	キシダイア 発刊 20 周年によせて	21
熊田 憲一：	入会と始めての投稿	22

一般原稿

新海 明：	岸田久吉先生の遺稿「ジャウゴグモ」について	25
笹岡 文雄：	キシノウエトタテグモの交尾行動について	30
稻葉 茂代：	チリグモの交接について	34
貞元 己良：	我が師と蜘蛛——萱嶋先生の喜寿をお祝いして——	37
池田 博明：	東京クモゼミ報告(I)	40
新海 明：	キヌアシナガグモの網構造について(続報)：幼体の網	46

DRAGLINE

熊田 憲一：	8 年目のアシダカグモ	48
新海 明：	アシナガグモの成体によるジョロウグモの網の掠奪	48
板倉 泰弘：	卵のうを食い破るアズマキシダグモ	49
谷川 明男：	田中徳久氏採集による各地のクモ同定記録	50
—— 沖縄、小笠原、硫黄島、三宅島、真鶴、八ヶ岳、清里、北海道 ——		
熊田 憲一：	猿島のクモ	56

1987 年度観察採集会報告

笹岡 文雄：	丹沢・大倉周辺のクモ	64
KISHIDAI A No.1 ~ No.58 総目次		73
KISHIDAI A 投稿規定・原稿作成上の注意		89
編集後記		90

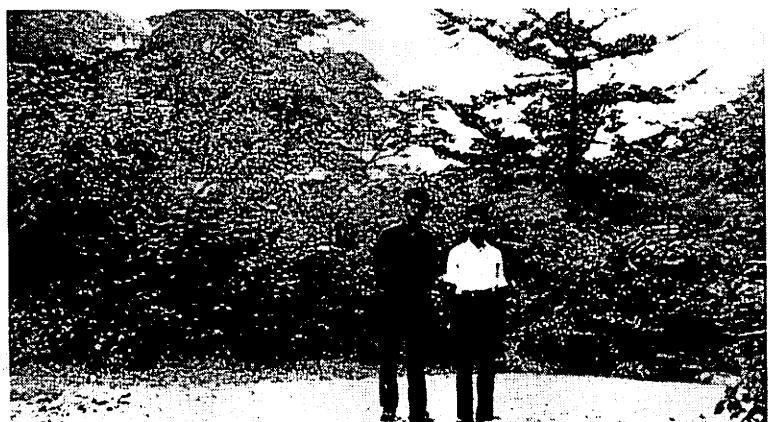
談話会活動写真集



1969年6月1日 第32回月例会



1975年10月10日 滝山城址採集会



1965年8月28日 談話会発足前の採集会（日原鍾乳洞前）



1979年2月18日 巾着田採集会



1980年7月27日 高尾山採集会



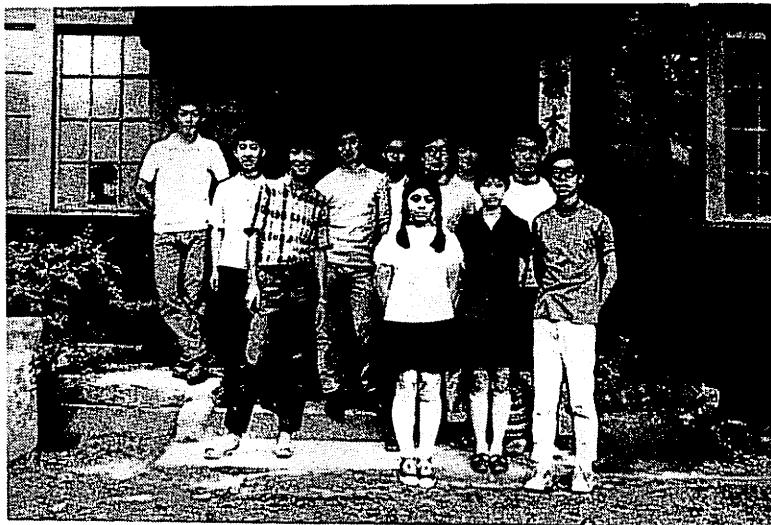
1981年10月18日 天覧山採集会



1984年2月19日 広徳寺採集会



1984年7月14日 桤形山採集会



1971年8月5日
清澄山合宿

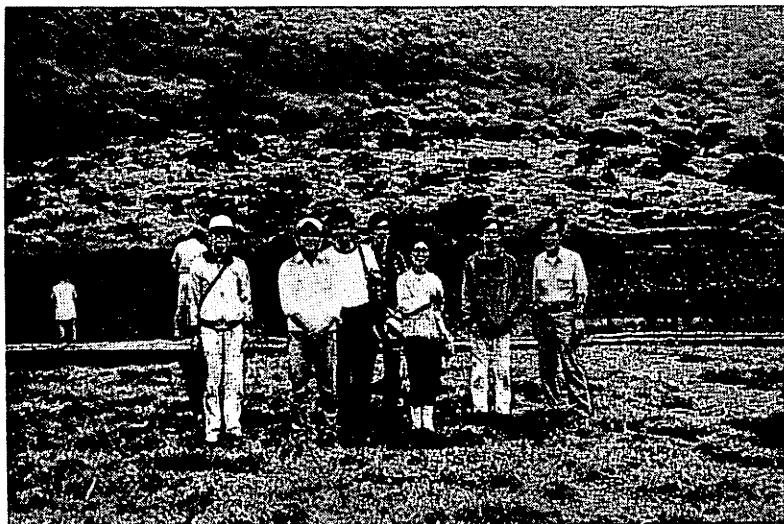


1971年8月17日
奥秩父合宿



1978年8月6日
妙義合宿

1981年8月8日
赤城合宿

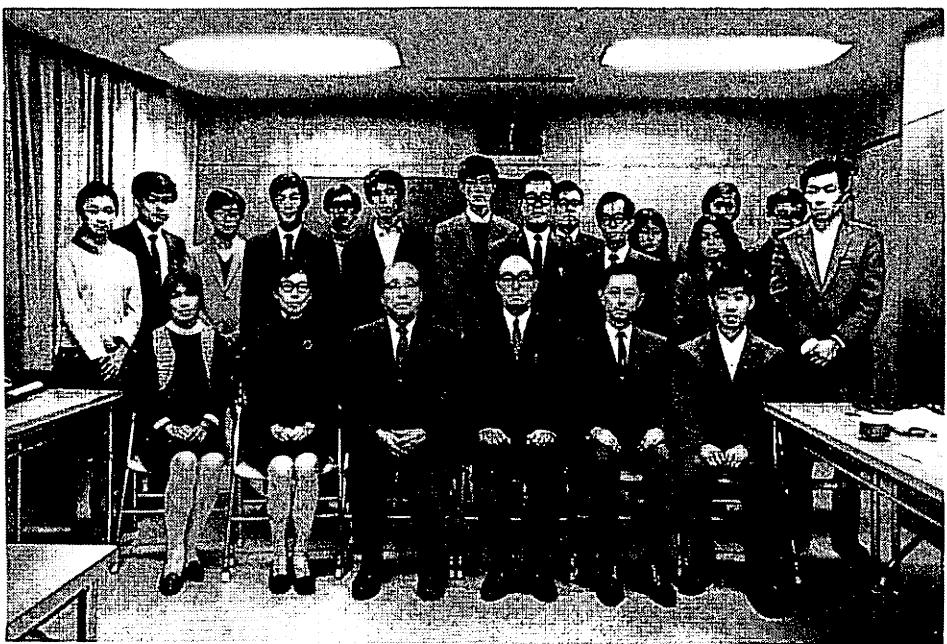


1983年7月29日
箱根合宿

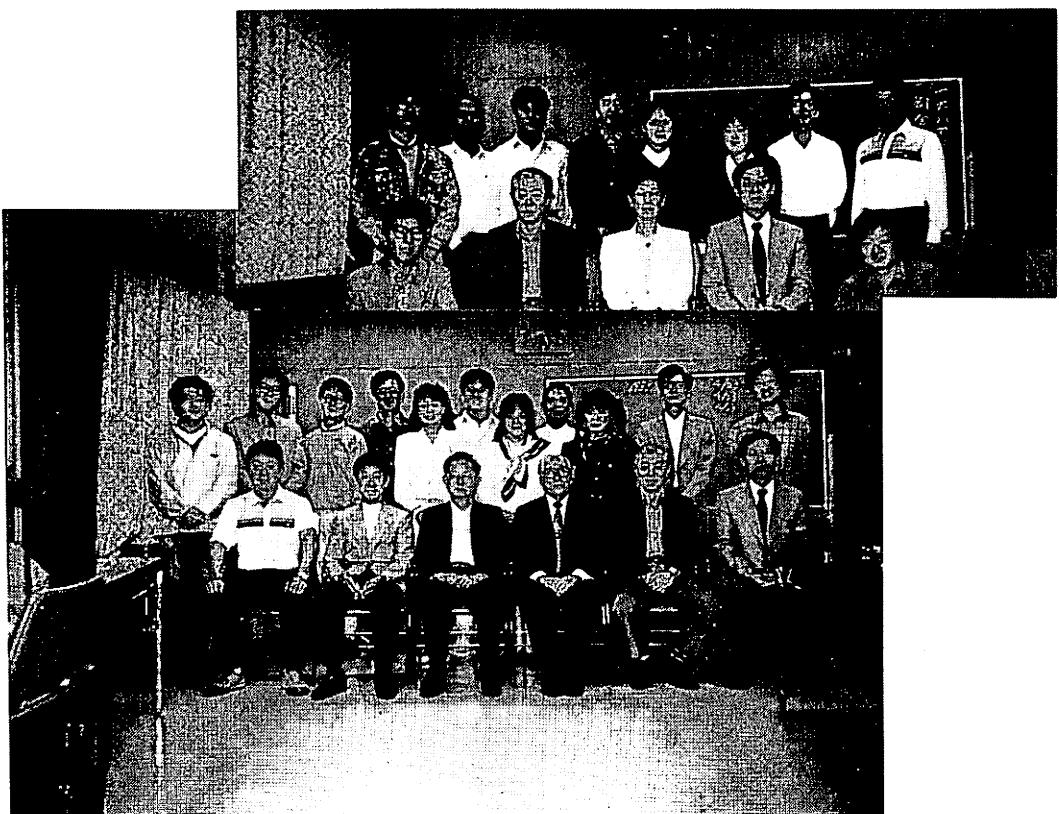


1988年7月30日
真鶴合宿





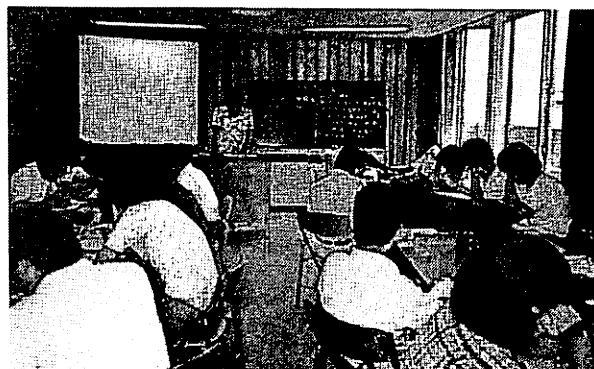
1970年11月29日 第1回例会



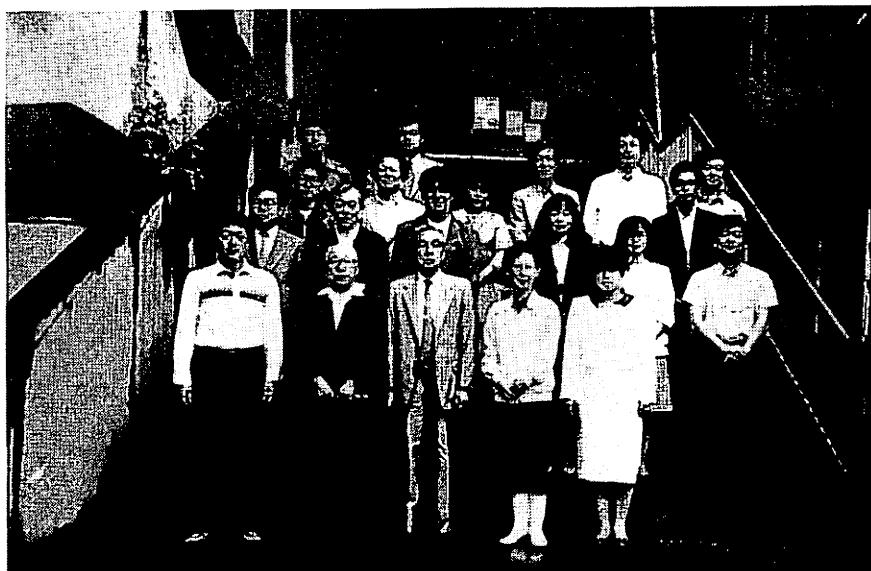
1989年4月23日 第20回例会



1978年6月18日 第9回例会



1980年6月15日 第11回例会



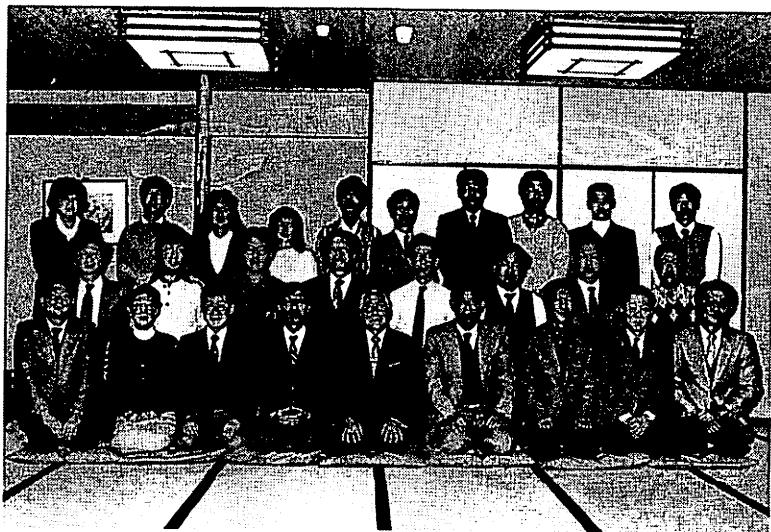
1988年6月12日 第19回例会



1983年12月4日
第12回合同例会



1984年11月11日
第13回合同例会



蒼崎泉先生の喜寿を祝う会（東京海洋会館 昭和63年11月20日）

文念記

卷之三

本田正次先生に聞いた岸田久吉先生のことども

萱 嶋 泉

岸田久吉先生が逝去されて、2年たったある日、本田正次先生から電話を頂いた。それは「時間の都合がつくなら、すぐ遊びにこないか」とのことであった。早速午後1時頃に小金井のお宅に伺った。

先生は蔵書の整理をなされていた、部屋は書物だらけであった。「まあ、その辺りの本を片付けて座って下さい」と言われるので、本を積み重ねて空いた場所に座った。「この1週間は本の整理をしているが、どの本にも岸田さんとの思が籠っていて、無性に岸田さんが懐しくなった。それで君に電話をかけたのだ」と頭を深々とさげられた。

「岸田さんは、私より10才年上であられたが一緒に机を並べて勉強した仲である。東大の理学部の動物学科の選科生として若い学生のリーダー的存在であった。石川千代松教授などは、『岸田君には何にも教えるものはない、彼は総べてを知っている』と口をきわめてほめて居られた。岸田さんはほんとうに何んでも知っていた。それで皆で博物学者の岸田さんと呼んで尊敬していた。動物学は勿論、植物学でも鉱物学でも、それぞれの教授が舌を巻く程の智識を持っていたのである。私の専門である植物分類学についても、非常に興味を示められて、一緒に牧野富太郎先生宅に伺つたものだ。岸田さんは植物分類体系に対して、ひとかどの見識を持って居られた。牧野先生も岸田さんの説には賛成で、牧野植物分類体系の中に岸田さんの意見が生かされた。このことを知った時の岸田さんの喜びは大変なもので、子供のようにとんだりはねたりした。牧野富太郎先生のような大先生は100年に1人しか現われるものではない、またこの先生程、他の人の意見に耳をかされた学者もいないと思う。岸田さんも私もこの偉大なる先生に直接教えを受けたことを感謝しあつたものである。私は岸田さんと植物形態学の実験を何回かしたことがあったが、そのスケッチの上手なことは、他の学生の追従を許さぬものがあった。これは柿の実の実験の時に岸田さんが描いたものである。私は彼のスケッチを40枚宝として持っている、今日、2枚を記念としてあげよう、君は岸田さんの動物学のすばらしさは知っているが、植物学、鉱物学の面においても、専門家の域を越える研究や調査をされたのである。その当時、選科の学生には、とてつもない大物が何人かいて、教授連も一目置いていた。岸田さん、駒井卓さん、岡田弥一郎さん等もその中に入っていた。私は中でも岸田さんとは、馬がよく合って本を買う時には、よく彼の意見を聞いたものである。ほんとうに岸田さんは私にとって掛け替えのない良き友であった、彼の死で博物学者が日本からいなくなつた。」と声を詰まらされた。

本田正次先生は植物分類学者として、世界的な研究をされた方である。また牧野植物図鑑の補遺と言う困難な仕事をなされ、立派な原色牧野植物図鑑が出来あがつたのである。

もしこの仕事を他の学者が手がけたとしたら、完成された時、その方の名が大きく出て牧野先生の名は片隅に押しやられたにちがいない。しかし本田先生は、あれだけ多くの改訂をなされたにとかかわらず、自分の名は極くわずかしか出さず、全面的に牧野先生の仕事とされた。本田先生は牧

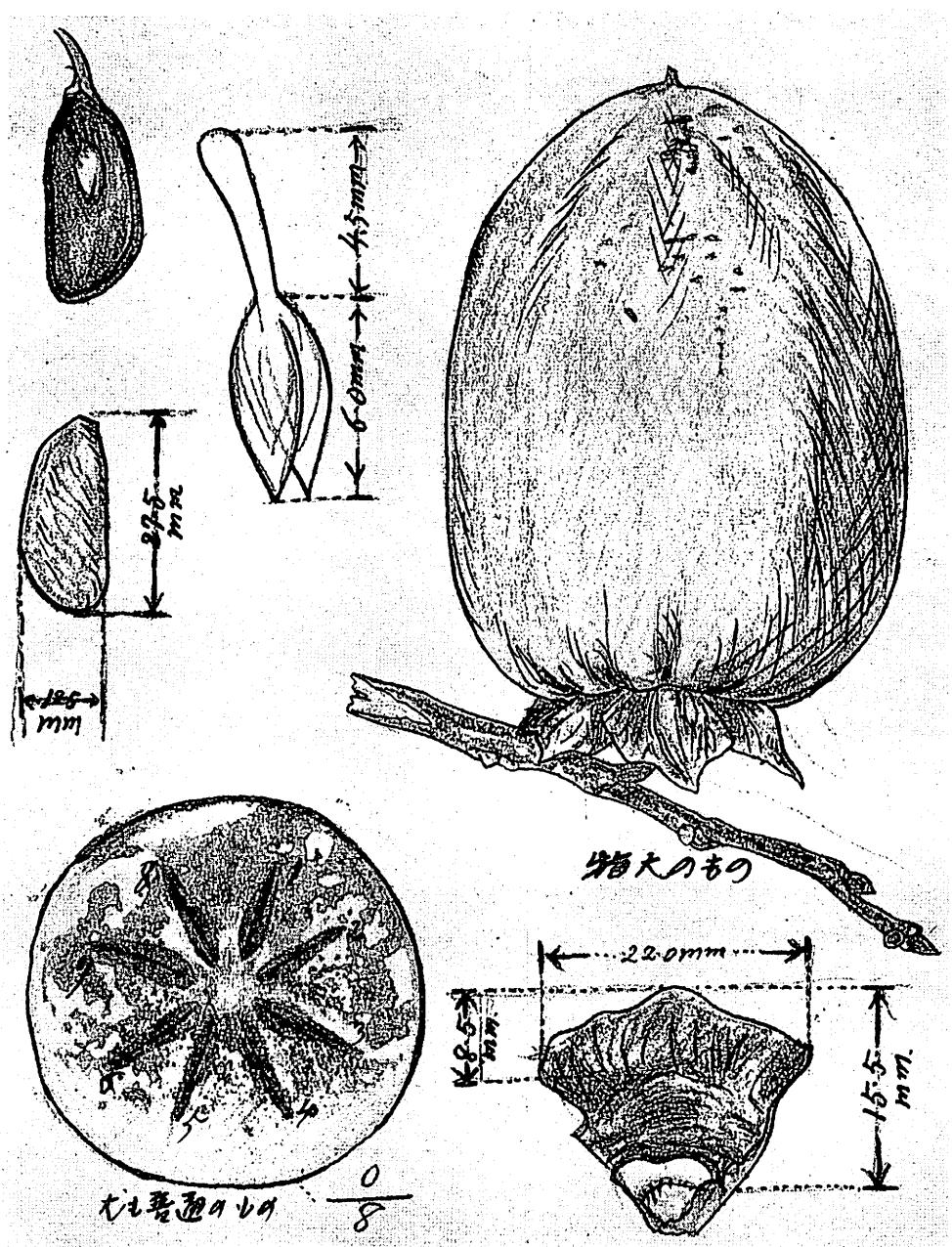


図1 本田先生より頂いた岸田久吉先生のスケッチ

野先生をEngler氏と共に植物分類学の基礎を確立した学者と評して居られる。KISHIDAI Aの記念誌に岸田先生の知られざる一面を載せることができたことを嬉しく思うものである。

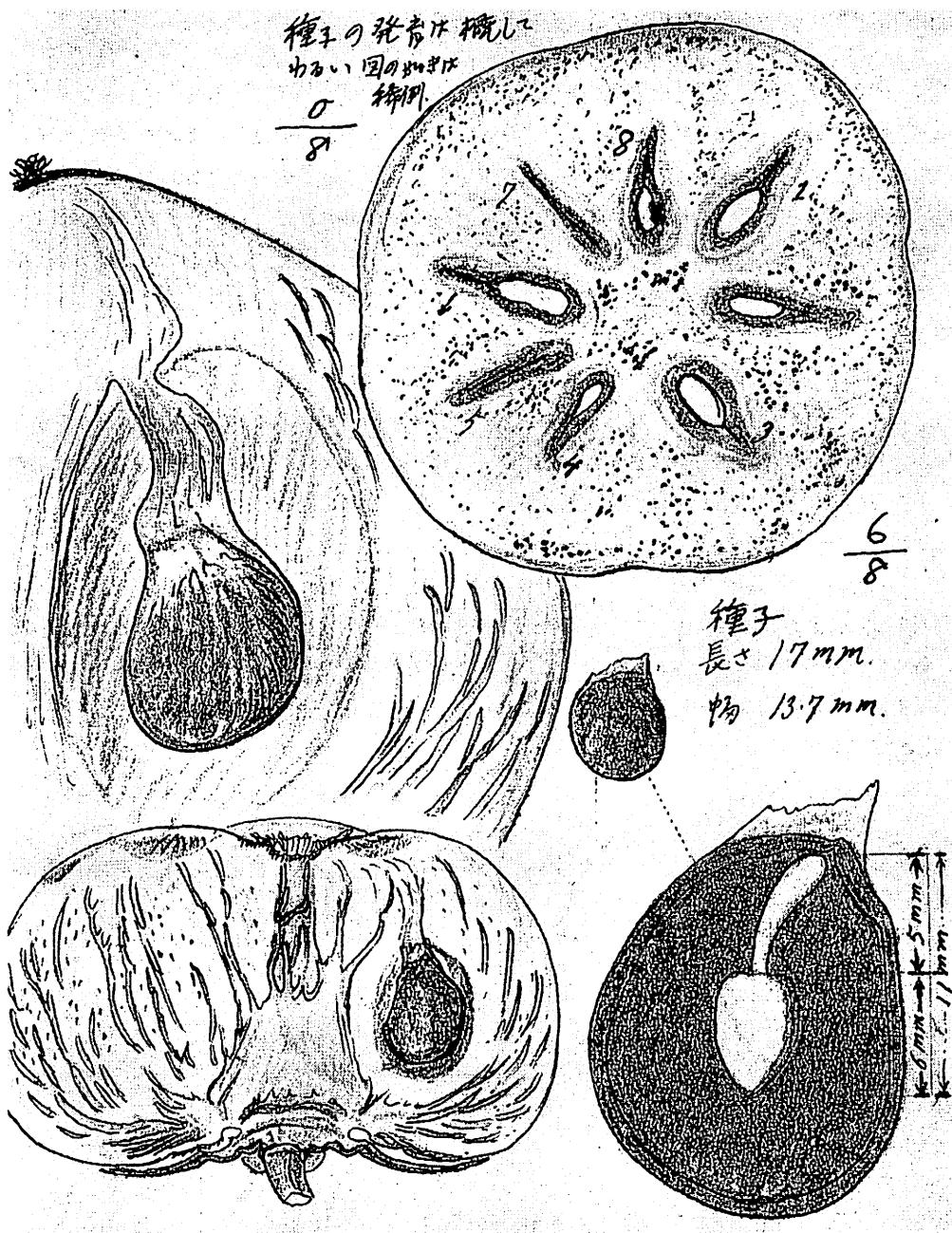
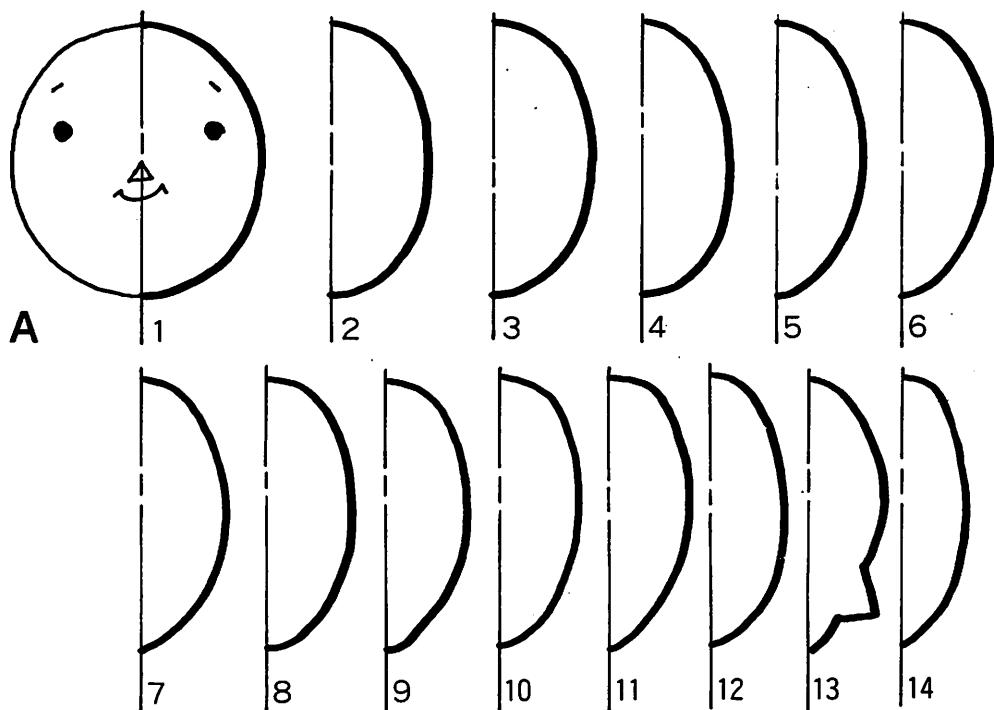


図2 岸田先生が東大理学部動物学科の選科学生の時のもの

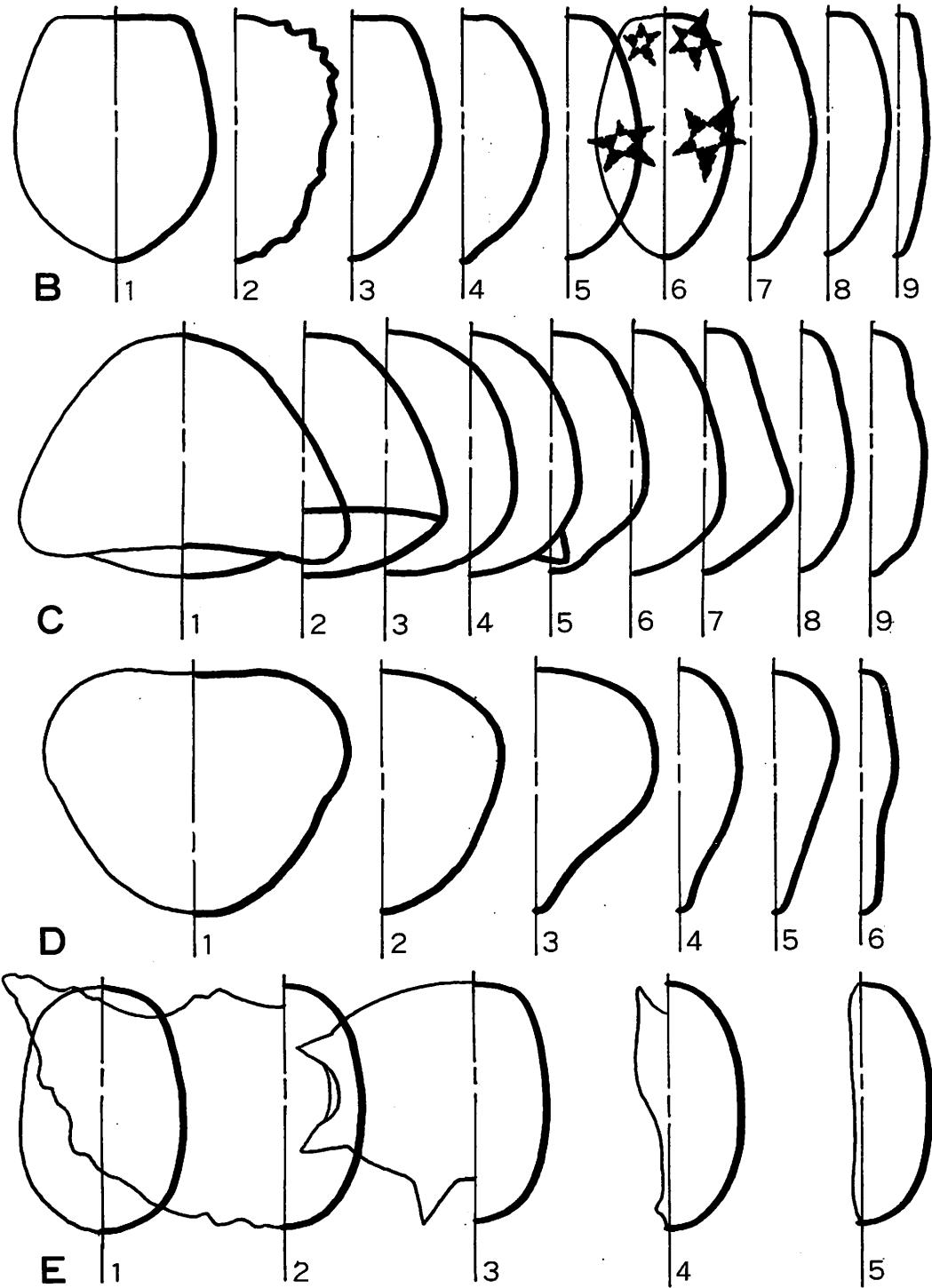
素晴らしいクモと人たち

小澤 實樹

“好き”とか“嫌い”と云うことは、あまり理性的なものではないようである。クモとなると前提は不要で、しかも観るほどに“好き”になり、興味も深くなる。糸をほどく思いで網をながめたり、腹部の形状と、その神秘的な模様に惚れて時を忘れてスケッチをすることがある。そして毎年、感動すら覚えるクモとの出会いが必ずあるのだ。だが感動をすると私は、もともと少い知能がにぶり、理性や知性を失うことになる。さて、そんな“好き”というだけでついて来た会員だから、各位にはごめいわくをかけたことと思っている。それでも今、20周年を振り返り、私のささやかなメモをスケッチブックからひろってみた。そうして出来たのがこのクモの腹部の図である。各種のクモの腹部の長さを同じにして、幅や形の比率を出して並べてみたら多種多様に、見事な弧をえがいて、グループをつくってくれた。もとよりこれは、分類学と云うには及ばず、何んの基準にもならないが、いわば私の感性の分類である。だからA-3は…、B-1は…、などと各々の解説はこの場合不要なのである。こうして類似する弧を並べてみると、リズムを感じ、ハーモニイを覚え、そして弧の一つ一つが強烈なクモ各々のキャラクターをみせてくれる。斑紋はいわばフィーチャーであろう。ちなみにKISHIDAIAにはやっぱり星を配したくなった。(A-1)に、目や口を入れたら人の顔にみえた。そこで独断で思ったことは、この図がまさに談話会の図でもある。会員各位が、各々のキャラクターをぞんぶんに出され、クモ学はもちろんのこと、これからも益々素晴らしい人間集団にしたいと願うのは私だけではあるまい。私も、またノコノコついて行きたい。それが東京蜘蛛談話会だからである。



KISHIDAIA No. 58, Aug. 1989



私とクモの長いつきあい

浜 村 徹 三

早いもので、東京クモ談話会が20周年を迎えるとのこと、会員の皆様と共に喜びたいと思います。20年前は私もまだ大学生で、宇都宮から時々上京しては、新海栄一さんや松本誠治さん達と萱鳩先生のお宅へ集まり、クモ談議に花を咲かせたのが昨日のように思い出されます。

東京クモ談話会を発足させることができ本決りになった頃に、就職のため広島へ転居となってしまいました。その後は発足した談話会には投稿はしない、往復ハガキにも返事を出さず、かろうじて数年分のたまたま会費を払うだけのため会員で20年が経っていました。

ただし、20年間クモと縁を切っていた訳ではなく、細々とながらもクモとの長いつきあいを続けてきました。20周年の記念に自分のクモ研究史をまとめ、これまで全くキシダイアに投稿しなかつたお詫びの気持にしたいと思います。

高校時代（岩手宮古高）

私がクモとつきあいはじめたのは高校一年の時、生物クラブに入ってからでした。このクラブは東北地方では博物学者として少々名の知れた山本弘先生が指導されていて、高校としてはレベルの高いクラブ活動が行なわれていました。理由は忘れてしまいましたが、私はここで誰もやっていなかったクモを研究テーマに選びました。最初の年は齊藤三郎先生の図鑑しかなく、中々クモの名前も判りませんでしたが、2年になると八木沼先生の図鑑が出て、かなり組合せが出来るようになりました。不明な種は八木沼先生に同定をお願いするようになり、シロカネグモの一種が新種ということで、地方新聞に載ったりしました。腹部の幅広い銀色のシロカネグモでしたが、その後も記載されていないようです。

山本先生は厳しい方で、科学者としての物の見方を教えられました。

大学時代（宇都宮大）

大学では昆虫学教室に早くから出入りし、奥日光を中心によく採集に出かけました。栃木県のクモ相はATYPUSに2回発表しました。また、この教室はオサムシの採集が盛んで、冬はオサ掘りと称して朽木や崖くずしの採集もよくやりました。北海道でエソトタゲモの雌を初めて採集し、東亜クモ学会の号外が出たのも、フタバヤチグモ*C. hamamurai*を採集できたのもオサ掘りのおかげでした。

卒論および修士論文のテーマは「水田のクモ」で、田んぼに入ってイネをかき分けてのクモの調査を4年間やりました。この成果はキバラコモリグモを中心にACTA等に発表しました。宇都宮大学での恩師は田中正先生で、楽しくほがらかに研究する態度を学びました。また、前述のように時々東京へ出て、萱鳩先生に教えを受けました。さらに郷里への行き帰りに盛岡の片岡佐太郎先生（この先生は私の父の親友なのです）のお宅へおじゃましたことも数回ありました。

広島（安芸津）時代

就職は農林省果樹試験場安芸津支場で、新設のため約2年間はほ場作りの土方をやりました。軌

道に乗ってからはチリカブリダニというハダニの天敵が中心で、クモは1～2割の労力しか使えませんでした。カンキツ園のクモ相を調査したところ、アサヒエビグモが最も多いことが判り、これを使って発育に及ぼす日長の影響を調べました。本種の発育は若令期は短日型、中令以降は長日型の反応で、1年間のほとんどを日長と気温によって発育が抑制されており、5～6月のみが日長、気温とも促進的に働いていることが判りました。このことが小さいクモなのに年1世代である理由であった訳です。20年の研究活動の中で隠された真理を実験によって解明できた胸のすく成果でした。これはクモ以外の人にも公表したかったので「応動昆」へ投稿しました。宮下先生に「今だに君の後を追いかけているよ」と言わわれるとついニヤリとしてしまうのです。

安芸津ではこの他に、高さ15mのポールに直経1mのネットをつるし、数年間飛行グモを採集しました。この結果は口頭では東亜クモ学会で発表しましたが、ペーパーにしないままになっています。時期を失すると中々書きにくいもので、やはり終ったら必ず書かないといけないと反省しています。でも、この飛行グモの調査結果はけっこうおもしろいので、そのうち書きたいと思っています。

静岡（金谷）

12年間の安芸津の生活を終り、静岡の金谷にある茶業試験場に転勤になりました。ここではチャの大害虫カンザワハダニの生物的防除の研究が主体で、特に日本では初めての薬剤抵抗天敵（ケナガカブリダニ）を発見し、その利用法を研究しました。この研究を集大成するにかなりの労力をさいたため、クモの研究は茶園のクモ相を少し調べた程度で、あまり仕事は出来ませんでした。クモ学会でダニの講演をしてもよい訳ですが、どうもクモとダニを分けて考えるため、ここ数年クモ学会の発表のネタが無くなってしまいました。

昭和61年12月に機構改革で野菜・茶業試験場となり、それと同時に研究職を離れて企画連絡の仕事に替わり、増えクモが出来なくなってしまいました。茶園のクモではネコグモが多く、これもアサヒエビグモと同じく年1世代なので、アサヒと同じような日長反応をするのか興味がありました。残念ながらできない状態にあります。

そのうちまた研究職に戻ることになると思うので、細々とでもクモとつきあっていきたいと思います。

「KISHIDAI A」発刊20周年に寄せて

大河内 哲二

「KISHIDAI A」発刊20周年、そして東京蜘蛛談話会の育ての親であられる萱鳩泉先生が喜寿をお迎えになられたこと、たいへんおめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。これまで機関紙「KISHIDAI A」が順調に発行され、しかも内容もますます充実したものになってきたのは、萱鳩先生とその周りに集まってこられた若い研究者の皆様のご努力によるものですが、その源には萱鳩先生のこよなくクモを愛する心、ひたむきな研究心、誰でも迎え入れる広い心といった先生のお人柄によるものと思います。

私が初めて萱鳩先生にお目にかかったのは、高校時代に書いたクモの観察記録を先生にお送りして見ていただき、その原稿をご自宅まで取りに伺ったとき、昭和41～42年頃だったと思います。そのとき初めて松本、新海氏にもお会いしました。それが縁で集まりのときにはいつも声を掛けていただきました。当時私は大学でクモを取り組んでいましたが、周囲にクモ屋はおらず、集まりが唯一の刺激源であり、新しい情報が聞けることを楽しみに、心を踊らせる思いで出かけたものでした。そうした集まりが談話会となっていましたが、会に出るたびに、新鮮で強烈な刺激を受け、ファイトを搔き立てられて帰っていました。また、会があるたびに八木沼先生、吉倉先生をはじめ日本各地のクモの研究者に寄せ書きの葉書を書くのも恒例になっていました。その頃日本のクモ学の先駆者である岸田久吉先生が病床に伏せられており、お亡くなりになられた後には先生の蔵書の整理もお手伝いし、クモに限らず生物学の多方面に渡る勉強の裾の広さに敬服したものでした。こうした経緯を経て、若いクモ好きな仲間の小論文の発表の場として、また情報交換の場として、談話会の機関紙を出すことになり、その名前は岸田先生の名前をとったワシグモ科の属名「KISHIDA IA」ということになりました。当時は贋写ファックスさえ珍しい時代でしたので、光栄にも第1号の発行を仰せつかった私は、手書きのガリ版刷りで発行しました。とにかく集まるたびに新しい情報や観察・研究の報告があったので、創刊号以降交代で月間に近い間隔で発行されていきました。回を重ねるうちに手書きがタイプ孔版になり、表紙もついてやがて図や写真も入れたいとの欲求も高まり13号には貴重な電子コピーの図版もつけられました。今、手にして振り返ってみると大変懐かしくもあり、当時のエネルギーに驚きます。

私は大学卒業後、中学校の教師になり、それとともにクモとの付き合いも薄くなってしまいましたが、現在教育界に身を置く立場で考えてみると、このような形で若い研究者を育てていった萱鳩先生の教育者としての人柄と指導力に尊敬の念を抱かずにはいられません。私自身、あの頃教えていただいた自然の見方や研究に対する取り組み方などが、私の自然観や教育観に大きな影響を与えていたと思います。それとともに萱鳩先生が私達に接してくださった態度そのものが、教師として子供たちに接していくべき姿として、私の信条になっているような気がします。

教師となり、その本来の仕事のかたわら立派に研究を続けている方もおられるのに、私は談話会に疎遠になってしまい失礼を重ねている有様ですが、ここまで談話会を盛り上げていただいた萱鳩先生はじめ、松本氏、新海氏、その他大勢の若い研究者の方々に深甚なる御礼を申し上げます。そして、とかく組織が大きくなると小回りがきかず、また権威主義に陥りがちであるにもかかわらず、この談話会は創立当時のまま、若い人達が中心で実質的な活動を続いているのも素晴らしいことです。どうかその若い活力を育て、利用してますます談話会、そして「KISHIDAI A」が素晴らしいものとなり、これからクモの勉強を目指す人達に光明をもたらしていくける組織であることをお願いしたいと思います。

KISHIDAIA発行20周年に寄せて

松 本 誠 治

KISHIDAIA発行20周年とは！ なんと早いのでしょうか。ある時、S先生が“私はまだ20代の気持ちでいる”とおっしゃられましたが、私自身も全く同じで、思い出などを語るには、少々早すぎるようにも思います。とはいえ、何も書かない訳にはいかないと思いますし、このような機会に何か書いておくことが、創設当時から会員でいる者の義務とも思いますので、思いつくままにあれこれ書かせて貰うことにします。

創立当初から見れば、大変大所帯になったと喜ぶと同時に、この20年の間に、会員になり、また退会された方達も何人かおられ、会員であっても、まだ一度もお会いしたことのない方も、また、それぞれの事情で逢えなくなってしまった方がいるのが、残念なことです。“談話会”的な通り、会って話をするのが一番良いことですし、逢って話をしたい方が何人もいます。談話会と言う名称について言えば、創立を準備していた頃には、本会が“談話会”ではなくなっていた可能性があったこともありました。結果としては、“東京蜘蛛談話会”という会名で発足した訳です。そして、しばらくたってから、再び本会が“談話会”でなくなりそうになったこともあります。もちろん、その時も“東京蜘蛛談話会”的なままとなった訳です。いま思えば、東京蜘蛛談話会であることはとても良かったと思います。本来ならば、全国にいる会員が談話に参加できるようになることが大切なのだと思いますが、現在のように、大所帯となると談話をすることもままならなくなってしまう訳ですが、その矛盾や不便を補うのが、KISHIDAIAであり談話会通信であると思います。KISHIDAIAが手書きのものから今のように、談話会通信が発行されるようになった経緯も、その時々では必然でしたが、現在ではどうでしょうか。いつも、それらの内容・体裁・その他について検討されてしかるべきでしょう。本会へ期待するところは、会員一人一人で違うでしょうし、“談話会”という言葉のイメージさえも一人一人で違うかも知れませんが、“談話会”である以上、そのイメージは会員全員で共有したいものです。また、“談話会”ならではの活動ができるとよいと思います。これは、むしろ“東京蜘蛛談話会”ならではと言えるものを期待したいものです。例えば、：――

KISHIDAIAは、一例報告・一箇所一日付単位の採集記録を中心に掲載していくと、バラエティのある誌面になると思います。もちろん、論文はダメと言うつもりはありませんし、採集会の結果のまとめを掲載することも大切だと思います。

談話会通信は、活動予定・活動報告・会員の移動の連絡に加えて、会員の消息（“いまこんなことをしています”のような内容の）がわかると楽しいと思います。書いてくれる方がいることを期待します。

採集会は、“合宿”も含めて、現在の形式が“本会ならでは”と思います。以前採集会を開いた所をもう一度調査すると聞きましたが、とても良いことだと思います。欲を言えば、蜘蛛愛好者拡大のための活動を考えて貰えればと思います。

例会も、"いまこんなことをしています"のようなことが多く紹介されると楽しいと思います。同定会や"とっておきのもの"を持ち寄ったことも思い出されます。

あれこれ勝手な事を書き連ねましたが、運営委員の方々のご苦労を考えれば、"協力を惜しまない!"くらいの気持ちを持ちたいのですが、なかなか思うようにはならず、申し訳なく思います。これからも、今までと同じように、着実にそして健全に活動して下さい。

自　問　自　答

小　野　展　嗣

20年

「KISHIDAIAが発刊20周年をむかえ、記念誌を発行することになったのですが、何か創立当時の面白い話でも伺いたいと思います。」

「この会が出来た頃、私はまだ中学生で、大学生だった新海栄一さんや松本誠治さんがガンガンやってました。その方たちが、今は40を越えているんですから、時間はだまっていても過ぎていくということを改めて感じます。当時と今では、談話会も本質的に違ってきているのではないかでしょうか。現在は、会員が全国に120人もいて、ルーティンな活動、つまり例会や観察会や雑誌の発行などに追われている。熊田憲一さん、新海明さん、谷川明男さん、池田博明さんはじめ、会の世話をされている方々には、相当な負担になっていると思います。また、当時のような無茶もできなくなっています。そういう意味で、会の運営を大学生がやってくれればという意見も、理想はあるが、大学生の方々にはかわいそうな気もします。むしろもっと研究の方を奨励したいところです。（無茶といえば、私も失敗の連続でした。とくに小澤實樹さんにはたいへんご迷惑をおかけしたことがあります。小澤さんにはとても感謝しています。）」

充実した時間

「最近は、高校生や大学生など若い人が、あまり関心をもたないみたいなんですが、やはりジミな虫だからなんでしょうか？ クモしてるっていうのは、あまりカッコ良くないし。」

「一般的な傾向なんだとは思いますが、昔はおそらく国や親が唱える科学の中にクモも入っていたのが、今は、水が低い方へ流れるように、完全にテクノロジーの方へ大勢がいってしまっている。その中で、胸を張って、学問としてクモ学をやっていくのはなかなかつらいことです。ところが、よく考えてみると、クモに関心を持っているということ自体が、たいへん教養が高いことなんです。ここをもっとアピールしないと。テクノロジーのおかげで豊かになった。衣食足りて、人間は何を望むと思いますか。時間をいかに充実して過ごすか、これが、これから社会に生きる人々の重要な課題になってくると思います。」

「つまり精神的に豊かになるということですね。よく、社会人になって忙しくなっても何らかの形でクモやクモ学界と接していくかどうかが、本当にクモが好きかどうかの境目だといわれますが、忙しくて時間がなくても、会費を払うとか、一年に一度だけ例会などに顔を出すとか、とにかく、続けるということが大切でしょう。」

面　白　さ

「いや、それは人間の自由な意志というのは第一に尊重されなければなりませんから、強制することはもちろんできません。クモ学が面白ければ、黙っていても皆が関心を持つだろうと思います。しかし、何が面白いのかもわからないような状態では本当にまらない。つまり、スポーツでもゲームでも、やり方やルールが決まっていて、はじめて成り立つのであって、それがなければ、人は何をしてよいか、何を目標にしてよいかまったくわからない。」

「クモ学もスポーツやゲームと同じなんですか。」

「本質的にはもちろん違うけど、やり方を知らないと面白くないという点は共通していると思います。」

「クモのような小さな虫でもバカにはできない。クモ学の奥は実に深い。クモという虫を通して、地球上のいろいろな現象を見てくることがあります。クモ学は動物学の一隅であるばかりでなく、生物学、そして科学の一分野であるということは忘れてはいけないと思います。」

科　　学

「話がだいぶ大きくなってきましたね。私は、はじめ文科系の大学を出たので、科学的なものの考え方というものがどういうものかピンとこないところがありました。唯一、クモの研究を通して自然と接していた。ところが、ドイツへ留学して間もないころ、マインツ大学創立500周年記念の催しというのがあった。もちろん、500年の間ずっと、今のような大学の形態であったわけではないけれど、この500年の重みはすごいと思いました。

さらに、大学というところはそもそもキリスト教の神学をやるところだったらしい。キリスト教はご存知の通り西洋の宗教で、ほとんどの西洋人の心のよりどころとなっている。そのキリスト教が、万物は主がつくったと教えている。信じられないことですが、むこうでは今だに、ダーウィンはけしからんと言っている人がけっこういる。神の冒とくであると。こういう点は柔軟な日本人は毒されるのが早いのかも知れない。

それはともかく、重要なのは、神学の大学で科学が生まれたという点です。科学というのはもともとのすごい批判的精神に満ちたものなわけです。物の本質を徹底的に分析していく、ガリレイじゃないけれども命がけでやった人もいる。その過程でだんだん科学の一種のルールが出来てきた。私はドイツの研究室にいる間、不思議と研究する意欲がわいてきました。研究テーマが次から次へと浮んでくるんです。」

討　　論

「何か違いがあるんでしょうか。日本人は人を批判したり、批判されたりすることを好まないでしょう。」

「私たちはつい『あの人は信頼できる。』『この人はこの学の権威である。』『私は専門が違う。』というような次元で議論してしまう。もし個人が確立していれば、相手や自分の人間性をうんぬんすることはありません。その上で、『ある人がこう言っていることやこう書いていることは、こういう点で間違っていて、実際はこうである。』というふうに、テーマが『人』でなく、『自然をいかに理解するか』というところにあれば、いつ、どんな人とでも互いの人間性を尊敬しつつ討論が

できるわけです。ドイツで私の師であったマーテンス教授を、私は今では du (君), Jochen(ヨッヘン君)で呼びます。日本では、考えられないことです。」

批判と分析

「一寸話が飛躍してしまったので、ここでまとめてみましょう。つまり、おっしゃりたいことは、クモ学も動物学、科学のかたすみにあるということ。科学はもともと、西洋で、神の教えを次々に打ち破るようにして生まれてきた考え方で、批判的、分析的であるとともにルールが決まっているということ。そして、科学を語るとき人々は、身分や国籍、肩書きなどの垣根をとりはずして一体感を味わえるということ。こんなところでしょうか。今、思ったんですが、東京蜘蛛談話会の雰囲気、いろいろな人、即ち学校の先生や生徒、研究者や趣味でやっているいろいろな職業の人、ただ単にクモが好きな人、などが、自らの垣根をとりはずして、或いはその利点を生かして、クモという動物を通して一体感を得ている、なかなかいい線いってるんじゃないですか？」

情報過多

「学会と違って、よりうちとけた関係ができるでしょう。東京近郊の人は採集会などしばしば顔を合わせることもできますし、会の運営や雰囲気については申し分ない。もう少し欲を言えば、より若い会員（高校生や大学生などの）が増加するともっと良いと思いますが、とにかく良い状況にあるわけですから、ここで改めてもう一度、クモという動物の本質にもう少しせまることができたらと思うわけです。」

「どうやってですか。大昔なら博覧強記の大学者がいた。いわゆるその道の権威というのでしょうか、その人に聞けばなんでもわかっちゃうという人、でも今はそんな時代じゃない。情報が多くて、人間の脳の許容範囲を越えている。」

井戸掘り

「私はクモの分類の師である八木沼健夫先生から、学問というのは井戸掘りと同じだと教わりました。つまり深い井戸を掘るにはある程度間口を広くしなければならない。専門的な研究をするには一般的な教養を身につけなければならない。という、教育者としての先生一流のお言葉です。これは私は名言だと思いました。というのは、私も素直ではないので、私流に味付けをしてみました。つまり先生は反対にスペシャリストたるべしとおっしゃっているのではないかと。翻って考えれば、間口ばかりをいくら広げたって井戸は掘れない。目的は井戸を掘ることなのだから、水脈にいきあたるには何メートルの井戸を掘り、そのためには間口がどの位いるかおのずと決ってくる。その井戸からくみ上げる水の味はどんなだろうか。深い井戸の水はうまいゾーというわけです。」

「ところで、もし井戸掘りが研究という作業であるとすれば、その井戸の水をくみ上げて皆に分かち与える行為を啓蒙あるいは応用と言います。この行為によって、我々は井戸の水の味や、利用価値を知ることができる。水を飲む人には井戸を掘った人の苦労はなかなかわからないですね。やっぱり井戸掘りはつまらないんじゃないですか。世の中にはいろんな人がいる。井戸を掘る人、もっぱらくみ上げるだけの人、井戸にふたをしてまわる人もいる。おいしい水を飲む人がいちばん幸せですが。」

三種の神器

「井戸の掘り方、言いかえて研究というのが、観察や実験や顕微鏡をのぞくことだと思っている人もいる。データを山のように積んでしまう。以前、博物館のクモ学入門講座で話したことがあるんですが、クモの研究にも三種の神器がある。おそれおおいことではあります、鏡・玉・剣のことです。第一は、知識、すなわち、先人の業績から、そのことについてどこまでがすでにわかっているかということ。ある程度の文献による情報、またそれを読むための語学力などが必要だということ、第二に、材料、つまり標本や観察、実験などのデータがこれにあたります。第三は、これがもっとも大切なですが、方法、即ち分類学や発生学や行動学などの決まったルールです。この三つを兼ねそなえて、はじめて研究したことになりますが、研究した人には、今度は公表する責任がある。」

「うわー、おそろしい。知ってしまった者は苦しまなければならないとは。」

「いや、かんたんですよ。要は、起承転結、つまりテーマの設定から考察に至る過程さえちゃんとすればいいかえれば、ある事柄について、今までどのへんまでわかっていたのを、自分が、これだけやった結果、ここまでわかった、でいいんじゃないの。」

「テーマの設定、これが一番の問題ですね。」

コモリグモのあし

「今から数年前、1983年のことですが、私が博物館に就職がきまってドイツを引きあげる少し前のある日のこと、マーテンス先生が、とてもうれしそうな顔をしながら、研究室の机の上にあるシャーレを指さして、今度このクモについて学生と一緒に研究することにしたんだというんです。中をのぞいて見ると、なんの変哲もないコモリグモの一種がいる。*Al opecosa cuneata*というふつうの種類です。『こいつの第1脚を見てみろよ。これは絶対何かある！』彼は言います。

なるほど、よく見ると、 δ の第1脚の脛節がかなりふくらんでいる。しかし、これはこの種の特徴で、他の種と区別するのに便利なものです。私はそのこと自体はそれほど気にもとめませんでしたが、マーテンス教授のとてもうれしそうな、わくわくした顔の印象だけが残ったものでした。

それから、5年たった昨年、私は彼から送ってきた一篇の論文の別刷をみて、あの日のことを、彼の顔をすぐに思い出しました。Zoologische Beiträge誌の31巻に載ったその論文は、『スジコモリグモ類の求愛行動』というタイトルで、Dahlem, GackそしてMartensの3人の共著となっています。

彼らは、ヨーロッパ産のスジコモリグモ類4種の求愛行動を研究し、それらを比較、論議しています。この研究が、あのときの『なぜ*Al opecosa cuneata*の δ の脚は太いのだろうか？』という疑問から始まったことを知っている私には、改めて、疑問を持つということが、研究の第一歩だと感じました。その疑問に答えを出すべく、そのクモを飼育し、生活史や行動を調べる。さらに同じ属の近縁の種類の行動と比較する。 δ 脛節の肥大はどういう意味があるのでしょうか。彼らは、この種の求愛行動の途中で、Prüfbissと名付けられた行動、即ち、 δ がさし出した第1脚の脛節のふくらみを δ が上顎でかむことをつきとめました。

ここまででは我々でもできそうです。しかし、彼らは、さらに、その部分の組織を細胞学的に調べ

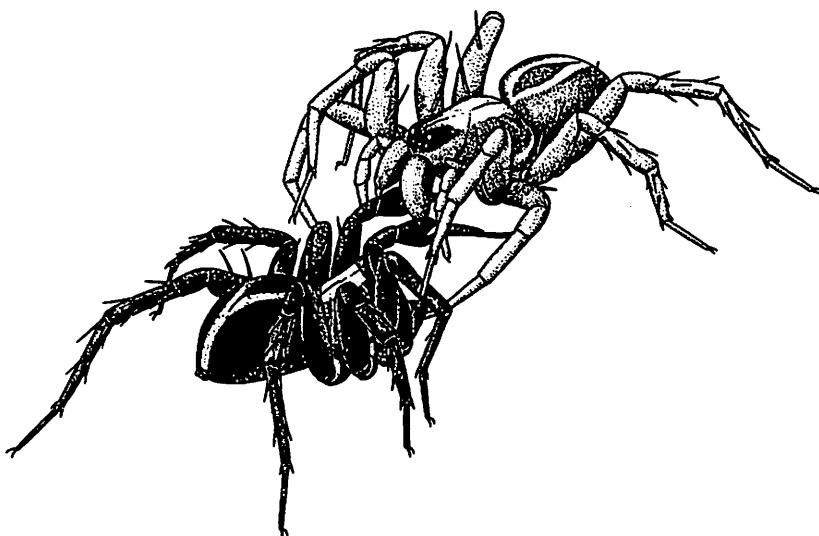


図. スジコモリグモの一種 *Alopecosa cuneata*
の求愛行動 (Dahlem, Gack & Martens, 1987より)

る。電顕を使って表面構造を形態学的に観察する。そしてその脛節に大きな腺細胞の組織があって、そこから分泌されるであろう化学物質を♀が、味覚によって感じとっているというところまで追っていく。

この種に最も近縁な *A. pulverulenta* という種の♂の脛節はわずかにふくらみ、色彩も他とコントラストがついているのですが、彼らは、*cuneata* の♂の第1脚脛節の特徴はこの種から派生してきたものと結論づけています。それは、この2種をはじめ、他の近縁種を、形態学と行動学の両面から研究した結果導かれたものなのです。私はここまで読んでやっとのどのつかえが下りた思いがしました。世の中には途中でつっかえてしまう論文も多いんです。」

「テーマが設定される、つまりおやへんだなと思ってから、ペーパーになるまでには5年かかっていますね。『テキ』ながら、ねばり強い。」

「テーマの設定がいかに大事かがわかるでしょう。5年は短い方かも知れない。あまり大きなテーマにしてしまうと一生かかるかもしれないんですよ。棺桶にクモをつれて入ってもしょうがない。」

パズル

「そろそろ話をまとめたいと思いますが、あなたの考えるところをおききしましょう。」

「私は、学問というのは一種のパズルのようなものだと思うんです。」

「ジグソーパズルみたいなものですか。」

「そうです。あれ、箱に絵が描いてあるので、どんなものが出来るか、わかってしまうんですけど

ど、仮に目をつぶって買ってきて、箱は捨ててしまって、こなごなになったピースの山を前にして、さあ始めよう、ってやるとなかなかたいへんですよ。」

「一片をとり上げて、これはこの場所だ、とわかる奴は天才で、実際は、まず四隅にあたる四こまを探しますね。それからへりというかはじめのこまを探してそれらをつなぎ合わせていきます。」

「その通りです。そうすれば、意外にはやすく、そのパズルの大きさを知ることができます。」

「しかし、それからは大変だ。もっともどんな絵が現われるか楽しみではありますね。徹夜でやったりして。」

「たいへんな作業にはなりますけど、ワクをつくるのと違って、かなり機械的な仕事です。さて、ジグソーパズルのピースの一つ一つを、それぞれ研究ないし、一つの論文にたとえてみます。すると、ある自然現象を解明していく過程とよく似ている。つまり、はじめから全貌は見えない。まず独創的な研究（四隅にあたる）が出て、次にそれらをつなぐ研究が行われる。ここで一つの体系が出来上がる訳です。しかし、それだけでは、大体のところしかわからない。一つ一つピースを組み合わせていくことで、やがて全体像が浮び上ってくるわけです。」

「『ジグソーパズル』の大きさによって、一枚の絵は、生物学であったり、発生学であったり、クモ綱の分類学であったり、日本産ハエトリグモ科の系統であったり、シノビグモの生活史であったり、大小様々でよいわけですね。ジグソーパズルのように皆でワイワイ言いながらできるといいのですが。」

「それぞれの人には、得手不得手や好き嫌いがありますから、どんなピースをつくるかは自由なわけですが、出来上ったピースの形がいびつだったり、間違っていたりするとうまくはまらない。もちろん完全な研究はあり得ませんから、あとから、修正をしながら進んでいくわけです。」

「プロ野球も高校野球も基本的なルールは同じです。草野球だからといって三るいから一るいに反対回りはしません。たとえばKishidaiyaについても、どうせやるなら、東京ドームで草野球をやろうじゃないですか。」

ファンクラブ

「クモという動物は、幸い、人に嫌われてきたので、案外わかっていないことが多いんです。しかも、日本に約1,500種、世界でも30,000種ぐらい、ちょうど良い大きさの動物群です。情報量や文献の数もそう多くはない。しかも材料が簡単に手に入ります。海にもぐったりしないですむでしょう。そして、八木沼先生のクモ図鑑をみていただければわかると思いますが、日本のクモの分類に関しては、大きな枠組みはすでに出来ています。」

「萱嶋泉先生のおかげで出来た談話会も20年の間にずい分大きくなりました。先日、先生の喜寿のお祝いに集まった方々をみると、なんとなく萱嶋泉ファンクラブのような雰囲気がありました。なるほど、クモとつき合う楽しさは、先生から教わったのだと思いました。これからは、私どもが、他の人たちにクモの研究の楽しさを伝えていかなければならぬでしょう。本会も、本当の意味の『クモのファンクラブ』のようになっていくといいと思います。」

「私は、よく故高野伸二先生から、『小野さんまたゴチャゴチャとたくさん書いていましたね』

と言われました。そのたびに、ああ読んで下さったなとうれしく思った次第ですが、今これを書いていて思い出したのですから、またゴチャゴチャと書いてしまったようです。読んで下さった方は前もっておわびします。」

KISHIDAIAと私

佐藤幸子

私が東京蜘蛛談話会に入ったのは、KISHIDAIAが発行された年でした。毎月1回おこなわれた萱嶋先生のお宅の集まりにも、ただ夢中で参加しておりました。今なお強烈におぼえていることは、大河内哲二さんの卒業論文を見せて頂いて気が遠くなったこと（これから歩む自分の道のりのけわしさを考え）、10月5日開催予定の東亜蜘蛛学会第一回大会の準備お手伝いで気ぜわしかった事などです。初期のKISHIDAIAをふりかえってみると、1ヶ月に1回どころか2回3回と発行されています。たとえ頁数が少なくとも、その頃の会員の皆さん意氣込みがうかがわれると言うものです。その様な熱意が反映してKISHIDAIAが今まで続き、年を加えるごとに内容が豊富になって行ったのではないでしょうか。

自身はというと、実際のところ何をどうしてよいかわかりませんでした。興味のあったのはクモたちの行動でしたが、その面白さをどう書き現してよいのかやり方がわからなかったのです。でも観察した事実を皆さんにお知らせしたい一心で、素直に作文を書きました。今見なおしてみるとたりない事が多くて本当に未熟な報告文でしたが、しかし書かないよりは書いた方がよかったです。なぜならば、その事が私自身の前進の第1歩になったからです。

よくお話をしますように私は、生物の『せ』の字も知らない上60の手ならい同様の時期にクモ学を志した1家庭の主婦です。見廻せばそうそうたる学者である先生方や、その卵である若者たちの間にはさまって、心細い思いをしながらヨク勉強を続けてきたものだと思います。それは地球上の生き物仲間であるクモが大好きであり、クモたちの生活がどうしても知りたかったからであります。そして忘れてならないのは、諸先生方や若い先輩たちの手助けとはげましが、私を現在までに育ってくれたのだと言うことです。これらの御好意に報いるには、私なりに得た観察をKISHIDAIAに書くことしかありません。

幸いにもKISHIDAIAは、寄稿されたものはすべてのせてくれます。この様なチャンスを目の前にして無駄にあつかう法はありません。クモの世界については、まだまだ解明されないことが山程あります。そして私たちそれぞれの、目の前で見た事や経験した事の1つ1つが必要とされています。たとえどの様なことでもKISHIDAIAにのせておけば、それが必要であった人はすぐ利用できるし、小さな事だったとしても長い間に沢山集まった時には、思いもかけない事柄が浮き出てくるのではないかと考えます。この様なKISHIDAIAを母体とした我々の成長が私の夢なのですが…。

KISHIDAIAは私の東京蜘蛛談話会の在籍年数と同じです。それをいつも胸にかみしめて、できるだけ寄稿するつもりでおりますので、今後共よろしく御指導の程をお願い致します。KISHIDAIAの発展を信じながら筆を置きます。

談話会をクモの博物学的研究のツツカに

池田博明

クモという共通の話題で子供から老人までが集まることのできる会、それが談話会の理想の姿だと思う。とはいっても私は談話会がクモ学以前の易しい会であればよいとは思っていない。それよりもむしろありきたりのクモ学以上のものを生み出す会であると思っている。というのは次のような事情からである。

最近、日本の大学からは分類学や系統学といった博物学的な講座が消滅していっている。しかし、実は正確な分類と種の生活の徹底的な観察のないところに、正しい生物学ができるわけがない。生物の共通点を探る「還元的な」見方と、生物の多様性を探る「博物学的な」（カタログ的な）見方の両方があって初めて、正しいとらえ方ができるようになるのだろう。そのような意味で談話会には大学にない講座を埋めるような役割を期待したい。大学の外にある「系統分類学講座」というわけである。

現在クモに関しては博物学的な見方も還元的な見方も、どちらも不十分である。クモの生理生態記事を種毎に編集しなおして『クモ生理生態事典』をまとめてみて、そのことを痛感した。吉倉真氏の『クモの生物学』（学会出版センター）を見ても、そのことを察することができる。吉倉氏の本は目配りの広さと考察の確かさで感動的な本であるが、それゆえにまだ研究されていない分野がはっきり分かる。例えば私達はオオヒメグモの網の作り方をきちんと知っているだろうか。昨年、ようやく広島の小学校2年生二瀬清美さんが観察し、記録したことだ。また例えばヒラタグモの求愛行動を知っているだろうか。分類学的に問題になっているチリグモと比べてみて、どれほど違いがあるのだろう。普通種でさえ、よく観察していないのである。もっともこのような事情はクモだけではなく、一部の生物を除くと実はなにもわかっていないのである。

普通種でさえこの通りだから、馴染みの薄いクモとなると、面白いテーマがありながら、ほとんど注目されない場合がある。例えば社会性のクモは日本にはいないように思われている。なるほど南米のムレハグモのようなクモはいないものの、メガネヤチグモと同様な子育て習性を持ったクモならいるのである。それはセスジガケジグモである。このクモの特異な習性を発見したのは鈴木勝浩さんで、その記録はKISHIDAIAに載っているのだが、それがたいして注目された様子もないのは驚きであった。

時代に先んじた研究成果が評価されないのは今に始まったことではない。そこで取り合はず私達に出来ることは観察に努めることかもしれない。博物学とは珍奇な生き物や奇妙な習性のコレクションといつてもよく、以前から写真や映画が研究の重要な手段となってきた。しかし、この部門でもイギリス等と比べて日本の立ち遅れは大きい。イギリスではオックスフォード大学が附属施設に映像部門を持っているし、BBCのライブラリーは壮大なものである。日本でもシネ・サイエンスやネイチャー・シネ・プロ、岩波映像といった世界的なテクニックを持ったプロダクションが活動しているのに、せっかくの映像は使い捨ての状況である。利用しようと思った時に利用しやすくな

つていなければ何にもならない。

しかし、ビデオの普及で個人レベルでも放送されるたびに番組を録画しておくことは可能になった。映像の持つ情報は大きい。ビデオカメラも手に入れ易くなった。そのつもりになれば、アマチュアでも研究できる部門が生物の生態や行動の分野にはまだまだある。専門家はもっと積極的に規範を示す必要があるのではないかだろうか。KISHIDAIAをそのような活性化に役立つような会誌に育てていきたい。まだまだクモ学には蓄積が必要である。

東京蜘蛛談話会と私

高 橋 登

私が最初に蜘蛛に興味を持ったのは、高校の生物部に入った時からです。当時私の母校法政二高生物部では丹沢の生物調査をしており、その中で丹沢産のクモのリスト作製と生態観察が進められていました。そしてそのころは、文献の数も少なく斎藤、八木沼両先生の図鑑だけが頼りでリストに一種、二種とクモの種類が増えていくのが、なによりもたのしみの毎日でした。

高校二年の時、蜘蛛学会と東京蜘蛛談話会に同時に入会し、第一回の談話会例会に参加させていただき、この時初めて萱嶋先生、新海さん、松本さん、小野さん、加藤さん等とお会いすることができました。

この第一回の例会のメンバーが20年以上たった現在も活発に活動していることは、萱嶋先生を初め談話会創立会員の努力に負うところが大であることはもちろんですが、この談話会がほんとうに楽しい会であり、非常に蜘蛛愛好者にとって住みやすい環境である証拠ではないかと考えています。

蜘蛛を愛する人々の、人と人とのつながりの強さ、それは、蜘蛛の糸の強さと同じではないかと思います。

談話会のメンバーにより今まで稀薄な存在とされていた蜘蛛が続々と発見され、また不明だった生態もつぎつぎと明らかにされています。談話会で毎年行なっている観察会、合宿等のリストの蓄積は談話会活動の大きな成果の一つであり、今後基礎資料としてキシダイアは、重要な文献になっていくことでしょう。談話会のますますの発展を祈りこの会が50年、100年と続くことをねがいます。最後に会員の平均年齢が高くなっています。会の若がえりをはかり、底辺の拡大はこれから談話会の最大の課題ではないかと思います。

談話会と私 —— 3年前の印象

板 倉 泰 弘

東京蜘蛛談話会——この言葉を聞いて私が連想するのは、どういう訳か熊田・松浦両氏のお顔であります。人の頭に浮ぶイメージというものは通常「その人物の経てきた体験や経験等により刻みつけられた強い印象がベースになっている」と言われます。私が特に日常お世話になっているのは毎月1回加藤氏のお宅で行われる「東京クモゼミナール」の方々（加藤氏の他、新海（明）氏、池田氏、佐藤氏、宮下氏）ですから、彼らのお顔が想い浮かぶのが普通でしょう。また、大学の先輩で談話会に紹介して下さった萩本氏（旧姓井上）を思い出しても良い筈です。なぜだろうか。

まず、イメージとして連想されるためには「強い印象」でなければなりません。人が強い印象を刻みつけられる条件がどういうものかと言えば、柔らかな優しいものではなく、むしろ厳しい状況に置かれた時や自分が今まで抱いていた思想や観念を覆された場合です。このことを念頭に置いて入会時の1985年10月を想起してみることにしましょう。

当時、私は東京農業大学の1年生で愛知県から東京に飛び出して来たばかりでした。入学の動機は「クモについて勉強したい」ということでしたが、クモというだけの漠然としたもので何を研究すべきかすら判らない状態でした。そんな中で中学時代から関心を寄せていた某運動に参加し、いつしか多忙と指導して下さる方もいらっしゃらなかつたこと等からクモの事が出来なくなつてきました。そして、それでもとの思いで8月に初めてクモ学会に出席して諸先輩方の発表を聞かせて頂くうちに「私は何をやっていたのか／やはりクモをやるべきだ！」と改めて気付き、研究時間の確保のために「体調が悪い」等と偽って運動に参加するのを渋るようになつていったのです。そうした折に新宿駅西口の「滝沢」という喫茶店で開かれていた談話会の運営委員会に呼ばれ、そこで熊田氏と松浦氏にお会いしたのです。彼らは私のやっていた運動をやめて談話会に入会するよう勧めて下さったのですが、「東京クモゼミナール」の方々と大きく違つたのは（アルコールの勢いもあってか）大変に峻烈な態度で私を罵倒したことでした。私はあくまでも自分の意志で12月には運動の方から手を引く予定でしたが、その時の印象が強く刻み込まれたのが「東京蜘蛛談話会」と聞くとすぐに彼らを想い浮べざるを得ないようです。

今、私はキシダグモ類の生態（幼体の網や婚姻贈呈等）に关心を持って週に1、2回フィールドに出ておりますが、その私があるのは談話会の皆様のお蔭であると思っています。また、中部蜘蛛懇談会の会員で愛知県人ですので1989年度の合宿等を通じて東京と中部の交流がさかんになり、東京の方が先達となって下さることをお願いします。そして何よりも会の発展することを祈つてやみません。

バック・トゥ・ザ・フューチャー

新 海 明

今日は久しぶりに裏高尾から景信山方面へ採集を兼ねて、体力維持のためのハイキングに行ってきました。寄る年波には勝てずかなり苦労の山行となってしまった。

久々に高尾の駅から歩いたのだが、裏高尾の排気ガス公害は評判以上にすごいものだった。なにしろ、蛇滝付近を通る東京環状道路と中央高速とのジャンクションから撒き散らされる排気ガスと騒音といったら並の人間の耐えられるようなものじゃない。ジャンクションを横目でにらみながら遠い昔ののどかな裏高尾の山並を思うばかりだった。

かつて、トリノフンダマシやムツトゲイセキグモのいた小下沢は環境保全地区に指定されたとはいえ、沢沿いにはバンガローが建てられたり、林道の整備が進み、例のコンクリート製のベンチがやたらと置かれ、昔の面影など全くなくなった「自然」公園があとに残されたのみである。いつものことながら、環境保全と称して環境破壊を公然と行っているのだ。雑木（！）雑草（！）は切り払われ、原植生といわれる樹種を次々に無理矢理植えて「自然に戻った」と唱える感覚は一体何なのだろうか。環境保護ブームに湧いた1970年代から我々は少しも進歩していないようだ。

影信山にとりつき山頂に至れば、遠く新宿の副都心を見渡すことができた。特異な形をした都庁の超高層ビルがよく目立つ。山手線沿いの目白から新宿にかけては壁のように高層住宅が続く、目を転じて下方を見れば多摩丘陵を団地群がジワジワと食い進む。前世紀の終わり頃に唱えられた地方分散型の都市計画は遅々として進まず、都市への人口の集中化は限りなく進んだ。おかげで、この21世紀のハイテクの時代とっても、水不足は相変わらずで、夏になると飲み水はお天気まかせといった塩梅で江戸時代そのままである、といったことは昭和の昔と変わりがない。郊外の排気ガスの汚染も進み、この辺りなども窒素酸化物濃度などはいつも基準値スレスレである。山へいい空気を吸いに出掛けたのは昔のこととなってしまった。しかし、65歳を過ぎた今とっても若い時分に通った高尾山の山道は、やはり忘れられない。そういうえば、この間あった談話会の50周年の記念採集会でもそんな話題がでたものだ。みんな若い時に通った山々への思いは断ち切れずに、年に一度くらいはそれぞれの山へ出掛けているようだった。

談話会も最近は若い会員の入会が目立つようになった。ハイテク・バイオの熱もさめ、再び自然本来の姿を見つめ直そうとする若者が増えつつあるようだ。また、前世紀の終わり頃から言われ始めた、博物学の見直しが少しずつ進んだせいもあるのかも知れない。

半世紀以上の昔、「生物学の近代化を！」と声高に呼ばれていた頃に、自然を理解するには、記載的な仕事などしていくはダメで、「生産生態学的な観点からエネルギーを中心に」とか、「いや個体群を中心に数量的に」とか、はたまた「生物個体は遺伝子の入れ物であり、いかにして自己の遺伝子を増やすかの工夫として進化を捉えねばならぬ」などといった見方がその時々の流行となり、日本の研究者を右往左往させてきた。しかし、今世紀になってからは西欧の科学がなんたるかが、日本の科学界でも再検討され始めた。日本の研究者も欧米のごとく、さまざまな研究者が自然を調

べるための方法として、種々の見方・手段を用いて研究を進めていくという当たり前の姿になりつつあるようだ。生物の個々の種の生活を記載し続ける人がいてもいいし、それらを貫く法則がある特定の見方に沿って解析する人がいてもいいはずである。自然を追求する方法も自然そのものごとく、もっと多様性に富むことこそが必要であろう。まあ、クモ学の場合はここ30年間、凡そこのような方向で進展してきたようである。池田さんの「クモの生理生態事典」をみれば一目瞭然で、今回の増補改訂版はとうとう1000ページを越してしまった。その充実ぶりが伺えるというものだ。

幸いにして、談話会の雰囲気は昔と変わらず、採集会が終わればいつものように飲み屋へ行って打ち上げだ。私も熊田さんも松浦さんも往年のようにには飲めなくなってしまったが、ムードにはすぐ酔ってしまう。その熊田さんは数年前にJRを退職されて今は悠々自適の身、相変わらず全国の山野を駆け巡っておられる。谷川さんは昨年退職されて、その退職金で西表島に念願の土地を求めて、余生を島で送ることである。この夏にでも尋ねてみようと思っている。そうそう、それに萱鳴先生は今年107歳になられてまだまだお元気であるし、長野の千国先生も同様で、平成元年に出版された「クモ図鑑」の改訂3版を来春発行するための準備でお忙しいようだ。還暦を過ぎてグチをこぼす我々は未だに先生たちの前ではヒヨコ同然でいつも叱られている。両先生のことを思えば、まだまだこれから十や二十の仕事ができるはずである。頑張らねば、頑張らねば。

キシダイア発刊20周年によせて

谷 川 明 男

キシダイア発刊20周年の機会に、私なりのキシダイアのあり方について少し考え方を述べさせていただきたいと思います。

私は、キシダイアはとにかくクモに関することならば何でも扱う情報誌であってほしいと常々思っています。採集記録・観察記録はもちろんのこと、文献の紹介や研究の指針などは、いずれもクモに興味を持つ人々にとって貴重なものであるはずです。こんなクモがこんな所にいた、こんなクモがこんなことをしていた、見たこと気がついたこと、そんな小さな発見の記録がぎっしり詰まった情報のるつぼであってほしいのです。思うに、われわれ各個人の手元に眠ってしまっているデータや知識があまりにも多いのではないかと思うが、これは大変もったいないことだと思います。また、ある程度クモの研究をした人たちにとっては常識のことでも、実はどこにも記録されていないことが多いのではないでしょうか。ある人にとってはあまり面白くないことでも、別の視点を持った人にとって大変興味深いことも多いと思います。それらが記録されていけば、クモ学界の発展ももっと速くなるのでは、と考えます。たとえ一つ一つの記録は断片的なものであっても、それらが積み重なったとき、貴重な資料となっていくのではないでしょうか。そのような情報交換の場としてキシダイアが活性化していくことを望んでやみません。

蜘蛛学会が発展てきて、学会誌が専門性を強くしてきている今こそキシダイアのような同好会誌がその存在意義を發揮するときではないでしょうか。

入会と初めての投稿

熊田憲一

クモのことなど何も知らないに等しかった私が、談話会に入会したのは1971年のことで、会員40数名、会費は500円でした。談話会が発足して4年目、KISHIDAIAが出てから2年目でしたが、まず入って驚いたのは、クモなどというほとんど人の見向きもしない生きものに、何と興味を持つ人の多いことか。

最初に参加した活動は滝山城跡で行われた第1回の採集会で、山川守君に連れられておそるおそるの同行でした。何しろ高校の生物部では昆虫班で甲虫だの蜂などの採集に熱中していたため、山川君に「談話会はクモ以外のことは何もしないから、虫なんか採っていると怒られるゾ。」と言われていたし、その上入会金を送ってから入会通知までが半年、この時も「おまえは虫をやっていたから入会審査にひっかかったんだ。」などとすでに入会済みの山川君におもしろおかしくからかわれてもいたからです。しかし、採集会に参加してみればそんなことは全く関係なく、ただただクモのことばかりの異常な、かつ真剣な会でした。山川君に誘われてクモに足を突っ込んだものの、右も左もわからずにいましたが、それまで図鑑でしか知らなかったクモや、初めてのクモを次々教えていただき、その楽しさにやっぱりクモを始めてよかったです、と思ったものでした。後日入会審査などはなく、ただちょっと申込書が机の中で眠っていましたことも分かり、安心しました。

それからしばらくして編集の小野さんに何か投稿をと勧められ、初めてKISHIDAIA34号(1972)に観察記録を書きました。オナガグモやムナボシヒメグモ・ヤマトカナエグモに関する“クモを食べるクモの観察”がそれでした。しかし、その中のヤマトカナエグモの同じような観察はすでに中平清さんが昆虫と自然(1967)に“強盗グモ(ヤマトカナエグモ)”として報告していました。さほど文献やバックナンバーなど持っていない私は、編集の小野さんからその報告を紹介していただき、読むことが出来ました。この報告を知らずに観察していたのにもかかわらず、中平さんの観察されたことと同じ観察をしていたわけです。投稿を止めようかと考えていると“中平さんの観察のほかにも新たな点や、中平さんが出していた疑問に少なからず答えられるところもあるから”と再投稿を強く勧められ、書き直して再び投稿することにしました。その後、中平さんから『自分の記録の再確認をしていただきありがたい』とお手紙をいただき感激。このときの手紙で“観察記録にしても何にしても再認性が重要で、観察記録が発表されるとそれが全て正しいと思われるがちだが、その記録が一般的であるのか特別だったのかは、記録を重ねていくうちにはっきりするものである”ということを教えられました。

ところでみなさんは“DRAGLINE”をご存知でしょうか。野外や飼育で観察したちょっとしたことや、1つの報文に成らないような些細なことを集めたKISHIDAIAの一コーナーです。小さな記録の集合ですが、初めての投稿から得られた体験をふまえて見直してみると、記録の再認といった点からも、たいへん重要なポイントに位置すると思うのです。しばらくDRAGLINEは途絶えていましたが、またここで復活してきました。“チリも積もれば山となる”です。“このくらいの

ことでは、とか、こんな事もうみんな知っているだろうから”などと言わず、とりあえず記録にとめたことがらを、正確に報告しあいませんか。文献収集や文献読みももちろん大変重要なことです。時間を要する内容に関してはあせらず文献を沢山持っている人や、専門家にどんどん質問し勉強してゆきましょう。それによって総合的に報告する段階では、過去の文献を慎重に検討することができます。小さな観察や記録を報告しあうことが、決して悪い結果を生じないことは、20周年を迎えたKISHIDAI Aがよく物語っています。クモ研究にはまだまだ十年二十年先があります。しっかりと記録と再認という土台が残されていれば、さらにクモの研究にとって良い糸口が開かれると考えています。

DRAGLINEへの報告は小さな記録の目を育てる上でも喜ばしい場です。投稿経験の無い方や、小中学生の皆さんにとって、報告文を書くというのは大変なことです。誰でも始めは素人なのでいろいろな失敗もします（私など古いだけのカビだらけの素人）。でも良いではないですか。あんなこと、こんなことでも、クモのことなら何でもDRAGLINEなら書けます。書くことによりしっかりと見たつもりがそうでなかったり、と気づくこともでできます。違っていても記録に残っていれば、必ず後の人気がどこかで正してくれます。また、自分で報告し直すことも可能です。せっかくクモとつきあっているのですから、あなたも初めての投稿をしてみようではありませんか。

初めての投稿から、話がDRAGLINEへずれてしまいましたが、そんな出会いと言うか、関わりをもったKISHIDAI Aの編集が、まさか私のところに転がり込んで来るとは思っても見ませんでした。編集の小野さんから、何の気なしに見せられた40号の初校を、勧められるまま校正したのがいけなかった。これが出来た年、何と小野さんが急速ドイツへ留学。小野さんがドイツへ発つ数日前、分厚い封筒が届きました。開けてびっくり、KISHIDAI Aの原稿です。すわ、これは何だ。「校正したことがあるから平気ですよ」とは小野さん。反論する間もなく、彼はドイツに行ってしました。

だいたい編集の何たるかも知らないのに、どうしたらいいのか。第一印刷はどうするのか。先輩に相談したら「それは全部自分で考えるんだ。」とのこと。何とも冷たい。山川君が協力をしてくれることになり、最大の難関であった、会の運営を圧迫しない安い印刷屋も旧姓田中理恵さんが紹介してくれました。何とか態勢を整え、41号を出すことが出来ました。この時はすでに原稿があったから良かったのですが、それからが地獄でした。なにしろ原稿が来ない。何で来ないのか。クモみたいな変なことを、自分から進んでやろうと言ってこの会に入っている人ばかりなのだから、自分のしているクモの事を何で発表しないのかな、などと考えてしまいました。また先輩に相談したら「それは自分で書くんだ。」とのこと。これまた何とも冷たい。そんなことで、リストなどをずいぶん書かせてもらいました。しかし呼び水にもならなかったのは残念でした。小野さんの留学に習って、結婚を期に嶋田さんに編集を引き受けてもらい、一安心しました。編集を止めたとたん、ぱつたりと原稿が書けなくなりました。嶋田さんには悪いことをしました。その後、途中萱嶋先生の記念号ともう1号を新海さんと貞元さんが担当したものの、嶋田さんは5年間7号を担当しました。言うは易すし行うは難しの5年間で苦労の多かった事と思います。その彼も、脱サラを期に退任。ピンチヒッターで再び私のところに編集が舞い込んできました。2年で3号を担当し、今回谷川さ

んに繋ぐことが出来ました。編集の時一番つらかったのは会誌が予定通り出ない、と総会で怒られるること。残念だったのは会費は払うが原稿は出さない（ボランティアのようで、これは別の意味で嬉しい）人が多いこと。嬉しかったのは原稿が届いた時でした。そんなわけで、これからは1号1編は投稿しようと目標を立てています。

KISHIDAI Aもこの20年で月1回4～6頁から年2回30～40頁と、だいぶ発行形態も変わってきました。これからもどのように変わって行くのか楽しみでもあります。そのときの方向は私を含め皆さん次第です。上向きである様、みんなで楽しく努力しませんか。20周年ということで、入会の思い出、初めての投稿で書き始めましたが、だいぶKISHIDAI Aの思い入れも入ってしまったようです。

最後になって恐縮ですが、26号から楽しい表紙を提供していただき、こちらの我儘な変更願いにも快く答えて頂いた小澤實樹さんに、これからのこととも含め心よりお礼申し上げます。

一 般 原 稿

岸田久吉先生の遺稿「ジャウゴグモ」について

新 海 明

東京蜘蛛談話会の会誌「KISHIDAIA」は岸田久吉先生に因むものです。そこで、当会としましては、この機会に先生の多くの遺稿の中から、このまま埋もれさせておくには惜しく、現在においてもなお価値の高い原稿を選定し発表することにし、その作業を筆者が担当することになりました。ここに掲載する台湾産のジャウゴグモ（旧表記のまま）の再記載の論文がそれですが、著者はすでに故人で、また記載した標本も残っておりません。そこで、このような体裁をとり発表することにしましたが、読者におかれましては、引用等にあたっては十分に注意して取り扱っていただくようお願い申し上げます。

Macrothele holsti R.J. Pocock 1901.

和名 ジャコウゴグモ（岸田久吉命名）

1. *Plesiotypus*は明治44年6月1日、台湾阿猴廳 龜仔角に於て、渡瀬博士 朴澤学士及安田信吉3氏が採集せられた成熟せる♀の一標品で、東京帝国大学理学部動物学教室に保存してあります。
2. 測定 体の全長 16.5 mm, 上顎を入れて 18.5 mm, 此2測定は共に蜘蛛を除いてやったものであります。其わけは此種の蜘蛛は上向に曲って居て測り難いからであります。背甲の長さは 6.5 mm, 最大の幅は 5.5 mm, 腹部の長さは 9.5 mm, 最大の幅は 6.5 mm あります。附属肢の測定は mm 単位で次の表の通りであります。

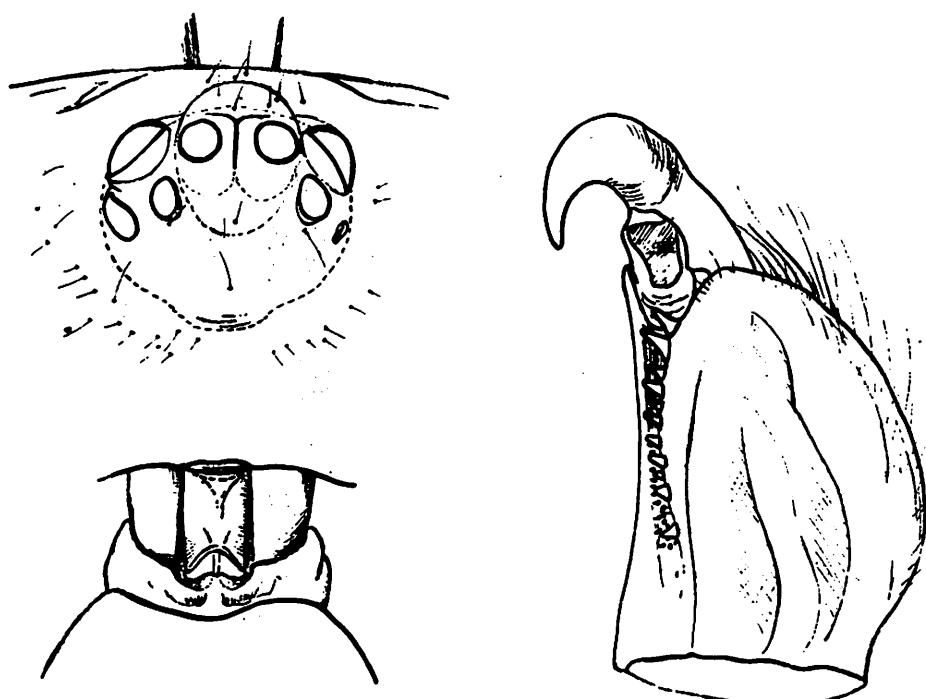
	全長	腿	膝+脛	膝	脛	蹠+跗	蹠	跗
触鬚	8.7	3.0	3.2	1.2	2.0	—	—	2.5
歩脚 I	15.0	4.5	5.5		3.0	5.0	3.0	
" II	14.0	4.0	5.0	2.2	2.8	5.0	2.5	2.5
" III	14.0	3.5	4.5	2.0	2.5	6.0	3.5	2.5
" IV	16.5	4.5	5.5	2.0	3.5	6.5	4.0	2.5

上顎体節の長さは 3.5 mm, 高さが 2.5 mm, 尤大の幅が 1.5 mm, 牙の長さが 2.5 mm あります。前疣の長さは 1.8 mm, 後疣の長さが 6.7 mm (基節は 2.5 mm, 中節は 1.7 mm, 末節が 2.5 mm) あります。

3. 形状 背甲は橢円状矩形、僅かに中凸、眼域の近くは他の部分よりも際立って高まって居る、前端は後端よりも広くあります。中窓は背甲全長の後方 1/3 にあって横向、端直、深くあります、眼丘と殆ど同幅に見えるが幾らかは廣いのであります。額は短く、前列中眼前では中眼丘の長さも加へてさへ中眼直径の 2 倍、中眼丘を除いて考へると中眼の 1 直径に等しい事になります、

前列側眼の前では側眼の 1 直径に等しくあります。眼丘は殆ど半円形かと見える所の長い椭円形で長さは幅の $1/2$ 位横向にある事は殊更云うまでもない、而して 3 個の隆起にわかれています。中央のは尤大きく 円状倒卵形で前列中眼が此上に在り、中眼向に縦走する 1 溝が出来て居ります。側丘は披針状倒卵形で低く且つ小く之れに両列の側眼及後列中眼が位置を占めて居ります。前列は弱く後曲、上面から殆ど端直に見えます、後端線は端直、中眼は側眼よりも明かに小形、中眼間は中眼の 1 直径に等しく中側眼間の約 2 倍（弱）あります。後列は前列と同幅前曲、前端線は僅かに前曲、中眼は側眼よりも明かに小形、中眼間は非常に廣く中眼直径の 2.5 倍、前列中眼間の約 2 倍あります。中側眼間は前列の中側眼間よりも狭くあります。

中眼域は梯形、前辺は後辺の 1.5 倍、長さは後辺の 0.7 倍位。中眼は前列のが極めて僅かに大きくなります。両列中眼相互の間隔は前列中眼間よりも僅かに狭く、前列中側眼間よりも僅かに廣くあります。両列側眼間は前列中側眼間に等しくあります。後列中眼から前列側眼に至る間は前列中眼間に等しくあります。但し以上眼の記述は眼丘の左半に重きを置いていたのでありますが右半では後列側眼が発育不完全であるために著しい変化が起って居ります。両列中眼間は後列中眼から前列側眼までの間隔と等しくなって居り前列中側眼間よりも廣くあります。それから両列中眼が同大になり、後列中眼の長径は僅か乍ら前列中眼の長径を超過して居ます、後列中側眼間は前列中側眼間に等しく 両列側眼間は前列中眼間に等しくあります。後列側眼は披針形で斜に走る中央の溝があります。



胸板は円状心形，中凸，長さは僅かに幅よりも大，前端は緩かに凹形，後端は第4基節間になつて急に強く鋭尖形になって居ります，印刻は2個，縁位，第3基節に対して居る卵形の浅いくぼみであります。下唇部は梯形，長さは最大の幅の0.7倍位，僅かに中凸，前縁に沿うて2列に約15～16本の小歯が生じて居ります，前端は後端の約2/3ありまして端直であります。

上顎は狭く高い体節を有して居ります，体節の前上面には刺毛が多数に在ります。牙溝の内堤には大体牙に近づく程大きくなる所の12歯があります，尤も基部では大小交互して居ります。牙溝底の基部には10+歯が1線上に並んで居り更に若干の小突起があります。外堤には毛が僅かにあるだけで毛総も歯もありません。

下顎は卵状4辺形，内縁前部から前縁基部にかけて25～26本の小歯が彙集して居ります，毛総は前縁の中央の4/6に在ります。

触鬚の節の長さの順位は腿，跗，脛，膝であります。刺は腿膝2節には無く（刺状剛毛があるだけで），脛には前側に2本（刺状毛は上下の両側に長いのが多数あります），跗の前後両面に各4本宛，合計10本あります。跗節の爪には基部の3/5に纖細な10本の歯が有ります。

歩脚の長さの順位はⅣ，Ⅰ，Ⅱ=Ⅲであります。刺は第1歩脚では腿の前側に1本，膝の前側に1本，脛の後側に1本，蹠の前側に1本 後側に2本，跗の前側下部に2本，合計8本あります。第2歩脚では腿の前側に1本，膝の前側に2本，脛の前側に1本，蹠の前側上部1本 末端下部に1本 後側に4本，跗の前側に3本 後側に1本，合計14本有ります。第3歩脚では腿の前側に1本，膝の前側に2本 後側に2本，脛の前側 上部に2本 中部に1本 下部に1本 後側上部に1本 中部に1本 下部に1本，蹠の前側 上部に2本 中部に3本 下部に4本 後側中部に3本下稜に4本末端下部に刺撥として5本，跗の前側上部に1本 下部に3本 後側に4本，合計41本。第4歩脚では腿の前側に3本 上稜に1本 後側に1本，膝の前側に3本 後側に1本，脛の前側中部に2本 下部に2本 後側上部に1本 中部に2本 下部に1本，蹠の前側上部に2本 中部に3本 下部に4本 後側中部に3本 下稜に4本 外に末端下部に刺撥として6本，跗の前側上部に1本 下部に6本 後側下部に5本，合計51本有ります。一般に腿膝2節に於ては刺は剛毛様であります。第3歩脚脛蹠の下側，第4歩脚の膝脛の下側には刺状の毛が夥しく生じて居ります。跗端の3爪はすべて有歯で，第1歩脚前上爪には6本以上 後上爪には10本。第2歩脚前上爪には6本以上 後上爪には10本。第3歩脚上爪には各9本 下爪には3本。第4歩脚前上爪には6本 後上爪には9本 下爪には3本の歯があります。

腹柄の上部中央の1/3は*Lorum pediculi*が占めて居ります此*Lorum*は半載した筒の如き形の部分が大部分を占め中凸になって居り後方では前曲な縫合線を有し其の後部は新月形を呈して居ります。

腹部は卵状，最も下面是殆ど平坦でありまして前方2/5は肺に占められ，後方1/5余は卵疣及肛門突起に占められて居ります。前疣はほそくて下面の後方2/3は溝状を呈して居ります。前疣間は前疣の長さよりも余計に離れて居ります。後疣は基部の2節は特に太くありますが末節だけはほそくなっています。肛門突起は*（つぶ）した半球形でありまして後疣の基脚よりも後方に在ります。

4. 色彩 全身暗紫色で、背甲、上頸は特に淡褐色を帶びて居り、下頸部の毛縞は黄赤色であります。歩脚の端に近い数節は一般に淡色であります。
5. 議論 以上の記載は*Macrothele holsti* R.J. Pocock, (1901, P.Z.S. vol. 1, p.214) とは幾らも一致点が有りませぬ、*Holotypus* はさうであったため當然の事であります。*Paratypi* に2個の亜成体があつて“触鬚のはやつと脛と同長 第1歩脚の脛及膝は*M. fuliginea* と同様に有刺”とあります。此の前段は の長さが膝+脛に等しい種があるためにことわつたものでありますから *Plesiotype* に関する小生の測定を以て *M. holsti* に同定しても大した差支は無いのであります。併て *Macrothele fuliginea* (1891, Ann. Soc. ent. France, p. 306) では第1(第2)歩脚の膝の下側に2列の刺を具えて居ります。然るに小生の *Plesiotype* では第1歩脚膝の刺は此点に於て合しませぬ、之は可也重要な相異であります併乍ら歩脚の武装を種の特性として論じるのに前脚を擇んだのは此マクロテレ群に就ては不適當であったのであると思はれます。(併し乍ら地理的分布からして或は疑のかかるとも思われる *M. palpator* R.J. Pocock とは全然ちがう、*M. palpator* には前膝に3列の刺があります。尤も今記した理由によって之もたしかな識別点とはしかけたいものである事は注意して考えて頂きたい)。翻って台湾近傍のマクロテレ属を列挙してみると
- 1) *M. fuliginea* E.Sjmon ジャバ
 - 2) *M. holsti* R.J.Pocock 台湾中部
 - 3) *M. maculata* T.Thorell ビルマ ジャバ
 - 4) *M. palpator* R.J.Pocock 香港 寧波附近
 - 5) *M. segmentata* E.Simon ピナン

でありますから さうの原記載とは第2歩脚の膝、第3歩脚の脛の武装が一致して居るだけに過ぎませぬけれど、此標品を矢張 *Macrothele holsti* R.J. Pocock に同定して置くのであります。ポcock氏は他種の標品を見て新種の記載をしたから多分正当な固定をしたのであります。が後の人気が同定をするのには氏の記文では不十分であります。殊に小生の場合には記文に詳かでない方の性のもので而も性に由る区別の可也はげしいトタゲモ科のものでありますから *Holotypus* と比較した所で容易にそれと同定は出来ぬ事と思ひます、故に単に産地の関係から決定した様な想像を起さしめる同定で満足して置かねばならぬのであります。

マクロテレ属に於ける位置は明かに E. Simon 氏の A 群 (1892, Hist. nat. d. Araignees, Tome 1, p. 184) 即ち *M. calpetana* C.A. Walckenaer の Series に属するものであります。

畸形として右側の眼域は興味のある点であります。恐らくは後列側眼右者が外界からの機械的障害のために発達を中止し、ために後列中眼と前列側眼が不釣合な発育をしたものであらうと思ひます。

掲載にあたり、本文はほぼ原文通りにしましたが、一箇所（3. 形状 の最後の部分）だけ判読不明の漢字がありました。この漢字は文脈より判断して「(つぶ)す」としました。また、図の上下は不明でしたので、筆者が判断したものです。

岸田久吉先生の遺稿は、1989年4月現在、岸田文庫に保管されていますので、ご利用希望の方は新海栄一氏までご連絡下さい。

なお、遺稿の選定にあたっては八木沼健夫先生にお世話になりました。また、本稿の体裁については運営委員会のメンバーの他に、新海栄一氏にご教示をお願いしました。ここに厚くお礼を申し上げます。

キシノウエトタテグモの交尾行動について

笹岡文雄

はじめに

キシノウエトタテグモ *Latouchia typica* の雄は新海(1969)によると、9～10月にかけて雌の住居へ移動する途中の個体が発見されることが多いという。筆者の過去5年間東京都豊島区の自宅屋内における、4個体の観察採集例も全て9～10月であった。したがってこの時期がキシノウエトタテグモの交尾期であり、雌との接触のための徘徊と考えて良いのではないか。

そこで筆者はその徘徊中に採集した雄と飼育中の雌を用い、どのような行動をおこなうか観察するための実験を行なった。

験体および方法

実験に用いた雌はトウカエデの寄せ植え盆裁 $20 \times 33 \times 5 \sim 10\text{ cm}$ (図1)に自然営巣したもので、その状態のまま飼育中の8年目と6年目(営巣確認時より1987年現在)の成体2個体を用いた(以下雌A、B)。また雄は1987年9月25日、10月8日、1988年9月15日に上記の通り、自宅屋内を徘徊していたものを採集した成体3個体である(以下雄甲、乙、丙)。

実験は1987年10月4日に雌Aと雄甲で、同じく10月10日に雌Bと雄乙、1988年9月16、17日に雌Bと雄丙の組合せで、それぞれ23～24時間の間におこなった。また雌の入った鉢植えは飼育中のままの位置(図1)地上1.70mの台上で、それぞれの雄を雌の住居の左3cmに頭胸部をむけて置き、その後の行動を観察したものである。また10月10日の実験の際に写真撮影を行なった。

さらに1988年の2回については雄がまったく反応を示さなかったために、実際の行動が観察できたのは1987年における2回のみである。したがって本稿のデータもその詳述である。

結果

まず1987年10月4日の実験について述べたい。雌Aの住居付近におかれた雄甲は、そのままの姿勢でまったく動くことはなく静止していた。30秒間その状態が続いた後、地面を左右の触肢で交互に叩きながら、一直線に雌Aの住居へ歩いた。そして雌Aは雄甲の接触に対して通常の捕食行動のように雄に飛び付いた。雄



図1. 自然営巣した盆裁

甲は雌Aのその攻撃を受けるとすぐさまUターンし、投下地点付近まで後退して再び動かなくなつた。さらに30秒後また始めおこなったと同じように、触肢を動かしつつ雌Aの住居に接近した。そして住居の正面にまわって静止したが、触肢は移動中と同じように動かし続けた。この間雄甲は雌Aの住居の蓋等に直接触れるようなことはまったくなかった。この状態が続いた3分後、雌Aは住居の蓋をあけ始めた。頭胸部以上を穴からだし、第一脚および第二脚4本を上にかざして蓋が閉まらないように支え、残りの第三脚および第四脚をもって、体が住居の中に落ちないようにしっかりと固定していた。この雌Aの行動を受けて雄甲は、間をおくことなく雌に対して接触行動をおこなつた。第一脚を上げて開けられた蓋の上端に掛け、移動中と同じように触肢を左右交互に動かし、雌の胸板を撫でるような動作をおこなつた。この雄の接触行動に対して雌Aは終始前記の姿勢のまままったく動かなかった。この状態が6分間続いた後、雌Aが雄甲に飛び付いて左第二脚に咬みつき、その体の上にのしかかった。雄甲は雌Aの攻撃に瞬時に後退し回避行動をとったが、結果的にそれを避けることができなかつた。雄甲はそのまま歩脚を全て縮めまったく動かなくなり、咬みつかれた歩脚からは体液の浸出が認められた。雌Aも動かない雄甲の上に乗つたまま、動かなくなりそれ以上の攻撃は認められなかつた。1分後雌Aは雄甲の体を横向きに住居に引きずり込み、この時雄甲の体は“く”の字に折れ曲がつたにもかかわらず全く抵抗することができなかつた。また交尾が行なわれたか確認はできなかつた。

このようにこの実験においては最終的に雄が雌に捕食されたため、実験前一週間雌Aには餌をあたえていなかつたことから、1987年10月10日の実験にあたつては雌Bにその前日に予め餌(トコジラミ *Cimex lectularius* 成虫1頭)をあたえることとした。

雄乙は実験開始から7分間静止し、そのままの状態で前回の実験における雄甲と同じ触肢の運動に加えて、さらに体全体を震わせる動作を不規則におこなつた。雄乙の行動から3分後、雌Bは通常の捕食待機姿勢よりも大きく住居の蓋を開いた(図2)。さらにこの時より1分後、雄乙は触肢を動かしつつ雌Bの住居に接近する行動をおこした(図2)。雌Bは雄乙が住居の正面にまわりこむと同時に、蓋を完全に開け雄乙の接触に応じた(図3)。雌雄の接触中の行動は前回の実験と同じく、雄が触肢をもって雌の胸板を撫でる動作をおこない、雌はまったく動くことなかつた(図4)。そしてこの接触が始まってから3分後、雌Bは雄乙に飛び付き攻撃行動をおこなつた。しかし今回は雌Bの住居が植木鉢の縁近くにあったために、その攻撃を回避するために後退した雄乙はそのまま下へ落ちてしまい、よつて結果的に雌の捕食を免れることになつた。また今回も交尾が行なわれたかどうか確認はできなかつた。

考 察

キシノウエトタテグモの雄は交尾のために雌の住居に接近するにあたつて、その捕食を受けないために自らの存在を雌に認知させる必要がある。これに雄は触肢のドラミング動作と体全体を使った振動による信号を送るものと考えられる。また雌の雄にたいする存在告知は同じく振動によるものと性フェロモンによる匂いによるものの2つと推定できよう。しかし雌が振動を存在告知手段とするには、不確定な雄の接触機会に対処するためには長時間それを発する運動を続けなければならない。つまりそのために使用されるエネルギーコストはあまりにも無駄が多いと考えられるので



図2. 捕食待機姿勢より大きく住居の蓋を開いた雌B

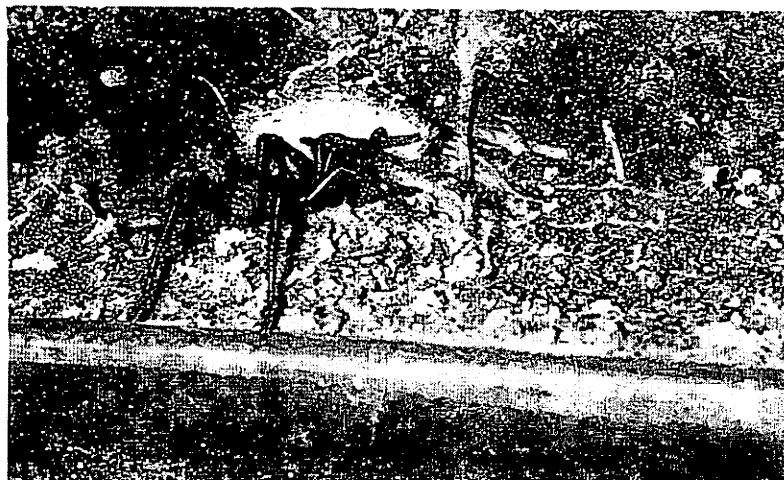


図3. 雄乙の接触に応じた雌B



図4. 雌Bと雄乙の接触

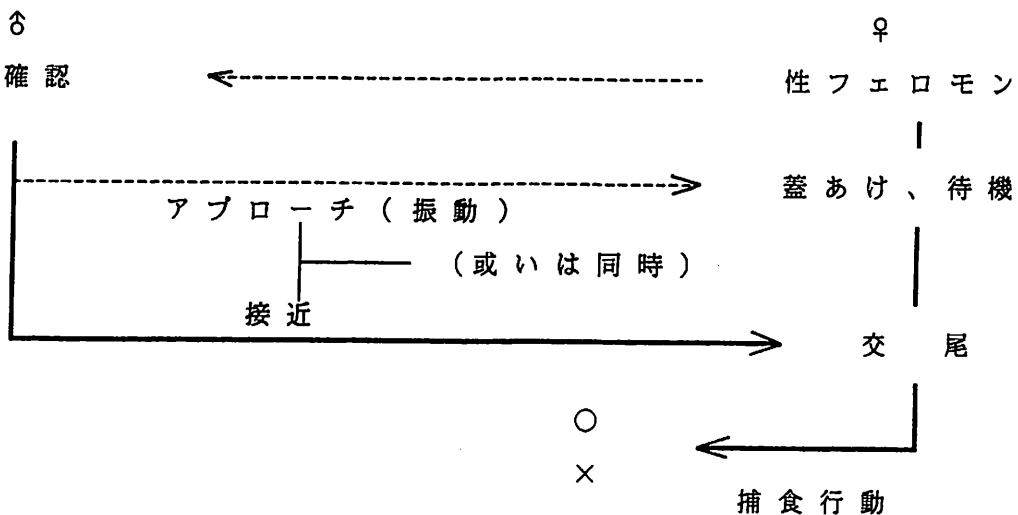


図5. キシノウエトタテグモの交尾行動パターン

ある。したがって雌は何らかの形で性フェロモンによる存在告知をおこなっていると考えるのが自然であろう。

また交尾の結果は確認できなかったものの、交尾後あるいはその前段階の何らかの不都合によつて、雌が雄を捕食してしまうのではないか。それは前の段階で明らかにそれと認知し、また絶食状態でないにもかかわらず捕食行動に出ていることから考えて、この行動は偶然であると考えにくいと思われる。

以上のことからキシノウエトタテグモの交尾行動パターンは、図1のように整理することができるのである。観察例が2例のみであるので最終的な判断を下すことはできないが、少なくともこのような推定は十分可能であると考える。ただ雌の雄に対する捕食行動については、雄の出生率、雌の精子保持日数および捕食の有無による産卵数の増減との関係を含めて考察する必要があろう。

引用文献

新海栄一, 1969. 東京都産真正蜘蛛類. pp. 1-65 pls. 1-10, 東京蜘蛛学会, 大阪.

チリグモの交接について

稻葉茂代*

1. はじめに

チリグモ *Oecobius annulipes* Lucas の雌雄を採集して、シャーレに入れたところ、求愛・交接行動、♂のつくる交接用網を観察できたので、報告する。

チリグモの採集状況は次の通り。1988年7月7日(木)14時ころ、城内高校近くの天神坂の石垣の表面で採集した。7月5日(火)に発見したときは、卵のうは天幕におおわれ、♀はその近くの住居にいた(図1上)。採集時には♀は卵のうをおおう天幕の中にいた。♀の住居はなくなっており、住居のあったあたりに♂がいた(図1下)。

雌雄は別にしてフィルムケースに入れておいた。

なお、観察をまとめるにあたり、記述および考察で小田原城内高校の池田博明氏に助言をしていただいた。

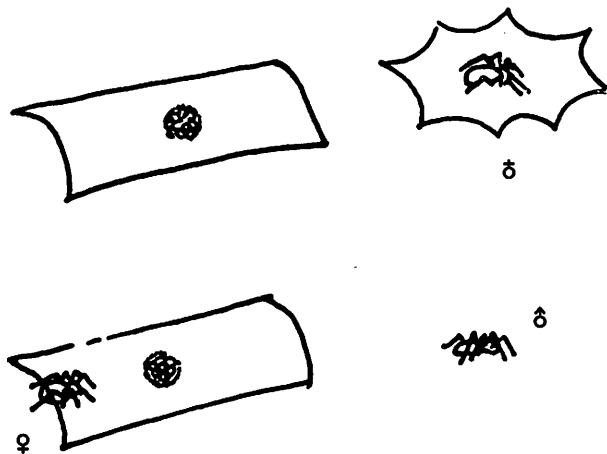


図1. 採集時の様子

2. 求愛と交接の経過

採集の翌日、7月8日(金)9時10分、フィルムケースから雌雄それぞれをシャーレ(内径4cm)に出した。フィルムケースには雌雄ともそれぞれ足場になるような糸を張っていた。以下はシャーレ内の状況である。

雌雄ともシャーレ内を歩き回る。雌雄が出会って、一瞬接触した後、分かれる。♂は♀を探す

* 神奈川県立小田原城内高等学校

KISHIDAIA No. 58, Aug. 1989

ような動作に変わる。

♂は♀の周辺に来ると、糸を引きはじめる。ときどき、♂が♀と接触し、♀はそのたびにとびのく。次第に♀を中心にした網ができる。♀はいつのまにかシャーレの床から、♂の作った網の上にのってしまっている。

♀は腹部と第4脚をやや上へあげ、♂に向ける動作をする。♀の拒否姿勢なのか、求愛に対する反応なのかは分からぬ。♂の方は網を作るのに懸命である。

♂が糸を引き回し始めてから5分もしないうちに、♀に正対した♂が♀の腹下面へ潜り込み、右の触肢で♀の外雌器に触れた後、いったん離れた。このときの♂は糸を引くのをやめた感じではなかった。

♂は糸を引きまわす行動をした後、再度♀に正対し、先程と同様♀の下面へ潜って、右の触肢を♀の右の外雌器に挿入する。数秒後、左の触肢を左の外雌器に挿入する。数秒して雌雄は離れた。9時20分になるところであった。

♂が作った交接用網を図2に示す。図の中心にいるのが♀であり、♀はその後、ずっとこの網の下に入っている。トビムシをやったところ、トビムシはこの網の下に入って行き、♀にとらえられた。♀はこの網の下で食事していた。

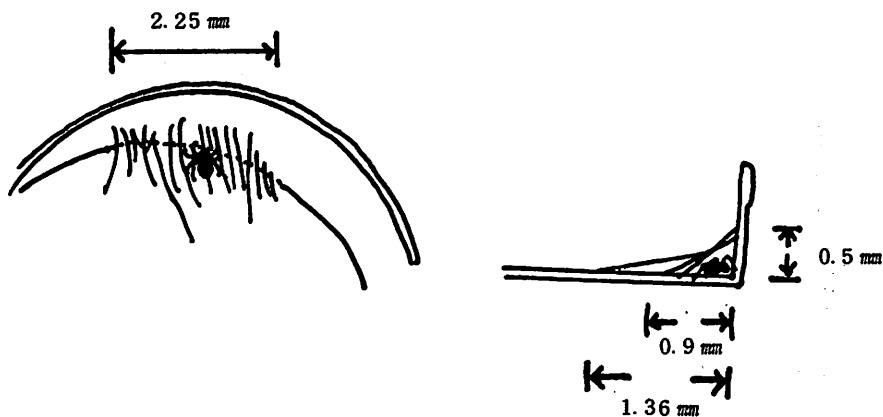


図2. 交接用網

3. 考察と要約

交接にいたるまでの♂の行動は(1)探索 searching, (2)雌雄の体の接触 body contact, (3)交接用網の作成 mating web construction, (4)試しの挿入 copulation attempt, (5)挿入 copulation, (6)分離 segregation.

チリグモの交接の観察は自然条件下で日下部(1979)の記録がある。この記録はあまり知ら

れていないので、ここに紹介する。再録にあたり「です」体を「だ」体に変えた。

“日時は1978年6月15日。

まず♂が♀の巣を探し近づく。♀は♂の接近に気づくと、そちらに向きを変え警戒する。♂は♀に近づこうとして追い払われるが、そう遠くには逃げない。そうこうしているうちに♂が巣を占拠し、外に出されてしまった♀は巣を取り返そうと、巣のまわりや中を出たり入ったり、♂を追いかけ回す。そのうち、巣の中にいる♂は脚をヒラヒラさせたり、尻を振ってグルグル回ったり、デモンストレーションをする。♀は見ている時もあり、そっぽを向いている時もある。そしてまた追いかけあいが始まり、♂と♀が一瞬からみあうようなことが2回あり、♂は遠くへ逃げていった。♂が♀の巣に近づいてから完了まで20分位だった。

今年も交接を見られた。1979年5月28日。その時は♂が30分位ウロウロしてがんばったが、♀の許しが出ず失敗。”

♂が♀を巣から追い出すことからすると、採集時（図1下）はちょうど♂の求愛の途中だったのだろう。日下部の記録には交接用網のことは記されていないが、自然条件下では♀の巣幕で代用できるのだろう。あるいはこの場合、シャーレのようによく見えなかったのかもしれない。

交接姿勢は♂が♀の腹面下へもぐりこむという点ではネコハグモなどと似ているが、挿入の体勢が異なり、チリグモでは右の触肢を右の外雌器に挿入しているため、雌雄は交叉した形となる。このように腹面を合わせながら、右の触肢を右に挿入するため、交叉する体勢の種は他には記録されていない。

♂が作った交換用網はコサラグモの♂で記載されているものに似ている。

参考文献

日下部光代, 1979. チリグモの交接. クモの世界(4). クモの会.

「我が師と蜘蛛」

— 萱嶋先生の喜寿をお祝して —

貞元己良

はじめに

私と先生の出会いは、今を去る12年前になります。私がまだ16歳、高校二年生の初め頃でした。先日、先生の喜寿をお祝いする催物に参加させて頂きました際に、久しぶりにお会いする先生の笑顔を拝見したとき“ああ、想えば12年前に初めて先生にお会いしたときも、この笑顔だったなあ”と脳裏に焼き付いた懐かしい記憶が走馬灯のように思い出されました。

今回、この記念号で私は、私自身の蜘蛛との出会いから先生に出会い、そして先生から学び受けた影響等を述べて行きたいと思います。

蜘蛛との出会い

私が蜘蛛に興味を持ったのは、中学一年生の時ですから、もう17年ほど前になります。確か、中学生になりたての頃でした。放課後クラスの仲間達とバーレーボールで遊んでいて、たまたまボールが校庭の横を流れる小川に落ち、私がそのボールを拾いに行った訳ですが、草むらをかきわけ流れ行くボールを見ながら必死の思いで手をのばし、もう少しでボールに手が届くと思った瞬間、私の視覚いっぱいに蜘蛛の姿が飛び込んできたのです。『ヒエ～ッ』という声にもならぬ声を発し、普通の人ならその場を一目散に逃げだすか、棒で蜘蛛を叩き潰すところなのでしょうが、私は目の前の蜘蛛に対し何故か何の恐怖心も抱かずに、ただ呆然とその場にしゃがみ込んで見つめていました。

蜘蛛は、白金色のうぶ毛で覆われとても艶やかに、脚は黄色と黒の遮断機を連想させるような模様でそのアンバランスさにとてもひかれました。その時の印象としましては、途方もない宝物を見付けてしまったかのように、ただ・ただ一種の感動を覚えた記憶があります。

その後、私は小川で見付けた蜘蛛が忘れられず、蜘蛛の名前が知りたいと思いはじめたことが蜘蛛と付き合う動機となったのです。

当時は、私のまわりに蜘蛛の研究をしている人もなく、また適切なアドバイスをしてくれる人もいませんでした。親にもバカなことはやめろといわれ、学校の先生や級友たちからも次第に変人扱いされるようになりました。蜘蛛は見れば見るほど色々な形・色々な色彩があり、毎日が心ときめく新しい発見の連続でした。もちろん本も探しました。最初に読んだ本は、八木沼先生の書かれた『くもの話』でした。私はこの本を近くの図書館で見付け、一年余り借り続けボロボロになるまで読みました。あの頃は蜘蛛の本などほとんどなく、ましてや図鑑などとても入手困難なときでしたから、八木沼先生の『くもの話』は唯一貴重な参考書でした。

そして、中学三年の終わり頃に念願の図鑑〔原色日本蜘蛛類大図鑑〕を入手し、普通に見られる蜘蛛の名前などはある程度わかつてきたところで、蜘蛛の研究の手引きを八木沼先生にお願いしようと思い手紙を書きました。しかし先生からのご返事は、私の手紙の内容が悪かったのか、それとも文字が余りに下手だったので小学生と勘違いなさったのか定かではありませんが、『今度、蜘蛛

の採集と飼育という本を出すので読んでください。』という内容でした。

萱嶋先生との出会い

ある日こんなことがありました。自宅の庭で一頭のオニグモを発見し、しばらく観察をしていたときのことです。脱皮を二回観察したのちよく見るとクモが確かに雌だと思っておりましたのに、バルブが膨らんで雄に変わっていたのです。これは不思議なことだと思い別のクモで観察してみることにしました。たまたま近くにジョロウグモがいましたので雌であることを確認し毎日見ていましたところ、脱皮をしてやはりバルブが膨らんで雄に変わったのです。これらの結果からクモは、成長段階においてある時期まで中性で通おし環境の変化や栄養状態等に左右され、雌雄が入れ替わるのではないか、と当時の私の観察ノートは記録しています。

今考えると本当にバカげた事ですが、一人でやっているとバカげた事でも真実になってしまふのです。

またこんな事がありました。夏の日の夕方空が一面に夕焼けで染まっていたときのことです。いつものように自宅近くの裏山でクモの観察をしていたとき、一頭のオニグモが網を張り始めていたところでした。私は今までオニグモが網を張るシーンを見た事がなかったので、これは良い機会と思いしばらく見ていました。網を張るクモの姿を観察しているうちに、いくつかの疑問が出てきました。何故、こんな明るいうちから網を張るのだろう、それに網の位置が低すぎる、網の中心が立っている私の腰ぐらいしかない、また横糸の間隔が広すぎるよう感じます。そして最後にそのオニグモは横糸を張り終えたのち、いきなりナガコガネグモのように隠れ帯を付けてしまったのです。

私の観察ノートには変なオニグモとして記録されています。

このように自分では解けない謎や、疑問が生じたとき専門家の意見を聞けたらいいな、と日頃から思ってはいましたがきっと相手にはしてくれないと諦めています。しかし、どうしても自分の気持ちを押さえることが出来ず、あたって碎けろという気持ちで萱嶋先生に手紙を書いたのです。先生からのご返事は『私の家に来なさい』という思いがけない内容でした。私は指定された日に喜び勇んで指定された時間よりも一時間も早く行きました。極度の緊張で顔を引きつらせ玄関の扉が開くのを待っていました。そして扉が先生の手により開かれ、私は先生のお顔が見れず下を向いたまま『て・て・手紙を頂きました、さ・さ・貞元です』と絞りだすように申しましたところ先生は『ウワー・ハハハハ、よく來ましたネエ、サアどうぞなかへお入りなさい』とあの笑顔で迎えてくれたのです。

感激でした。いや感激というより緊張した私を一瞬にして和ませてくれたあの笑顔は先生の人柄というところででしょうか。あの時の先生の笑顔は今でもはっきり脳裏に焼き付いています。

その後、月に一度の割りで先生のお宅へお邪魔し、蜘蛛学の基本的な勉強をさせて頂きました。先生は大変熱心に指導してくださり、ある時は蜘蛛の学名について勉強したいと申し出れば、わざわざラテン語・ギリシャ語の講師の先生をお招きくださり、発音の仕方からその意味まで指導して頂いたことがあります。またある時は、先生が台湾にいた頃のお話や、先生の思い出に残る蜘蛛のエピソードなどを時間が経つのも忘れ楽しく聞かせて頂いたこともあります。

そしていつも最後は、先生の奥様の手料理でした。あの頃は若さゆえ迷惑になることも顧みずお

礼の一言も疎かにして大変申し訳なく思っています。この場をお借りして奥様にお礼申し上げます。

最 後 に

先生は私にとって蜘蛛学の師であるとともに、人生の師でもあります。他人のためになにかをするというのは、誰でもが出来るということではありません。それが後進の指導育成だけに留まらず、すべての点において先生は一生懸命に取り組まれており、その姿勢は私のみならず色々な方々に多大な影響を与えています。

今回、先生が喜寿をお迎えしますお元気であることを確信した私ですが、先生の指導を受けた者の一人として日頃の不精をこの機会を借りてお詫びするとともに、今後とも以前に増して日本の蜘蛛学発展の為、強いては我々若い研究者の為導き、そして御教授お願ひ申し上げお祝いの言葉に代えさせて頂きます。

東京クモゼミ報告(Ⅰ)

池田博明

1985年3月から毎月1回、千葉県市川市にある加藤宅において、東京クモ談話会のメンバーを中心にして、クモのゼミを開催してきた。このゼミでは、参加者が実際に携わってきた調査研究及び関心を持っている論文の紹介を中心にして、テーマをめぐる討議を時間を十分にとって行ってきた。ここで紹介されたテーマと討議はゼミごとにまとめ、その要約をプリントにして記録してきた。

ほぼ一年を経て、これらを読み直すと、色々と興味深い内容や討議が数多く見受けられる。中には、もっと広汎な議論を必要とするものもある。これらの記録を私達の中だけにとどめるのではなく、関心を持つもっと多くの人達に知ってもらい、御批判いただければ、私達の論議もさらに深まるにちがいない。そこで誌面にゼミの記録を載せ、読者諸氏の参考の一助としたい。なおゼミのたびに会場としてお宅を借して下さった加藤宏保氏に改めて厚くお礼申し上げる。

なお、今回は1回目と2回目の報告とするが、テーマ毎の報告も考えている。1989年現在も毎月のほぼ第1日曜に行っているので、関心のある方は気軽に問い合わせて欲しい。

〔第1回〕クモの餌捕獲行動と進化

テレビ番組「わくわく動物ランド」にオオジョウログモが登場した回を見ていて「あれっ」と思った人はずいぶんいるのではないだろうか。網にふれた音叉をオオジョウログモは糸で巻かずに切り離したのである。コガネグモなどは大抵巻くのに、いったい何故こんな結果となったのだろうか。実は造網性クモの餌捕獲行動には「バイト&ラップ」型と「ラップ&バイト」型があり、オオジョウログモは典型的な「バイト」先行型だったのである。では、捕獲行動の分析はどのように行われていて、どのような型に分類されているのだろうか(報告者・新海明)。

Lubin(1980)は4種のスズミグモの餌捕獲行動を調査した。餌の種類の違いによって捕獲行動の順序は変わるか、行動に要する時間は変わるとといった項目を量的に比較検討し、コガネグモ科やジョロウグモ属、サラグモ科の網特性と比較した。

スズミグモ属のクモは「こしき」にいる。餌は上部迷網にかかると落下する。餌がかかるとクモは糸を引き(jerking)、餌のもがきを促進して、定位する。餌が落下しないときクモは網をゆする(web shaking)。敵の侵入に対して網をゆすることもある。落下した餌にクモは歩脚で触れる。このとき、餌の種類を識別しているのではないか。そして「攻撃attack」に入る。攻撃法には4型がある。

(1) 「wrap/bite」法 (wrap/bite/pull out or cut out/free wrap)。コオロギやバッタのような危険な餌に対してコガネグモ属のクモはwrapすることが知られているが、スズミグモ属ではbite先行も結構見られる。これは水平網が密で強いため、クモを虫の攻撃から守っている為と、虫とクモの間にシートがあり、直接wrapするのが困難だからであろう。コガネムシは大部分この型で攻撃された。とはいっても、型は単純ではない。wrapしてから、シートへ糸を付着させ、短く試しがみをしてから、またwrapするといった様子だ。

(2) 「wrap」法(`wrap/cut out/free wrap`)。カムシは90%この方法で攻撃された。カムシが有害物質を放出するとクモは攻撃を中断して体を掃除する。ゾウムシもほとんどこの方法であった。

(3) 「bite/wrap」法(`bite/wrap/cut out/free wrap`)。チョウや蛾、ニクバエの他多くの虫に適用される。鱗粉によって粘性の網から逃れられるので、`biting` ですばやく捕えたほうが有効である。興味あることに、蜂に擬態した虻を67%，wrappingで捕えた。この虻は羽の振動数も擬態しているのであろう。バッタやコオロギ等もこの方法による。

(4) 「bite」法(`bite/pull out or cut out`)。ショウジョウバエなどはこの方法によった。小型の虫では(3)法が使われる。

攻撃後、餌をこしきまで運ぶのに上顎を使う場合と糸につけて運ぶ場合がある。スズミグモ属ではオオジョロウグモや米国産ジョロウグモで特徴的な「bite & back off」(餌をかんだ後、向きを変えずにそのまま後ずさりしてくる)は見られなかった。ニクバエやショウジョウバエ等は上顎で運ばれた例が多いが他は糸につけて運ばれた例が多い。直翅目は必ず糸で運ばれ、コガネグモの一種(*A. argentata*)と異なっていた。

餌は必ずこしきに運んで食べられた。すでに餌を持っているクモに更に虫を与えてもその場にwrapしたままにはせず、こしきに持ち帰った。

餌捕獲行動をコガネグモ科の他のクモと比較してみると、wrapによる捕獲が主要な要素である点で、スズミグモ属はコガネグモ属、オニグモ属、*Eriophora*に近く、サラグモ科やジョロウグモ属には遠いと考えられる。

Robinson(1969)はコガネグモの一種の餌捕獲行動を調査し、行動を引き起こす要因を分析してシェマを作った。「AT HUB」「PLUCK」「TOUCH」「PALP」「WRAP」「BITE」の順序や起こる頻度は餌の種類によって変化する。鱗翅目はかみつかれるが、その他の昆虫はwrapされる。検討した結果、最初にbiteされる場合は「long bite/wrap」で、最初にwrapされる場合は「wrap/short bite」である。鱗翅目の場合は網からのすり抜けによる逃走を防止する為、他の昆虫の場合は危険(餌それ自身と天敵による)を少なくする為に捕獲行動を変化させているのであろう。このことは蛾にナイロン・ストッキングをかぶせたり、糸で包まれたコオロギを別の個体の網上で振動させてやることで判明した。

重い餌は糸につけて、こしきへ運ぶ。こしきに戻ると糸で包んだ餌をこしきに付けてクモは一回転し、頭を下に向ける。その後、餌を持ち、回転させながら、少しづつかみつく。

攻撃法に関しては、Petersのニワオニグモでの研究(1931, 1933)と同様であった。

行動を引き起こさない要因についての研究は十分ではないが、コガネグモの餌捕獲行動は次のように進行する。網の振動でクモは警戒する。統いて振動すれば餌に向かうが、振動しないと糸を引いてみて、餌がクモの体重の1/100以下だとクモはそのままくわえて運ぶ。鱗翅目の刺激を受けると長くかんでから包むが、その他の場合は包んでから、短時間かむ。糸で包まれている場合にはすぐにかむ。餌の状態によってクモはこしきに戻って待つことがある。ときには餌は拒絶される。その後、ひきはがして、餌が小型の場合(クモの体重の1/2~1/3以下)は上顎で、大きい場合に

は糸で、こしきへ運ばれ、こしきで再びwrapされ、持ち替えされて食べられる。

立命館中学3年の早川君の卒業研究は日本のコガネグモとナガコガネグモの餌捕獲行動を分析したものである。これをみると、Robinson同様、蛾と蝶は「bite」先行で捕まえられ（よくみると、蝶はかんで運ばれた後に包まれているが、蛾はかんで包まれた後に運ばれている方が多い）、他の昆虫（イナゴ、毛虫、コオロギ、トンボ、カマキリ）は「wrap」先行で捕まえられている。また餌が大きくなるにつれ、「wrap」先行の傾向がある。研究に夏休み中かかったそうである。（Atypus 87の大会講演要旨参照）

[コメント] 餌の捕獲行動で系統関係を論議することはできるだろうか。例えば、Lubinは「bite」先行型を原始的な型とみなして論議しているのだが、網をはらないハエトリグモは「bite」しかしない。しかし、コガネグモ科と限って、その中で基準を設定し系統を論議することはむしろ必要なことではないだろうか。餌捕獲行動はその基準のひとつである。

進化の方向は理論的には両方向がある。例えば網の糸がだんだん少なくなる方向に進化したということもできれば、同じデータから多くなる方向に進化したと論ずることも可能であろう。どちらが妥当であるかということは、つまるところどちらがより自然であるかを検討するしかないであろう。

餌の捕獲行動にしろ、行動型に名称を与えて、こまかいこともなおざりにせず、因果関係を探っていくことも必要であろう。餌の捕獲行動からLubinはスズミグモとサラグモの網型が似ているのは収斂であって、本質的には全然違うものだと考察している。網型の進化について「ヒメグモ科からサラグモ科、スズミグモ属、ジョロウグモ属、コガネグモ属」という系統が考えられているが、Lubinはスズミグモ属の網はジョロウグモ属の網より「進歩したadvanced」型だと主張しているし、新海明はジョロウグモの研究から、足場糸はこしきの拡大ではないかと推定し、従ってジョロウグモとコガネグモの系統順序にも疑問を持っている。

生活史からみても日本のジョロウグモは不思議なクモである。年1回しか産卵しないのに、沖縄では2回目に産卵するに十分な卵を持っている。ジョロウグモは熱帯起源ではなく、温帯起源なのだろうか。

ところで、他のクモでも餌捕獲行動を更に調査する必要があろう。

FoelixはBiology of Spiders, 第6章「動作と餌捕獲」でRobinson論文を紹介し、他の論文も紹介している。またSpider Communication, 第10章「餌の獲得」でも広範囲に論議されている。

参考文献

Lubin, Y. D., 1980. The predatory behavior of Cyrtophora. J. Arachnol. 8: 159-185.

Robinson, M. H., 1969. Predatory behavior of *Argiope argentata* (Fabricius). Am. zoologist 9: 161-173.

（1985年3月3日・池田・加藤輝代子・佐藤幸子・新海明、参加）。

〔第2回〕スソグロサラグモの成長と給餌（報告者・佐藤幸子）。

報告は素データすべてをまとめた資料を配布して行われた。飼育した各個体についての令期間、期日、死亡期日、産卵期間、産卵期日、産卵日毎の産卵数、体長が記録されており、1頭1頭の生命にかける佐藤さんの情愛を感じさせる仕事である。

スソグロサラグモは畑わきのゴミ捨て場のビニール等の下によく見られるサラグモである。英国ではマンチェスターの草原に隣接した粗大ゴミ捨て場にいるという。年中、成体がみられる。給餌間隔を変えると、成長にどのような影響がみられるかを調べた。飼育は室温で行い、給餌間隔は3日、7日、10日、15日に各々1度、キイロショウジョウバエを与えた。各条件下20頭で始めた。まず、メスでは餌が少ないほど、4回脱皮より5回脱皮の個体が増える。3日に一度、つまり1日あたりの餌量 $1/3$ のものと、 $1/7$ のもの、 $1/10$ のもの、 $1/15$ のものの結果を比較する。給餌率の高いグループ $1/3+1/7$ では、4回脱皮で成体となるもの、5回脱皮で成体となるものが各々50%であるのに対して、 $1/10+1/15$ では、17.6%，82.4%であった。オスはそれほど違わない。

また発育速度は給餌率が低いほど遅れる。5回脱皮個体で比較すると、 $1/3$ ではふ化から成体まで $58.67+12.73$ 日（平均値+標準偏差、以下同じ）、 $1/15$ では $89.29+26.30$ 日である。体長は給餌率が低いほど小さい。成体の体長を比較するのではなく、各脱皮毎の成長を比較した方がそのことがよくわかる。

産卵については、どのような違いがみられるだろうか。飼育した80個体のうち、成体となったもの59個体、そのうちメスは35個体、交接したメス34個体、産卵したメスは32個体である。

1回目の産卵から、最終産卵までの期間（産卵期間）は、給餌率が低いと長い。 $1/3$ では $69.17+54.91$ 日、 $1/15$ では $160.00+61.01$ 日である。餌が少ない方が産卵回数は多く、次の産卵までの所要日数は多く、1卵のう内の卵数は少なくなる。しかし、総産卵数においては、 $1/10$ のグループが最高値 $78.00+42.49$ 個を示した。 $1/3$ では、 $63.86+43.16$ 個である。

ふ化してから死亡するまで、つまり寿命は $1/3$ では $191.63+65.18$ 日であるのに対し、 $1/15$ では $344.00+65.85$ 日である。

ただし、ここで注意すべきことは、低温期間（11月から3月中旬のこと）である。室温が15℃以下になると食べ方は遅くなるし、成長は遅れる。今回の飼育の場合、成体になるまでの期間については、どの段階の個体も11月以前に成体になったので、比較ができるのだが、産卵期間については給餌率の低い方ではかなり低温期間にかかって産卵しているので、その影響があるとみなされる。

〔コメント〕種毎に脱皮回数というのはどの位決まっているものだろうか。餌量によって脱皮回数が変わってくるという報告は千国『クモの一生』（偕成社）にもみられる。ジョロウグモのメスでは8～10回、オスでは6～8回だが、餌が多いほど脱皮回数が多くなり、体長も大きくなる。モンシロコゲチャハエトリではオスは6回、メスは5ないし6回であるという。

ジョロウグモの結果はスソグロサラグモの結果と異なり、明らかに餌が多い方が脱皮回数が増加しているが、給餌率と脱皮回数が無関係という種も知られている。宮下和喜はミスジハエトリで2

日毎、4日毎の給餌飼育(27~28°C, 16時間明条件)を比較しているが、5~6回の脱皮で成体になったとしている。Turnbullはクサグモの一一種では7回の脱皮で成体になり、給餌率による脱皮回数の影響はみられなかったが、給餌率が高いと令期が短くなり、早く成長して早く死亡することとなるので、結局成体になるまでの全餌量は同じになるという結果を出している。

種によって脱皮回数が決まっているということは、脱皮回数が遺伝子の違いによることを示唆している。スソグロサラグモの場合、個体によって4回脱皮にプログラムされた個体と5回脱皮にプログラムされた個体がいるのかもしれない。一方脱皮に働いているホルモンの影響も考えられる。エクジステロンの効果をクモの脱皮で検討した論文がある。

産卵に対する給餌率の影響はどうだろうか。Turnbullは森林性のサラグモの一一種(シロブチサラグモに似たクモらしい。枝上に卵のうを作り、卵のうはやがて地面に落下するという)で、卵数との関係はないとしている。ただ餌量が多い場合には卵黄量が多くなるため、卵重量が増加するという。吉田真はオオシロカネグモで、これと違った結果を得ている。オオシロカネグモの場合は餌量が多いほど卵のうの平均重量が大きいが、これは1卵のう内の卵数が多いためである。

数の増加も量の増加も、どちらも繁殖率を高めようとする方法(戦略)である。なお、オオシロカネグモでは餌量が多いと早く死するが、これはその生態にかなっている。溪流上の良い場所を占有した個体は餌を多く捕えることができ、卵を沢山産んで死する。すると周辺個体が先住者の占有空間を占め、餌量を増やすことができて、成長が早まる。結局、個体群全体の産卵数を高めるような適応になっているのである。1化性のクモの場合は多く、餌が少ないと早く親になることが知られている。またクサグモでは短日と長日では脱皮回数が異なる。北の個体群と南の個体群では同じ条件で飼育しても成長が同じではない。脱皮回数よりも卵数、卵量で評価する方が適切かもしれない。

ところで、スソグロサラグモの場合、総産卵数においては給餌率と比例関係になっていないのだが、1卵あたりの餌の量、つまり卵1個に投資された餌の量を計算してみるとどうなるであろうか〔池田〕。試みに計算してみたところ、4回脱皮の場合、 $1/3$, $1/7$, $1/10$, $1/15$ 各々について、 $1 \cdot 85$, $2 \cdot 57$, $3 \cdot 55$, $3 \cdot 72$, 5回脱皮の場合、 $1 \cdot 61$, $2 \cdot 79$, $3 \cdot 47$, $3 \cdot 67$ という値が得られた。つまり、給餌間隔の短い方が次世代を基準にした場合、餌の無駄が少ないということになる。長く生存すればするほど、エネルギーは個体維持のためにも使われることになるので、この結果は当然のことだろうがかなりはっきりしているのが面白い。また、この結果からすると自然界で給餌間隔が $1/3$ ~ $1/7$ の間だとすると、1個の卵を作るのにキイロショウジョウバエ2頭で十分ということになる。体長からすると、 $1/3$ のものが最も野生型のものに近いようである。

今後の課題としては、低温期間の影響を除去するために、恒温条件下での飼育が必要であるということ。遺伝子構成の違いとの関係を実験すること。継続飼育が確立すればこれも可能である。ホルモンの影響を調べること。チャバネゴキブリでは集団で飼育すると脱皮時期がそうだが、クモでそれに類することがみられないかどうか注意すること等。

参考文献

佐藤幸子。1985。スソグロサラグモの生活史に及ぼす摂食条件の影響。Atypus 86: 1-8.

Turnbull, A.L., 1960. Quantitative studies of the food of *Linyphia triangularis* Clerck. (Araneae; Linyphidae). *The Canadian Entomologist*. 94.

Turnbull, A. L., 1964. Effects of prey abundance on the developement of the spider *Agelenopsis potteri* Blackwall (Araneae; Agelenidae).

The Canadian Entomologist. 97.

(1985 年 4 月 4 日. 於 東葛飾高校. 浅間茂・伊東真理子・佐藤幸生・佐藤・池田).

キヌアシナガグモの網構造について(続報):幼体の網

新 海 明*

前報で筆者は、キヌアシナガグモ *Tetragnatha lauta Yaginuma* の網構造及び造網過程について報告した(新海, 1988)。この中で筆者は、八木沼(1986)及び新海・高野(1984)の報告と筆者の調査結果との食い違いを指摘しておいた。その後もこのクモの網を継続調査してきたところ、1987年3月にこのクモの幼体の網を発見することができた。そして、この網は八木沼(1986)及び新海・高野(1984)の報告と一致していることが判った。ここでは、その際に得られた調査結果を報告し、あわせてクモの幼体時と成体時の網型の違いについても言及したい。

なお、本稿をまとめるにあたり、新海栄一氏には標本の同定と原稿校閲をお願いした。ここに厚くお礼申し上げる。

調査は1987年3月14日に千葉県天津小渕町から君津市にかけて拡がる東京大学千葉演習林内の猪ノ川林道沿いで実施した。キヌアシナガグモの網は林道沿いの高さ約1.5mの崖地のシダ(ヤブソテツ)の間に張られていた。

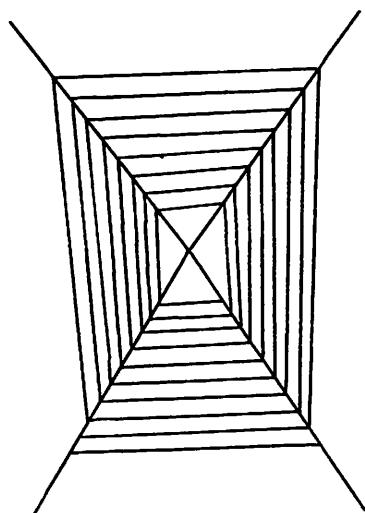
観察にあたっては、塗装用白スプレー(カンペ家庭塗料株式会社製アクリルラッカー, 25ml)を噴霧した上で、網の大きさ・高さ(地上からこしき部まで)、ヨコ糸・タテ糸・ワク糸の配置及びその数などを中心に調べた。造網過程は観察できなかった。

観察終了後、クモは採集して持ち帰ったが、この個体は幼体であった。

幼体の網構造

網は林道沿いの崖地の草間に、垂直からやや傾いて張られていた。前報で述べた成体の網と同様にこの網も非常に繊細な感じがした。図1に示したように、タテ糸は4本のみで、ヨコ糸は8~10本であった。また、成体の網と同様にワク糸は存在しなかった(このことは、指とピンセットを使って最外の糸に触れて粘性があることを確認し、ヨコ糸であることを確かめた)。タテ糸は4本のみであったが、8本の脚はこの4本の糸に2本ずつ合わせてきちんと揃えてあったのが注目された。

八木沼(1986)は、キヌアシナガグモの網を「目のあらい垂直円網を張る(傾斜するものもある)」とし、新海・高野(1984)は「縦糸4本、横糸4~6本」とあるが、これらの記載をキヌアシナガグモの幼体のも



のとすると、納得がいく。このようなことから、前報で筆者が報告した網はキヌアシナガグモの成体であり、八木沼(1986)及び新海・高野(1984)の観察した網はその幼体の可能性がある。

成体と幼体による網型の違い

ここで報告したキヌアシナガグモの幼体の網を、前報で述べた成体の網と比較すると以下の点で異なっていることが判る。すなわち、(1) 網の傾き：幼体の網は、垂直よりやや傾いていたが、成体の網はほぼ水平に張られていた。(2) ヨコ糸の数：幼体の網では8～10本であったが、成体の網では17～31本と多くなることなどである。

造網性クモの網型は、幼体時も成体時も基本的な構造はほぼ等しく、その大きさが異なるだけであるように一般的には考えられやすい。しかしながら、例外は数多く報告されている。我が国に産するクモを例とすると、たとえば、トリノフンダマシ属 *Cyrtarachne* のクモは幼体時には網を張らず、その後成長するに伴って円網を張るようになる(熊田他, 1984)。これとは反対に、キンヨウグモ *Memosira ornata* は3～4令までは水平円網を張るが、その後は網を張らなくなる(新海・高野, 1984)。また、ウズグモ属 *Uloborus* は幼体時にはシート状の円網を張るが、成長するに伴い普通の円網を張るようになる(新海, 1984)。さらに、ジョロウグモ属 *Nephila* のクモも幼体時と成体時の網型が異なっていることなども知られている(新海, 1985)。

キヌアシナガグモの場合は観察例数が少ないので確定的なことは言えないが、前述の諸例と同様に成長に伴い網型が変化する可能性がある。

引用文献

熊田憲一・井上房枝・加藤輝代子, 1984. トリノフンダマシ類の幼体の捕食行動.

Atypus, (85):97.

新海明, 1984. ウズグモ属の幼体とオス成体の網について, *Atypus*, (85):27-30.

——, 1985. ジョロウグモとオオジョロウグモの網構造の比較によるジョロウグモ属の由来の一考察. *Acta arachnol.*, 34(1): 11-22.

——, 1988. キヌアシナガグモの網構造について. *Kishidaiia*, (56):15-18.

新海栄一・高野伸二, 1984. フィールド図鑑クモ. Pp 1-204. 東海大学出版会, 東京.

八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 305p. 保育社, 大阪.

DRAGLINE

8年目のアシダカグモ

熊田憲一

1988年6月28日の午後、我家（神奈川県横浜市神奈川区）の台所の窓ガラスの向こう側に黒々とした大きなクモの影が映った。「アッ、アシダカグモだ」と子供達と外へ出てみたものの、アシダカグモ *Heteropoda venatoria* は格子の中、棒でつづいてみたがさすが素早く、格子を出たかと思うと物置の影へ入り、とうとう床下に逃げられてしまった。しかし夜遅く見に行くとちゃんと壁に出てきていた。今度は逃げられ無いようソッと捕らえ、大きなプラスチック容器に入れた。はじめ雄かと思っていたが、腹部が痩せて細くなった雌の成体であった。

今から8年ほど前、私が一時東京羽村に移るちょっと前だったが、風呂場に脚を伸ばしても500円玉ぐらいの可愛いアシダカグモが現れた。横浜のこの地に住んで20年目のことであった。家人に注意してもらっていたが、その後の消息は分からなかった。それから8年にして雌の成体を捕らえることが出来た。萱嶋泉氏の飼育から推してその時の幼体が成体になって現れたのかと、真偽はともかく嬉しくなってしまった。

このクモは雄かと思われたほど痩せており、飼育中もほとんど捕食せず、7月下旬卵の入っていない卵のうを作り、8月上旬死亡してしまった。ガッカリ気を落としていたら11月5日、掃除中の妻理恵が脚を伸ばしても1cmほどの子グモを見つけた。先のクモの子孫かどうかは判らないものの、再度アシダカグモが現れてくれたことに感謝し、台所の隅に逃がした。次に目につく時はどのくらいに成長しているか楽しみである。

アシナガグモ♂成体によるジョロウグモの網の掠奪

新海明

1988年8月13日、千葉県安房天津町から君津市にかけてひろがる東京大学千葉演習林において、アシナガグモ *Tetragnatha praedonia* の♂成体がジョロウグモ *Nephila clavata* ♀幼体の網を乗つとったのを2例観察した。

発見したのは午後2時半すぎであった。ジョロウグモは林道わきのキャラボク植栽地に造網していた。網の大きさは2例とも、ほぼタテ40cm×ヨコ30cmで高さは100cmであった。一頭のアシナガグモはジョロウグモの網のこしき部に占座しており、網主は上方の糸に避難していた。他の一頭は、その網から約2mほど離れた所のジョロウグモの網の中に侵入しており、やはり、こしき部に占座していた。この網の主は暫くするとこしき部のほうへ戻ろうとしたが、アシナガグモがこれに気付き前脚で網をゆすると、あわてて網の縁へと逃げてしまった。

両者の網に餌（小形のアリ）を与えてその反応を調べた。前者の場合は、こしき部で餌に向かってタテ糸をゆすった（jerkingした）だけであったが、後者の場合には、餌の所まで行き、一度咬みついた。しかし、捕獲はせずにすぐにその餌を離してしまった。アシナガグモは一般に小形の

DRAGLINE

双翅類を餌にしているので、ここで得られた結果は餌がアリであったことに問題があったと考えられる。しかし、アシナガグモが乗っ取ったジョロウグモの網で餌捕獲をする可能性があることは確認できた。

造網性クモ類のオスの成体の行動については、不明なことが極めて多く、今後のさらに詳細な調査観察を行う必要があろう。

卵のうを食い破るアズマキシダグモ

板倉泰弘

筆者は実験用にアズマキシダグモを数頭飼育していたが、子グモの出のうの際に親グモが卵のうを食い破る行動を観察したので報告する。

観察に用いたクモは1986年4月2日に愛知県岡崎市定国町の広田川の河原で44頭採集し、コーヒーピンに足場として割箸を2本入れた飼育容器でイエバエを2日に1頭の割合で与えて飼育した中の1頭であった。この個体はタテスジ型で5月25日に最終脱皮を終えて成体となり、6月1日にアズマ型のオス（この個体も同一場所で採集、飼育したもの）と交接、6月18日に産卵した。

7月1日午前8時ごろ飼育容器に目を向けると拡のうされた卵のうが微かに振動しているのを見た。日光に透かして見ると、2令幼体が卵のうの膜1枚を隔てて内側を歩行する影が見られた。キシダグモ類には卵のうを保持する種が多いが、産卵後徐々に変化して直径が約5mmの球形であったものが約8mmの円盤状に見えるようになり、色彩も白色からやや茶色味を帯びたものとなる（原因は不明）。そのまま観察していると8時13分親グモが左右の第1脚と左第2脚で卵のうを支え、口器で引っ張って破り始めた。約30秒後卵のうに径2mmの穴が生じ体長1.5mmの子グモが走り出てきた。親グモは上記の行動を続けていたが、子グモが親グモの第1脚に接触した瞬間に行動を中止して保護網上に卵のうを置いた（そのまま口器から離した）。

同様の観察は1987年7月5日にも行うことが出来、この時にも親グモが卵のうを破り子グモが親グモの頭胸部に登った瞬間に卵のうが口器から離されるのを確認した。

田中徳久氏採集による各地のクモ同定記録

—— 沖縄、小笠原、硫黄島、三宅島、真鶴、八ヶ岳、清里、北海道 ——

谷川明男*

筆者は、横浜国立大学の田中徳久氏によって採集されたクモの標本を検する機会を得た。これらの標本は、植物生態学を専門とする田中氏が、各地での植生調査の折に採集されたものである。ここでは、これらの同定結果を記録する。記述にあたって、採集日については西暦の 19 を省略し年・月・日に 2 ケタずつを当て 6 ケタで表記した。

なお、報告に先立ち、貴重な標本を御恵与くださった田中徳久氏に厚く御礼申し上げる。

I 沖 縄

<i>Phiroponella</i> sp.	ウズグモの一種
♀ 871031 波照間島	
<i>Uloborus</i> sp.	ウズグモの一種
♀ 871031 波照間島	
<i>Achaeareana japonica</i> (Böös. et Str., 1906)	ヒメグモ
♀ 871031 波照間島	
<i>Argyrodes bonadea</i> (Karsch, 1881)	シロカネイソウロウグモ
♂ ♀ 871031 波照間島	
<i>Cyclosa japonica</i> Böös. et Str., 1906	ヤマトゴミグモ
♀ 871031 波照間島 ♀ 871102 与那国島	
<i>Cyclosa mulmeinensis</i> (Thorell, 1887)	トゲゴミグモ
♀ 871031 波照間島 ♀ 871102 与那国島 ♂ ♀ 880201 沖縄島 ♀ 880202 沖縄島	
<i>Gasteracantha mammosa</i> C. Koch, 1845	チブサトゲグモ
♀ 871031 波照間島 ♀ 880202 沖縄島 ♀ 880205 伊平屋島	
<i>Neoscona theisi</i> (Walckenaer, 1841)	ホシスジオニグモ
♀ 871102 与那国島 ♀ 880202 沖縄島	
<i>Neoscona subpul lata</i> (Böös. et Str., 1906)	ヘリジロオニグモ
♂ ♀ 871031 波照間島 ♀ 871102 与那国島	
<i>Araneidae</i> gen. et sp.	オニグモの一種
♀ 871102 与那国島	
<i>Leucauge blanda</i> (L. Koch, 1878)	チュウガタシロカネグモ
♀ 871031 波照間島	
<i>Agelen a</i> sp.	クサグモの一種
♀ 871102 与那国島	

* 神奈川県立野庭高等学校

<i>Coelotes</i> sp.	ヤチグモの一種
♀ 871029 西表島	
<i>Pardosa yaginumai</i> Tanaka, 1977	キシベコモリグモ
♂ 880204 伊是名島	
<i>Hasarius adansonii</i> (Audouin, 1827)	アダンソンハエトリ
♂ 880202 沖縄島	

Ⅱ 小 笠 原

<i>Argyrodes bonadea</i> (Karsch, 1881)	シロカネイソウロウグモ
♀ 880310 父島 ♂ ♀ 880311 母島 ♀ 880314 母島 ♀ 880316 母島	
<i>Theridion</i> sp.	ヒメグモの一種
♂ ♀ 880309 父島 ♂ ♀ 880311 母島 ♀ 880316 母島	
<i>Cyclosa camelodes</i> (Thorell, 1878)	ハマゴミグモ
♂ ♀ 880309 父島 ♂ ♀ 880310 父島 ♂ ♀ 880311 母島 ♂ ♀ 880312 母島	
♂ ♀ 880313 母島 ♂ ♀ 880314 母島 ♀ 880315 母島 ♂ ♀ 880316 母島	
♂ ♀ 880318 父島	
<i>Cyclosa insulana</i> (Costa, 1834)	シマゴミグモ
♀ 880310 父島 ♀ 880311 母島 ♀ 880312 母島 ♀ 880313 母島 ♀ 880314 母島	
♀ 880316 母島	
<i>Neoscona theisi</i> (Walckenaer, 1841)	ホシスジオニグモ
♀ 880309 父島 ♀ 880318 父島	
<i>Araneidae gen. et sp.</i>	オニグモの一種
♀ 880318 父島	
<i>Araneidae gen. et sp.</i>	オニグモの一種
♀ 880318 父島	
<i>Leucauge</i> sp.	シロカネグモの一種
♂ ♀ 880313 母島 ♀ 880314 母島 ♀ 880315 母島	
<i>Tetragnatha maxillosa</i> Thorell, 1895	ヤサガタアシナガグモ
♂ ♀ 880312 母島	

Ⅲ 硫 黃 島

<i>Argyrodes bonadea</i> (Karsch, 1881)	シロカネイソウロウグモ
♀ 871129	
<i>Theridion</i> sp.	ヒメグモの一種
♂ ♀ 871130	

<i>Cyclosa camelodes</i> (Thorell, 1878)	ハマゴミグモ
♀ 871129	
<i>Neoscona theisi</i> (Walckenaer, 1841)	ホシスジオニグモ
♀ 881129 ♀ 881130	
<i>Lycosa boninensis</i> Tanaka, 1989	オガサワラコモリグモ
♂ 871130	

M 三 宅 島

<i>Achaeareana tepidariorum</i> (C. Koch, 1841)	オオヒメグモ
♀ 870419	
<i>Anelosimus crassipes</i> (Böös. et Str., 1906)	アシブトヒメグモ
♂ 870419	
<i>Nematogmus sanguinolentus</i> (Walckenaer, 1837)	チビアカサラグモ
♂ 870419	
<i>Ummeliata osakaensis</i> (Oi, 1960)	オオサカアカムネグモ
♀ 870419	
<i>Metleuauge yunohamensis</i> (Böös. et Str., 1906)	メガネドヨウグモ
♀ 870420	
<i>Neoscona subpullata</i> (Böös. et Str., 1906)	ヘリジロオニグモ
♀ 870419	
<i>Leuauge blanda</i> (L. Koch, 1878)	チュウガタシロカネグモ
♂ ♀ 870419	
<i>Pardosa astrigera</i> L. Koch, 1878	ウツキコモリグモ
♂ ♀ 870419	
<i>Plexippus paykulli</i> (Audouin, 1827)	チャスジハエトリ
♂ 870419	

V 真鶴(神奈川県)

<i>Anelosimus crassipes</i> (Böös. et Str., 1906)	アシブトヒメグモ
♀ 860708	
<i>Cyclosa argenteoalba</i> Böös. et Str., 1906	ギンメッキゴミグモ
♀ 851015	
<i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch, 1878	アシナガグモ
♀ 860708	
<i>Oxyopes sertatus</i> L. Koch, 1878	ササグモ
♂ 860707	

Phrurolithus pennatus Yaginuma, 1969 ヤバネウラシマグモ
♀ 860708

V 八ヶ岳、清里

Linyphia angulifera Schenkel, 1953 ハンモックサラグモ
♀ 860621 清里

Linyphia radiata Walckenaer, 1841 シロブチサラグモ
♂ ♀ 860730 八ヶ岳

Ummeliata angulituberis (Oi, 1960) コトガリアカムネグモ
♀ 860730 八ヶ岳

Metleucauge yunohamensis (Böls. et Str., 1906) メガネドヨウグモ
♀ 860621 清里

Pardosa lugubris (Walckenaer, 1802) エゾコモリグモ
♀ 860802 清里

Micrommata virescens (Clerck, 1758) ツユグモ
♂ 860802 清里

VII 北海道

Uloborus yesoensis (Saito, 1934) エゾウズグモ
♀ 870825 野付

Callobius hokkaido Leech, 1971 エゾガケジグモ
♂ 870819 日高

Achaearanea tabulata Levi, 1980 オオツリガネヒメグモ
♀ 870819 日高

Theridion rapulum Yaginuma, 1960 ギボシヒメグモ
♀ 870819 日高

Theridion riparium Blackwall, 1834 イワマヒメグモ
♀ 870812 利尻

Leptophantes cericeus (S. Saito, 1934) キヌキリグモ
♂ 870819 日高

Linyphia angulifera Schenkel, 1953 ハンモックサラグモ
♀ 870709 利尻 ♀ 870819 日高

Linyphia emphana Walckenaer, 1873 タイリクサラグモ
♂ 870709 利尻 ♀ 870812 利尻 ♂ ♀ 870813 利尻 ♀ 870819 日高

Linyphia marginella (Oi, 1960) コシロブチサラグモ
♀ 870818 日高 ♀ 870822 ニペソツ山 ♀ 870826 羅臼

<i>Linyphia radiata</i> Walckenaer, 1841	シロブチサラグモ
♀ 870625 サロマ湖	
<i>Linyphiidae gen. et sp.</i>	サラグモの一種
♂ 870819 日高 ♂ 870820 十勝岳	
<i>Araneus cornutus</i> Clerck, 1758	ナカムラオニグモ
♀ 870625 サロマ湖 ♂ ♀ 浜小清水	
<i>Araneus nordmanni</i> (Thorell, 1870)	ノルドマンオニグモ
♀ 870815 利尻 ♀ 870820 十勝岳	
<i>Araneus patagiatus</i> Fabricius, 1775	コウモリオニグモ
♀ 870818 日高	
<i>Araneus pinguis</i> (Karsch, 1879)	アカオニグモ
♀ 870825 野付	
<i>Araneus</i> sp.	マメオニグモの一種
♀ 870709 利尻	
<i>Araniella</i> sp.	ムツボシオニグモの一種
♀ 870617 礼文島	
<i>Cyclosa argenteoalba</i> Bois. et Str., 1906	ギンメッキゴミグモ
♀ 870812 利尻	
<i>Neoscona adianta</i> (Walckenaer, 1802)	ドヨウオニグモ
♀ 870827 野付 ♀ 870828 鉄路	
<i>Pronous minutus</i> (Saito, 1939)	コオニグモモドキ
♀ 870628 利尻 ♂ 870706 利尻	
<i>Yaginumia sia</i> (Strand, 1906)	ズグロオニグモ
♂ 870625 サロマ湖	
<i>Zilla sachalinensis</i> (Saito, 1934)	カラフトオニグモ
♂ ♀ 870620 落石岬 ♀ 870621 鉄路 ♀ 870709 利尻 ♀ 870812 利尻	
<i>Tetragnatha pinicola</i> L. Koch, 1870	ミドリアシナガグモ
♂ 870621 鉄路 ♀ 870819 日高	
<i>Tetragnatha squamata</i> Karsch, 1879	ウロコアシナガグモ
♀ 870813 利尻	
<i>Arctosa daisetsuzana</i> (Saito, 1934)	ダイセツコモリグモ
♂ 870818 日高 ♀ 870823 大雪	
<i>Arctosa kawabe</i> Tanaka, 1985	カワベコモリグモ
♂ 870819 日高	
<i>Trochosa ruricola</i> (De Geer, 1778)	アライトコモリグモ
♂ ♀ 870618 豊富	

<i>Xerolycosa nemoralis</i> (Westring, 1861)	モリコモリグモ
♂ 870819 日高	
<i>Chiracanthium erraticum</i> (Walckenaer, 1802)	アカスジコマチグモ
♀ 870706 利尻 ♀ 870813 利尻	
<i>Chiracanthium japonicum</i> Böss. et Str., 1906	カバキコマチグモ
♀ 870709 利尻	
<i>Clubiona yagata</i> Yaginuma, 1972	ヤガタフクログモ
♀ 870819 日高	
<i>Oxyptila</i> sp.	オチバカニグモの一種
♂ 870701 礼文島	
<i>Thomisidae</i> gen. et sp.	カニグモの一種
♂ 870628 利尻	
<i>Philodromus aureolus</i> (Clerck, 1758)	コガネエビグモ
♂ 870709 利尻	
<i>Phintella difficilis</i> (Böss. et Str., 1906)	マガネアサヒハエトリ
♂ 870818 日高	

猿島のクモ

熊田憲一*

1973年から1979年6月までの6年あまり、著者は三浦半島のクモの解明を目的に半島全域を調査した。横須賀の沖に浮かぶ猿島には、山川守君と1973年10月3日に訪れ、二人で10科30種を記録し報告した。その後も数回渡島を計画したが、波浪が高く船が運行中止になっていたり、休航日だったりで、三浦半島の調査中に再渡島することは出来なかった。この1回のみの調査という不十分さを補うためと、自然の多い孤島という条件に引かれ再び猿島を訪れ、クモを調べることにした。今回は1987年4月より1988年3月まで採集調査を行った結果を報告する。

報告にあたり、採集調査に協力して頂いた、井上房枝氏・佐藤幸子氏と、我が家一同にお礼申し上げる。

猿島は、近くの野島・夏島が埋め立てられた現在、東京湾で唯一の自然の島となってしまった。猿島へは横須賀市三笠公園の横から小さな船に乗って約1.7km、10分ほどで着く。南北450m、東西200m、海拔39m、面積55, 500m²、周囲1.6kmの小さな無人島である。江戸末期から第二次世界大戦が終わるまで、軍事目的から一般人の立ち入ることが出来ない島であった。要塞化のため頂上部を削られたものの、要塞を覆うため自然が良く残され、タブを主体とした常緑樹が島全体を覆っている。今は自然公園として開放されている。

島内では主に次のコースで歩いた。船着き場から島を縦断する本道を進み、要塞の並ぶ切通しから尾根へ出る道が分かれるT字路（自称峠）に出る。ここまではカネコトタテグモ・シマミヤグモが多い。峠を中心にした地点はコサラグモ・クマダヤマジコナグモ・ヤマジドヨウグモ等が多い。峠から右へ登り、尾根へ出たところでコガネグモが見られた。尾根道を行くと最高地点に展望台がある。ハツリ・アサヒエビグモ等を見ながら行くと、十字路に出る。左にトンネルがあり、抜けるとさきほどの峠に出る。右は海岸におりる道で、この先からも海岸に下りることができる。海岸は磯浜で、イソハエトリが多い。トペラ等の海岸の木にはヘリジロオニグモ・アシプトヒメグモ・ヒシガタグモが見られる。岩の割れ目や海蝕洞ではイソタナグモが巣を作っていた。島の西側は崖が険しく進むことが出来ない。東の海岸線を回るとそのまま船付き場に戻ってくる。このほか、いくつかの小さな道があり、時に応じてバラエティーに富んだコースが選べた。

採集調査日

1973年10月3日(7310)

1987年4月28日(8704)・5月20日(8705)・6月13日(8706)・7月10日(8710)
8月14日(8708)・10月20日(8710)・11月23日(8711)

1988年1月24日(8801)

今回の調査に当たり、1973年の標本を再同定した結果、5種の削除、6種の追加があることが判明しました。なお削除する5種をここに掲げますので、KISHIDAI A 45号をお持ちの方は訂

正をお願いします。追加種についてはリストに記録しました。

1. カグヤヒメグモ
2. ヤミイロオニグモ
3. シマゴミグモ
4. メガネヤチグモ
5. ヤサコマチグモ

カグヤヒメグモとメガネヤチグモの2種は、今回の調査で正しく記録された。

目 錄

採集年月は4桁の略（西暦の後2桁と月），令期等は雄成体M，雄幼体m，雌成体F，雌幼体f，雌雄不明幼体y，卵のうe，確認のみL，で表示した。

1. *Antrodiaetidae*

1. *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch) カネコトタテグモ
7310 巣口確認， 8704 F.

2. *Dictynidae*

2. *Lathys humilis* Blackwall カレハグモ
7310 山川氏採集。

3. *Uloboridae*

3. *Uloborus sybotides* Bo's. et Str. カタハリウズグモ
8705 MFf, 8706 F, 8707 F.

4. *Segestriidae*

4. *Ariadna insulicola* Yaginuma シマミヤグモ
7310 Ff, 8704 F, 8705 F, 8710 F.

5. *A. lateralis* (Karsch) ミヤグモ
8704 F, 8710 F.

5. *Oonopidae*

6. *Ischmothyreus narutomii* (Nakatsudi) ナルトミダニグモ
8711 Mf.

6. *Theridiidae*

7. *Achaearanea culicivora* (Bo's. et Str.) カグヤヒメグモ
8705 mf, 8707 MF.

8. *A. japonica* (Bo's. et Ste.) ヒメグモ
8708 F.

9. *A. tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ
7310 f, 8704 Ff, 8705 F, 8706 MFf, 8708 MF, 8710 y, 8801 y.

10. *Anelosimus crassipes* (Bo's. et Str.) アシブトヒメグモ
7310 f, 8704 Mf, 8705 MmFf, 8707 f, 8708 f, 8710 fy, 8711 mf.

11. *Argyrodes bonadea* (Karsch) シロカネイソウロウグモ

	8706 F, 8708 F, 8710 y.	
12.	<i>A. cylindrogaster</i> (Simon)	オナガグモ
	8705 f, 8710 f.	
13.	<i>A. saganus</i> (Böss. et Str.)	ヤリグモ
	7310 L.	
14.	<i>Dipoena castrata</i> Böss. et Str.	ボカシミジングモ
	8705 F.	
15.	<i>D. mustelina</i> (Simon)	カニミジングモ
	8705 Fy, 8707 F.	
16.	<i>Episinus affinis</i> Böss. et Str.	ヒシガタグモ
	7310 y, 8705 MF, 8711 f.	
17.	<i>E. mirabilis</i> (Böss. et Ste.)	ハラナガヒシガタグモ
	8710 my.	
18.	<i>Stemmops nipponicus</i> Yaginuma	スネグロオチバヒメグモ
	8710 f, 8711 mFf, 8801 mf.	
19.	<i>Theridion sterninotatum</i> Böss. et Str.	ムナボシヒメグモ
	8708 Fe.	
	7. <i>Linyphiidae</i>	
20.	<i>Bathyphantes tateyamaensis</i> (Oi)	タテヤマテナガグモ
	8704 M, 8801 MF.	
21.	<i>Linyphia oidedicata</i> (Helsdingen)	ヘリジロサラグモ
	8704 F, 8705 F, 8707 MmF, 8710 f, 8711 F.	
22.	<i>Meioneta obliqua</i> Oi	ナナメケシグモ
	8706 M.	
23.	<i>Aprifrontalis mascula</i> (Karsch)	コサラグモ
	7310 y, 8704 F, 8705 MF, 8706 MF, 8710 mf, 8711 mf.	
24.	<i>Asperthorax communis</i> Oi	ザラアカムネグモ
	8704 F.	
25.	<i>Diplocephaloidea saganus</i> (Böss. et Str.)	ハラジロムナキグモ
	8705 F, 8706 F.	
26.	<i>Gnathonarium exsiccatum</i> (Böss. et Str.)	ニセアカムネグモ
	8706 M, 8710 MF.	
27.	<i>Paratapinocyba kumadai</i> H. Saito	クマダヤマジコナグモ
	8711 MF, 8801 MF.	
28.	<i>Ummeliata erigonoides</i> (Oi)	トガリアカムネグモ
	8707 F.	

29. Linyphiidae sp.	サラグモの一種
8710 M.	
8. Mimetidae	
30. <i>Ero japonica</i> Böss. et Str.	センショウグモ
7310 f, 8705 y, 8710 e.	
9. Theridiosomatidae	
31. <i>Ogulnius pullus</i> Böss. et Str.	ヤマジグモ
7310 F.	
10. Araneidae	
32. <i>Acusilas coccineus</i> Simon	ハツリグモ
8705 Ff, 8708 y.	
33. <i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ
7310 f.	
34. <i>A. pentagrammicus</i> (Karsch)	アオオニグモ
8704 M.	
35. <i>Neoscona mellotteei</i> (Simon)	ワキグロサツマノミダマシ
7310 F, 8708 F.	
36. <i>N. scylloides</i> (Böss. et Str.)	サツマノミダマシ
8704 y, 8705 y, 8706 y, 8707 y.	
37. <i>N. scylla</i> (Karsch)	ヤマシロオニグモ
8705 y, 8706 f.	
38. <i>N. subpullata</i> Böss. et Str.	ヘリジロオニグモ
7310 f, 8704 Mf, 8705 MFfy, 8706 F.	
39. <i>Argiope amoena</i> L. Koch	コガネグモ
8704 f, 8707 MF.	
40. <i>A. bruennichii</i> (Scopoli)	ナガコガネグモ
7310 F, 8705 y.	
41. <i>A. minuta</i> Karsch	コガタコガネグモ
8706 f, 8708 M.	
42. <i>Cyclosa octotuberculata</i> Karsch	ゴミグモ
7310 f, 8704 m, 8705 f, 8711 y.	
43. <i>C. sedeculata</i> Karsch	ヨツデゴミグモ
8705 MF, 8710 mf, 8711 f, 8801 m.	
44. <i>Larinia argiopiformis</i> Böss. et Str.	コガネグモダマシ
7310 L.	
45. <i>Meta reticuloides</i> , Yaginuma	ヤマジドヨウグモ

	7310 F, 8707 y, 8708 F, 8710 F.	
46. <i>Nephila clavata</i> L. Koch		ジョロウグモ
	7310 MF, 8705 y, 8706 y, 8707 y, 8708 mf.	
	11. <i>Tetragnathidae</i>	
47. <i>Leucauge subblanda</i> Böss. et Str.		コシロカネグモ
	8705 m, 8706 Mmf, 8707 MFf, 8708 F.	
48. <i>L. subgemmea</i> Böss. et Str.		キララシロカネグモ
	8706 Ff.	
49. <i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch		アシナガグモ
	8705 Ff.	
50. <i>T. squamata</i> Karsch		ウロコアシナガグモ
	8707 MF.	
	12. <i>Urocteidae</i>	
51. <i>Uroctea compactilis</i> L. Koch		ヒラタグモ
	8707 y.	
	13. <i>Agelenidae</i>	
52. <i>Agelena limbata</i> Thorell		クサグモ
	8704 y, 8705 y, 8706 f, 8708 F.	
53. <i>A. opulenta</i> L. Koch		コクサグモ
	7310 F, 8704 y, 8705 y, 8706 y, 8707 f.	
54. <i>Coelotes insidiosus</i> L. Koch		シモフリヤチグモ
	7310 F, 8704 F, 8705 F, 8710 F.	
55. <i>C. kitazawai</i> Yaginuma		アズマヤチグモ
	8711 F, 8801 F.	
56. <i>C. luctuosus</i> L. Koch		メガネヤチグモ
	7310 L, 8710 F.	
57. <i>Litisedes shirahamensis</i> Oi		イソタナグモ
	8705 MF.	
	14. <i>Lycosidae</i>	
58. <i>Pardosa astrigera</i> L. Koch		ウツキコモリグモ
	8704 F.	
	15. <i>Clubionidae</i>	
59. <i>Clubiona kurilensis</i> Böss. et Str.		ヒメフクログモ
	7310 M.	
60. <i>C. vigil</i> Karsch		ムナアカフクログモ
	8705 Mmy, 8707 f.	

61. *C.* sp. フクログモの一種
 8705 F, 8706 F.
62. *Orthobula crucifera* Bö. et Str. オトヒメグモ
 8711 M.
63. *Phrurolithus nipponicus* Kishida ウラシマグモ
 8705 MF, 8710 mf, 8801 mf.
64. *P. pennatus* Yaginuma ヤバネウラシマグモ
 8705 mf, 8706 Mf, 8707 M, 8710 f, 8711 f, 8801 y.
 16. *Gnaphosidae*
65. *Gnaphosidae* sp. ワシグモ科の一種
 8705 f.
17. *Thomisidae*
66. *Boliscus tuberculatus* (Simon) イボカニグモ
 8705 y.
67. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius) ハナグモ
 7310 Mf, 8706 y, 8708 y, 8710 MF.
68. *Oxyptila nipponica* Ono ニッポンオチバカニグモ
 8710 F.
69. *Thomisus labefactus* Karsch アズチグモ
 8705 y, 8706 y, 8707 M, 8710 y.
70. *Tmarus* sp. トラフカニグモの一種
 8707 F.
71. *Xysticus croceus* Fox ヤミイロカニグモ
 7310 f, 8705 MmF.
 18. *Philodromidae*
72. *Philodromus auricomus* L. Koch キンイロエビグモ
 8705 mf.
73. *P. subaureolus* Bö. et Str. アサヒエビグモ
 7310 f, 8705 mf, 8706 MF, 8707 M, 8710 y, 8711 f.
74. *Tibellus tenellus* (L. Koch) シヤコグモ
 7310 f, 8704 y, 8705 mFy, 8706 y, 8707 f.
19. *Salticidae*
75. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille) ネコハエトリ
 7310 L, 8705 F, 8711 f.
76. *Helicius cylindrata* (Karsch) コジャバラハエトリ
 8705 f.

77. <i>Icius himeshimensis</i> D'On. et Str.	イソハエトリ
8704 Ff, 8705 MF, 8707 Mf.	
78. <i>Marpissa elongata</i> (Karsch)	ヤハズハエトリ
8706 M.	
79. <i>M. pulla</i> (Karsch)	ヨダンハエトリ
8705 MmFf, 8706 M, 8710 y.	
80. <i>Menemerus confusus</i> Bö. et Str.	シラヒゲハエトリ
7310 F, 8707 f.	
81. <i>Myrmarachne innermichelis</i> Bö. et Str.	ヤサアリグモ
8705 y, 8706 y.	
82. <i>M. japonica</i> (Karsch)	アリグモ
7310 L, 8704 y, 8705 MF, 8710 f.	
83. <i>Plexippus paykulli</i> (Audouin)	チャスジハエトリ
7310 Ff.	
84. <i>Rhene atrata</i> (Karsch)	カラスハエトリ
8710 f.	
85. <i>Silerella vittata</i> (Karsch)	アオオビハエトリ
7310 F, 8705 MF.	

以上 1973 年と今回の調査で、猿島島内から 19 科 85 種（確定種 82 種、不明 3 種）を記録した。また、三浦半島新記録種としてタテヤマテナガグモ・クマダヤマジコナグモ・ニッポンオチバカニグモ・キンイロエビグモ・コジャバラハエトリの 5 種が記録された。

今回の調査で、猿島は半島部から 1.7 km 離れた東京湾上にあるものの、記録された確定種 82 種のうち 77 種は半島部と共通であり、際立った違いは認められなかった。

水系を持たない閉鎖された特殊環境ともいえるこの島から、80 種を越えるクモが記録されたことは、棲息環境がクモにとって比較的良好であるためと考えられる。

引用文 献

熊田 憲一, 1980. 三浦半島の真正蜘蛛類. KISHIDAIA 45:9-27.

日本ナショナルトラスト編, 1987. 東京湾の自然島さるしま. トラストブックシリーズ 13

(改訂版) : 1-16

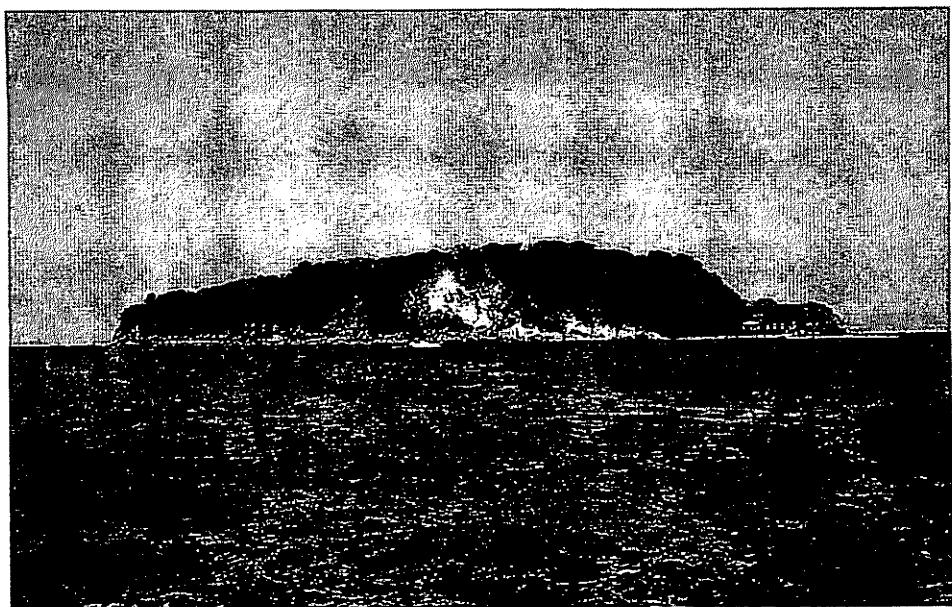


図1. 猿島遠景

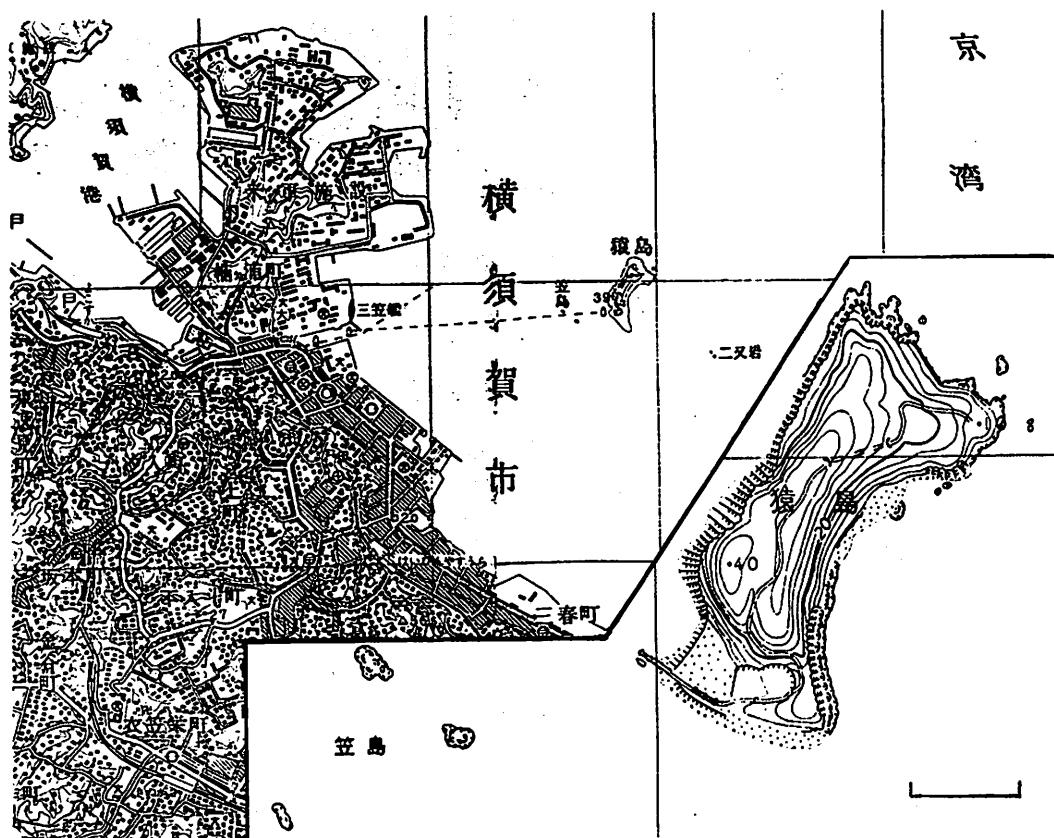


図2. 猿島の位置と地形

東京蜘蛛談話会 昭和62年度(1987年度)観察採集会報告

丹沢・大沢周辺のクモ

笛岡文雄

昭和62年度(1987年度)における東京蜘蛛談話会観察採集会は、昭和62年5月17日、7月25～27日(合宿と合同会)，10月18日、昭和63年2月21日の4回に渡って丹沢・大倉周辺にておこなわれた。この場所は針葉樹の植林地、川原、畠地、住宅地と、多様性に富んだ地域を一日で一回りできる採集地である。また採集は昼間が主であったが、合宿と合同会であった7月25、26日は夜間もおこなった。天候は5月17日が雨、他は全て晴れであった。

参加者(アイウエオ順・敬称略)

1987年5月17日 8名

池田博明、板倉泰弘、稻葉茂代、井上房枝、熊田憲一、笛岡文雄、谷川明男、松浦祐司。

1987年7月25日～27日 26名

浅間茂、池田博明、板倉泰弘、稻葉茂代、井上房枝、小澤實樹、加藤輝代子・倫之、河又和夫、熊田憲一・熊田理恵・宗幸・浩樹・由理、小池牧子、小峰光弘、笛岡文雄、高野ツヤ子、立川晴二、蓮沼克己、古浜隆、牧孝匡、松浦祐司、本木洋子。(会員外)萩本善久・他1名。

1987年10月18日 10名

池田博明、板倉泰弘、稻葉茂代、小野展嗣、熊田憲一、笛岡文雄、新海明、新海栄一、高橋登、谷川明男。

1987年10月18日 9名

池田博明、板倉泰弘、井上房枝、熊田憲一、小峰光弘、笛岡文雄、新海明、高橋登、谷川明男。

目録

この目録は当日採集あるいは観察された種と、後日標本同定された種を笛岡(7月25～27日は板倉泰弘氏)が記録し、集計したものである。略号説明・M(雄成体)F(雌成体), m(雄幼体), f(雌幼体), y(雌雄不明幼体), e(卵のう), -(未確認)

5月 7月 10月 2月

1. <i>Antrodiaetidae</i> カネコトタテグモ科					
1. <i>Antrodiaetus roretzi</i>	カネコトタテグモ		-	F	e
2. <i>Ctenizidae</i> トタテグモ科			-	-	-
2. <i>Ummidia flagaria</i>		キノボリトタテグモ	f	-	-
3. <i>Atypidae</i> ジグモ科					-
3. <i>Atypus karschi</i>	ジグモ		F	M	F
			y		-

5月 7月 10月 2月

4. *Uloboridae* ウズグモ科

4. <i>Hyptiotes affinis</i>	オウギグモ	—	—	y	—
5. <i>Miagrammopes orientalis</i>	マネキグモ	f	Fy	y	y
6. <i>Uloborus sybotides</i>	カタハリウズグモ	—	MF	—	—
7. <i>U. varians</i>	ウズグモ	—	y	y	y
<i>U. sp.</i>	(ウズグモの一種)	—	F	—	—
<i>U. sp.</i>	(ウズグモの一種)	—	y	—	—

5. *Segestriidae* エンマグモ科

8. <i>Ariadna lateralis</i>	ミヤグモ	—	—	f	—
-----------------------------	------	---	---	---	---

6. *Pholcidae* ユウレイグモ科

9. <i>Pholcus crypticolens</i>	ユウレイグモ	Mm	F	mf	mfy
--------------------------------	--------	----	---	----	-----

7. *Theridiidae* ヒメグモ科

10. <i>Achaearanea angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ	F	Fye	Fe	—
11. <i>A. culicivora</i>	ニセンヒメグモ	fy	Fy	—	—
12. <i>A. japonica</i>	ヒメグモ	—	MFfy	F	—
13. <i>A. kompirensis</i>	コンビラヒメグモ	—	Fe	—	—
14. <i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ	y	MFye	y	—
15. <i>Theridion sterninotatum</i>	ムナボシヒメグモ	—	y	—	y
16. <i>T. takayense</i>	タカユヒメグモ	y	F	—	—
17. <i>T. sp.</i>	キヨヒメグモ	—	F	—	—
18. <i>Enoplognatha transversifoveata</i>	カレハヒメグモ	—	—	y	y
19. <i>Anelosimus crassipes</i>	アシブトヒメグモ	F	Fy	y	—
20. <i>Dipoena mustelina</i>	カニミジングモ	—	MFf	—	—
21. <i>D. punctisparsa</i>	シモフリミジグモ	—	F	y	—
22. <i>Phoroncidia pilula</i>	ツクネグモ	Fy	—	—	—
23. <i>Chrysso punctifera</i>	ホシミドリヒメグモ	Ff	y	y	y
24. <i>C. venusta</i>	コガネヒメグモ	my	Fe	Fy	y
25. <i>Episinus nubilus</i>	ムラクモヒシガタグモ	—	F	y	y
26. <i>Coleosoma octomaculatum</i>	ヤホシサヤヒメグモ	—	—	f	y
27. <i>Stemmops nipponicus</i>	スネグロオチバヒメグモ	M	—	—	m
28. <i>Argyrodes cylindrogaster</i>	オナガグモ	MFmy	MFye	F	—
29. <i>A. fissifrons</i>	チリイソウロウグモ	y	MFy	y	—
30. <i>A. fur</i>	フタオイソウロウグモ	Fmf	Fe	f	y
31. <i>A. saganus</i>	ヤリグモ	MFf	MFmye	Ff	Fy

5月 7月 10月 2月

8. Linyphiidae サラグモ科					
32. <i>Linyphia fusca</i>	クスミサラグモ	F	y	y	y
33. <i>L. japonica</i>	ツリサラグモ	F	y	—	—
34. <i>L. (Neriene) longipedella</i>	アシナガサラグモ	y	Fy	—	—
35. <i>L. nigripectoris</i>	ムネグロサラグモ	MFm	MF	—	—
36. <i>L. oidedicata</i>	ヘリジロサラグモ	F	—	—	mf y
37. <i>L. yunohamensis</i>	ユノハマサラグモ	MF	y	y	—
38. <i>Arcuphanes tamaensis</i>	タマヤミサラグモ	MFf	—	y	—
39. <i>Asperthorax communis</i>	ザラアカムネグモ	F	—	—	MF
40. <i>Bathyphantes tateyamensis</i>	タテヤマテナガグモ	—	—	—	MF
41. <i>Diplocephalooides saganus</i>	ハラジロムナキグモ	F	—	—	—
42. <i>Doenitzius peniculus</i>	デニーツツサラグモ	—	—	—	MF
43. <i>Meioneta projecta</i>	ツメケシグモ	—	—	—	MF
44. <i>Nematogmus sanguinolentus</i>	チビアカサラグモ	F	—	—	—
9. Mimetidae センショウグモ科					
45. <i>Ero japonica</i>	センショウグモ	—	MFye	—	—
10. Anapidae ヨリメグモ科					
46. <i>Conoculus lyugadinus</i>	ヨリメグモ	—	Fy	—	—
11. Mysmenidae コツブグモ科					
47. <i>Mysmenella jobi</i>	ナンブコツブグモ	—	—	—	f
12. Araneidae コガネグモ科					
48. <i>Araneus ishisauni</i>	イシサワオニグモ	f	y	F	—
49. <i>A. macacus</i>	ヤエンオニグモ	—	y	y	—
50. <i>A. mitificus</i>	ビジョオニグモ	—	y	—	—
51. <i>A. pentagrammicus</i>	アオオニグモ	F	Fy	y	y
52. <i>A. punctigera</i>	コゲチャオニグモ	F	y	—	—
53. <i>A. semilunari</i>	マルヅメオニグモ	—	MFy	—	—
54. <i>A. uyemurai</i>	ヤマオニグモ	—	F	y	—
55. <i>A. ventricosus</i>	オニグモ	My	Fmy	F	—
56. <i>A. viperifer</i>	カラオニグモ	y	—	—	—
57. <i>A. sp.</i>	マメオニグモ	—	my	—	—
58. <i>Araniella sp.</i>	ムツボシオニグモ	F	Fy	f	—
59. <i>A. sp.</i>	ハナオニグモ	—	y	—	—
60. <i>Neoscona doenitzi</i>	ドヨウオニグモ	—	F	—	—
61. <i>N. fuscocolorata</i>	ヤミイロオニグモ	—	—	y	—

			5月	7月	10月	2月
62.	<i>N. mellotteei</i>	ワキグロサツマノミダマシ	—	y	—	—
63.	<i>N. scylla</i>	ヤマシロオニグモ	y	Fy	—	y
64.	<i>N. scyloides</i>	サツマノミダマシ	y	MF	—	—
65.	<i>Zilla sachalinensis</i>	カラフトオニグモ	Mf	y	y	—
66.	<i>Pronous minutus</i>	コオニグモモドキ	—	—	—	y
67.	<i>Hypsosinga sanguinea</i>	シロスジショウジョウグモ	—	—	F	—
68.	<i>Yaginumia sia</i>	ズグロオニグモ	—	m	—	—
69.	<i>Cyrtarachne bufo</i>	トリノフンダマシ	—	My	—	—
70.	<i>C. inaequalis</i>	オオトリノフンダマシ	—	Mfy	—	—
71.	<i>C. nagasakiensis</i>	シロオビトリノフンダマシ	—	MF	—	—
72.	<i>Paraplectana sakaguchi</i>	サカグチトリノフンダマシ	—	y	—	—
73.	<i>Gasteracantha kuhlii</i>	トゲグモ	—	Ffy	—	—
74.	<i>Argiope amoena</i>	コガネグモ	m	F	—	—
75.	<i>A. boesenbergi</i>	チュウガタコガネグモ	—	—	y	m
76.	<i>A. bruennichi</i>	ナガコガネグモ	—	ye	—	—
77.	<i>A. minuta</i>	コガタコガネグモ	—	y	—	—
78.	<i>Larinia argiopiformis</i>	コガネグモダマシ	—	F	—	—
79.	<i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	M	y	y	—
80.	<i>Poltys illepidus</i>	ゲホウグモ	—	e	—	—
81.	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ	F	Fy	—	—
82.	<i>C. laticauda</i>	キジロゴミグモ	F	—	—	—
83.	<i>C. octotuberculata</i>	ゴミグモ	Fmf	—	f	—
84.	<i>C. sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ	Ff	Ffye	y	—
85.	<i>Chorizopes nipponicus</i>	ヤマトカナエグモ	MFy	F	—	—
86.	<i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ	—	fy	MFy	—
87.	<i>Metleucauge kompirensis</i>	タニマノドヨウグモ	F	—	—	—
88.	<i>M. yunohamensis</i>	メガネドヨウグモ	F	f	y	y
13.	Theridiosomatidae カラカラグモ科					
89.	<i>Ogulnius pullus</i>	ヤマジグモ	f	—	—	—
14.	Tetragnathidae アシナガグモ科					
90.	<i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ	y	MFy	—	—
91.	<i>L. subblanda</i>	コシロカネグモ	m	M	—	—
92.	<i>L. subgemmea</i>	キララシロカネグモ	—	F	—	—
93.	<i>Tetragnatha maxillosa</i>	ヤサガタアシナガグモ	—	—	y	—
94.	<i>T. pinicola</i>	ミドリアシナガグモ	F	—	—	—

			5月	7月	10月	2月
95.	<i>T. praedonia</i>	アシナガグモ	Ff	MFy	y	-
96.	<i>T. squamata</i>	ウロコアシナガグモ	MF	y	-	-
97.	<i>T. yesoensis</i>	エゾアシナガグモ	M	-	-	-
	15. <i>Urocteidae</i> ヒラタグモ科					
98.	<i>Uroctea compactilis</i>	ヒラタグモ	-	Fye	y	-
	16. <i>Agelenidae</i> タナグモ科					
99.	<i>Agelena limbata</i>	クサグモ	y	MF	-	-
100.	<i>A. opulenta</i>	コクサグモ	y	MFy	F	-
101.	<i>Coelotes corasides</i>	ヤマヤチグモ	fy	Fy	y	F
102.	<i>C. exitialis</i>	ヤチグモ	-	-	-	Fy
103.	<i>C. kitazawai</i>	アズマヤチグモ	-	-	-	F
104.	<i>C. luctuosus</i>	メガネヤチグモ	Fe	-	F	-
	<i>C. sp.</i>	(ヤチグモの一種)	-	y	-	-
	17. <i>Hahniidae</i> ハタケグモ科					
105.	<i>Hahnia corticicola</i>	ハタケグモ	-	-	-	F
	18. <i>Pisauridae</i> キシダグモ科					
106.	<i>Dolomedes pallitrsis</i>	スジブトハシリグモ	-	F	-	-
107.	<i>D. raptor</i>	アオグロハシリグモ	y	-	Fy	y
108.	<i>D. sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ	y	MFmfy	f	y
109.	<i>Pisaura lama</i>	アズマキシダグモ	MF	Fe	y	y
	19. <i>Lycosidae</i> コモリグモ科					
110.	<i>Arctosa ebicha</i>	エビチャコモリグモ	-	-	-	F
111.	<i>A. fujii</i>	フジイコモリグモ	F	-	-	-
112.	<i>Pardosa astrigera</i>	ウツキコモリグモ	-	-	y	-
113.	<i>P. laura</i>	ハリゲコモリグモ	MF	-	-	-
114.	<i>P. yaginumai</i>	キシベコモリグモ	-	MFy	MFy	-
115.	<i>Trochosa ruricola</i>	アライトコモリグモ	Ff	y	-	-
	sp.	(コモリグモの一種)	y	-	-	-
	sp.	(コモリグモの一種)	-	F	-	-
	sp.	(コモリグモの一種)	-	y	-	-
	20. <i>Oxyopidae</i> ササグモ科					
116.	<i>Oxyopes sertatus</i>	ササグモ	y	MF	-	y
	O. sp.	(ササグモの一種)	-	y	-	-
	21. <i>Thomisidae</i> カニグモ科					
117.	<i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	MF	F	f	-

			5月	7月	10月	2月
118.	<i>X. saganus</i>	オオヤミイロカニグモ	—	M	—	—
	<i>X. sp.</i>	(ヤミイロカニグモの一種)	—	y	—	—
119.	<i>Bassaniana decorata</i>	キハダカニグモ	y	—	—	y
120.	<i>Synaema globosum</i>	フノジグモ	—	F	—	—
121.	<i>Misumenops japonicus</i>	コハナグモ	fy	Fy	F	y
122.	<i>M. tricuspidatus</i>	ハナグモ	MFe	Ffy	y	—
123.	<i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	F	Fy	f	—
124.	<i>Tmarus piger</i>	セマルトラフカニグモ	—	Fy	—	—
125.	<i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ	—	y	—	—
126.	<i>Lysiteles coronatus</i>	アマギエビスクグモ	F	y	mf	mf
22. Philodromidae エビグモ科						
127.	<i>Philodromus spinitarsis</i>	キハダエビグモ	F	y	—	—
128.	<i>P. subaureolus</i>	アサヒエビグモ	fy	Fy	y	y
129.	<i>Tibellus tenellus</i>	シャコグモ	—	Fye	y	y
23. Salticidae ハエトリグモ科						
130.	<i>Menemerus confusus</i>	シラヒゲハエトリ	—	MF	—	—
131.	<i>Aelurillus festivus</i>	ヤマジハエトリ	—	F	—	—
132.	<i>Yaginumanis sexdentatus</i>	ムツバハエトリ	fy	y	y	y
133.	<i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	f	MFf	—	—
134.	<i>Plexippoides annulipedis</i>	マグラスジハエトリ	—	—	f	—
135.	<i>P. doenitzi</i>	デニーツツハエトリ	f	Fy	MF	—
136.	<i>Carrhottus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	—	y	Ff	—
137.	<i>Marpissa elongata</i>	ヤハズハエトリ	—	M	—	—
138.	<i>Phintella abnormis</i>	チャイロアサヒハエトリ	—	F	—	—
	<i>P. sp.</i>	(アサヒハエトリの一種)	—	y	—	—
139.	<i>Silerella vittata</i>	アオオビハエトリ	—	—	F	—
140.	<i>Harmochirus brachiatus</i>	ウデブトハエトリ	—	F	—	—
141.	<i>H. pullus</i>	キレワハエトリ	—	—	y	—
142.	<i>Rhene atrata</i>	カラスハエトリ	—	MFy	y	—
143.	<i>Synagelides agoriformis</i>	アメイロハエトリ	—	MF	—	—
144.	<i>Sitticus penicillatus</i>	シラホシコゲチャハエトリ	—	Fe	F	—
145.	<i>Euophrys undulatovittata</i>	イナズマハエトリ	—	y	—	—
146.	<i>Laufelia aenea</i>	エキスハエトリ	—	y	—	—
147.	<i>Myrmarachne inermichelis</i>	ヤサアリグモ	—	y	—	—
148.	<i>M. japonica</i>	アリグモ	fy	—	F	—

			5月	7月	10月	2月
24. Clubionidae フクログモ科						
149.	<i>Chiracanthium entittha</i>	アシナガコマチグモ	M	-	-	-
150.	<i>C. japonicum</i>	カバキコマチグモ	-	MF _e	-	-
151.	<i>C. lascivum</i>	ヤマトコマチグモ	-	Fy	-	-
152.	<i>Clubiona jucunda</i>	ヤハズフクログモ	-	M	-	-
153.	<i>C. japonica</i>	ヤマトフクログモ	-	MF	-	-
154.	<i>C. vigil</i>	ムナアカフクログモ	f	f	Fy	-
	<i>C. sp.</i>	(フクログモの一種)	-	y	-	-
155.	<i>Trachelas japonica</i>	ネコグモ	-	y	y	-
156.	<i>Phrurolithus komurai</i>	コムラウラシマグモ	F	-	-	y
157.	<i>P. nipponicus</i>	ウラシマグモ	-	-	-	y
158.	<i>P. pennatus</i>	ヤバネウラシマグモ	-	MFy	-	-
25. Anyphaenidae イツツグモ科						
159.	<i>Anyphaena pugil</i>	イツツグモ	Fe	-	-	-
	<i>A. sp.</i>	(イツツグモの一種)	-	-	-	y
26. Heteropodidae アシダカグモ科						
160.	<i>Heteropoda forcipata</i>	コアシダカグモ	f	MFy	y	-
27. Ctenidae シボグモ科						
161.	<i>Anahita fauna</i>	シボグモ	f	y	-	-
28. Gnaphosidae ワシグモ科						
162.	<i>Gnaphosa kompirensis</i>	メキリグモ	-	-	f	-
	sp.	(ワシグモの一種)	-	y	-	-
	sp.	(ワシグモの一種)	-	y	-	-
計 82 126 69 42						

以上 28 科 162 種を報告する。さらに今回の報告においては、観察例のみと標本同定による確認との区別をおこなっていない。

また今回 7 月 27, 26 日及び 10 月 18 日にヒメカラスハエトリの報告があったが、本種についてはカラスハエトリに含めた。

最後に、合宿時の集計にあたっては板倉泰弘氏のお手を煩わせ、またこの目録作成にあたっては熊田憲一氏にご教授いただいた。お二方にはここにお礼を申し上げる。



7月合宿参加者：ドングリ山荘前にて



5月採集会参加者：渋沢駅前にて



2月採集会参加者：水無川にて



KISHIDAIA No.1~No.58

総 目 次

KISHIDAIA 総目録

創刊20周年記念

No. 1 (1969) - No. 58 (1989)

No. 1 (1969. 1)

キシダイアの発刊にあたって	萱嶋 泉	1
クモの呼称	岸田久吉(遺稿)	1
談話会ノートより		3
岸田久吉氏蔵書目録(真正蜘蛛類)		3
文献紹介: The molting behavior of the black widow spider, <i>Latrodectus mactans</i> . by D. W. Hagstrum (1968), Annals Entmol. Soc. 61(3):591-593.		
	大河内哲二	6

No. 2 (1969. 2)

クモの呼称(続)	岸田久吉(遺稿)	1
談話会ノートより		2
レギュラーメンバー紹介		3
岸田久吉氏蔵書目録(真正蜘蛛類)		4
百科事典のクモ	松本誠治	6

No. 3 (1969. 3)

岸田久吉氏蔵書目録(真正蜘蛛類)	1	
談話会ノートより	5	
クモの名称—昔の名前今の名前—	新海栄一	6

No. 4 (1969. 5)

クモの呼称(続)	岸田久吉(遺稿)	1
----------------	----------	---

No. 5 (1969. 5)

同名を持つ日本のクモとヨーロッパのクモ	八木沼健夫	1
---------------------------	-------	---

高尾山のクモ 東京クモ談話会 3

№ 6 (1969. 10)

川崎市王禅寺付近のクモ (I)	新海栄一 1
網の撮影	松本誠治 5

№ 7 (1969. 10)

文献紹介 : クモの人工飼料 Feeding spiders an artificial diet. by W. B. Peck & W. H. Whitcomb(1968), Entmol. News, 79(9):233-236.	大河内哲二 1
クモの記事 (I)	松本誠治 2
クモの名称 (II) -昔の名前今のはな前-	新海栄一 3
文献紹介 : Black Widow の生命表 A life table for the black widow. by G. B. Deevey & E. S. Deevey(1945), Acad. of Arts & Sci., 36:115-134.	松本誠治 7

№ 8 (1969. 10)

キブネグモの記	岸田久吉(遺稿) 1
山梨県西湖付近のクモ	国見裕久 5

№ 9 (1969. 11)

イソウロウグモ	大河内哲二 1
クモの寄生虫発見記	大河内哲二 2
各地のクモ同定記録 (大菩薩, 神津島, 御蔵島, 三宅島)	大河内哲二 3
ハンゲツオスナキグモの幼体の斑紋について	大河内哲二・新海栄一 6

№ 10 (1969. 11)

シナノトタテグモ(岸田久吉新称)(カネコトタテグモ)	岸田久吉(遺稿) 1
日本帝国産原始蜘蛛類に就いて	岸田久吉(遺稿) 3
岸田久吉先生の遺稿について	萱嶋 泉 6

№11 (1969. 12)

奄美大島のクモ	大河内哲二	1
クモの共存	小野展嗣	3

№12 (1969. 12)

天竜市山東付近のクモ	小林久俊	1
文献紹介 : Augen und systematic bei den Araneae. by H. Homann(1966), Senck. Biol. 47(1):63-66	松本誠治	5
クモの記事(2)	大河内哲二	6

№13 (1970. 1)

キシダイア一年間の歩み	萱嶋 泉	1
ニュージーランドのクモ 3 種	新海栄一・大河内哲二・松本誠治	1
クモの記事(3)	松本誠治	5

№14 (1970. 2)

神奈川県小倉山付近のクモ	新海 明	1
標本保管法私案	松本誠治	3
談話会ノートより		4

№15 (1970. 3)

クモの名称(Ⅲ) -昔の名前・今の名前-	新海栄一	1
クモの同定ポイント(1) オオヒメグモ		6

№16・17 (1970. 5)

Spiders around Ashinoko lake and of Nijima, Manazuru peninsula, Kanagawa Pref.	S. Matsumoto	1
神奈川県多摩ブランザのクモ	国見裕久	3
文献紹介 : Some aspects of the structural organization of the arthropod eye. by O. Trujillo-Cenoz(1965), Symposia on Quantitative Biology.		

30:371-382.	松本誠治	6
クモの天敵に関する文献(1)	大河内哲二	8
奄美大島産蜘蛛類の研究史	大河内哲二	8

No. 18 (1970. 7)

東京都(離島を除く)におけるアシダカグモについて	萱嶋 泉	1
クモの天敵に関する文献(2)	大河内哲二	2
東京蜘蛛談話会最近の収穫より	新海栄一	3
東京蜘蛛談話会会員名簿		5
東京蜘蛛談話会の性格		6
投稿規定		6

No. 19 (1970. 8)

第一回例会に参加して	松本誠治	1
第一回蜘蛛例会に思う	小澤實樹	1
東亜蜘蛛学会第一回例会(報告)	大河内哲二	2
大阪「犬鳴山」「岩湧山」採集目録	松本誠治・新海栄一・小野展嗣・大河内哲二	3
オナガグモの生態観察 2 -餌のとり方について-	新海 明	6

No. 20・21 (1970. 11)

農林害虫の天敵としてクサグモ類の価値	萱嶋 泉	1
千葉県産のクモ(1)	石山鉄幸	3
文献紹介: Effect of insecticides on ant and spider populations in Louisiana sugarcane fields. by A. A. Negm & S. D. Hensley (1969) J. Economic Entomol. 62(4):948-949.	国見裕久	6
昔語りークモノ糸		7
会計報告		8

No. 22 (1971. 1)

東京蜘蛛談話会例会報告		1
反省など(東京蜘蛛談話会例会を終えて)	松本誠治	2
クモ談話会例会におもう	久保田寿一	3

19年ぶりのクモ	高野伸二	4
文献紹介：Biological control of the greenbug by the spider Phidippus audax. by R. Muniappan & H. L. Chada (1970), J. Economic Entmol. 63(5):1712.	国見裕久	5
クモの記事(4)	松本誠治	7

№ 23・24 (1971. 3)

クモの名称(IV) 一昔の名前・今の名前一	新海栄一	1
-----------------------	------	---

№ 25 (1971. 5)

日本の疑問蜘蛛	八木沼健夫	1
アクタ・アラクノロギカに掲載されたハエトリグモ科のクモの記事	松本誠治	3
会員名簿(追加)		6
第一回蜘蛛観察会の御案内		6

№ 26～28 (1971. 11) 東京蜘蛛談話会 5周年記念号(I)

東京蜘蛛談話会の5周年を迎えて	萱鳩 泉	1
静岡県産の洞穴性蜘蛛について	小林久俊	2
ハナグモの人工飼育	石山鉄幸	6
コガネグモとオニグモの教え	九毛音子	7
クモの記事(5)	小野展嗣	10
小観察あれこれ	高野伸二	11
山形市のクモ	吉田 哉	13
表紙に寄せて	小澤實樹	15
標本交換		13
会員名簿(追加)		16

№ 29～32 (1972. 5) 東京蜘蛛談話会 5周年記念号(II)

静岡県沼津市のクモ	小野展嗣	1
丹沢山塊の蜘蛛	山川 守	4
山道にて(ドクグモとコモリグモ)	松本誠治	5
採集ノート(I)	松本誠治	8

真正蜘蛛各地の同定目録	権田重雄	9
クモの記事(6)	国見裕久	13
滝山城跡公園のクモ	東京蜘蛛談話会	15
清澄山の真正蜘蛛類	東京蜘蛛談話会	18
奥秩父のクモ	東京蜘蛛談話会	26
クモの同定ポイント	東京蜘蛛談話会	34
感想文	石山・国見・権田	37
東京蜘蛛談話会 1971 年の活動を省みて		39
迷蛛	小野展嗣	14
クモの文献斡旋		40

No. 33 (1972. 5)

スズミグモの産卵	福本伸男	1
雑感 一生物学の 2 節專一	松本誠治	5
採集ノート	松本誠治	6

No. 34 (1972. 12)

クモを食べるクモの観察	熊田憲一	1
トゲゴミグモの不思議	大利昌久	2
韓国の蜘蛛学の現状	萱嶋 泉	4
採集ノート	石山鉄幸	5
東京蜘蛛談話会例会		6
名古屋での一日		6
紹介：白上謙一著「生物学と方法」	松本誠治	7

No. 35 (1973. 5)

霧積温泉付近のクモ	小林久俊・石山鉄幸・権田重雄	1
蜘蛛の王ミシャッサ「火星の戦士 蜘蛛の王」(早川 S F)	H. O.	4
小観察あれこれ(2)	高野伸二	5
巣箱にいたクモ	石山鉄幸	7
多足類・蜘蛛類合同例会報告		7

№36 (1973. 7)

横浜のクモ 一保土ヶ谷	山川 守	1
クモ小観察(1)夏の景信山にて	新海 明	5
採集ノート(II)	松本誠治	6
クモに教えられる(新聞の投書から)	山川 守	7
KISHIDAIA №26～28 正誤		8

№37 (1973. 12)

蜘蛛をたずねて(1)	大利昌久	1
小観察あれこれ(3)	高野伸二	4
会報(観察会・Dragline)		6

№38 (1974. 5)

1973年クモ学会10大ニュース		1
蜘蛛(Spinne)	西郷啓造	4
ペートトラップのクモ	山川 守	6
不老入洞記	松本誠治	8
クモ小観察(2)夏の景信山にて	新海 明	8
コムラウラシマグモの越冬巣	熊田憲一	9
一週間だけ異常な網を張ったクモ	山川 守	10
オニグモの飼育について(日記をまとめつつの報告(1))	萱嶋 泉	12
紹介:水野寿彦著「日常の生態学」		3
DRAGLINE		11
会報		13
東京蜘蛛談話会のしおり(談話会小史)		14

№39 (1975. 3)

日本のクモ学の現況と展望	八木沼健夫	1
1974年クモ学会10大ニュース		6
石尊山の真正蜘蛛類	菅波洋平・関由美子・沼田貞子・堀越早苗	9
埼玉県のクモ類研究史(1)	大野正男	15
埼玉県における採集記録(1)	鳩田順一	22

ハエトリグモの分類—その歴史・体系に関する2, 3の知見—	松本誠治	27
八重山群島のクモ類	大利昌久	32
真正クモ類の生態資料(南西諸島編)	大利昌久	33
キシノウエトタテグモに寄生する冬虫夏草について	高橋 登	36
小観察あれこれ(4)	高野伸二	38
箱根畠宿付近の真正蜘蛛類	小林久俊・石山鉄幸・権田重雄	42
クモの生活史における問題及び齢期記録の一方法	小野展嗣	49
DRAGLINE. カクレ帯をつけたヤマオニグモの幼生	松本誠治	40
家屋の壁をあるきまわるオオハエトリ	松本誠治	40
八王子城趾クモ観察会のドウシグモ	小野展嗣	40
アリをきらうクモと好むクモ	小野展嗣	41
オオヒメグモのえじきとなったクモ	小野展嗣	41
訂正とおわび		8
土壤動物研究会へのお誘い		21
お便りの中から		31
KISHIDAIA № 40 原稿募集		48
会報		55

№ 40 (1976. 5)

「研究」ということ	吉倉 真	1
東京蜘蛛談話会観察会報告 1975 年度		
春 丹沢山塊ヒジリ峰のクモ	栗原輝代子	3
夏 富士山のクモ Check list	小野展嗣	6
秋 滝山城趾のクモ	新海栄一	11
クモ学会 1975 年 10 大ニュース		15
小観察あれこれ(5)	高野伸二	18
キジロオヒキグモ <i>Archnura logio</i> Yaginuma の自宅観察メモ	松浦祐司	20
観察日誌	佐久間良三	22
クサグモの先活史	鈴木勝浩	26
あっちこっちのくも(山寺・五色沼・新潟駅)	熊田憲一・山川 守	29
ハエトリグモの分類(II) —日本産ハエトリグモ 7 種について—	松本誠治	33
DRAGLINE. 蜘蛛の脱皮について	佐久間良三	40
アリを好むクモ	松本誠治	41
カクレ帯をつけたヤマオニグモの幼生	松本誠治	41
「水蜘蛛」	佐久間良三	28

№ 41 (1977. 5)

ビジョオニグモの死	佐藤幸子	1
ハイイロヒメグモの集団越冬	熊田憲一	2
小観察あれこれ(6)	高野伸二	3
野帳	田中理恵	5
オオハエトリの飼育経過	鈴木勝浩	9
自然保護読本とクモの説明	須賀英文	11
クモが人間を水の中に引きずり込む話	須賀英文	12
ハエトリグモの分類(Ⅲ)	松本誠治	15
埼玉県における採集記録(Ⅱ)	鳩田順一	21
岩手県好摩のクモ	熊田憲一	25
DRAGLINE. オオヒメグモを襲ったミスジハエトリ雌	鈴木勝浩	27
ヤホシヒメグモの産卵からハッチまで	鈴木勝浩	27
沖永良部のクモの俗称	小野展嗣	27
コケオニグモに咬まれて	山川 守	27
東北ヘジョロウグモを求めて	栗原輝代子	28
クモ標本同定会に思う	鈴木勝浩	29
東京蜘蛛談話会採集会報告		
日向薬師・広沢寺のクモ	高橋 登	29
八柱靈園のクモ	権田重雄	33
10大ニュース	運営委員会 選	36
KISHIDAI Aのバックナンバーあります		39
東京蜘蛛談話会活動報告		40
表紙に寄せて	小澤實樹	41

№ 42 (1977. 12) 東京蜘蛛談話会創立10周年記念号

東京蜘蛛談話会誕生より10年を迎えて	萱嶋 泉	1
東京蜘蛛談話会創立10周年にあたって	松本誠治	3
明治時代の日本のクモ	小野展嗣	4
ビジョオニグモの死・その後	佐藤幸子	13
クモの生態2題	中平 清	17
クサグモの同居グモ	石山鉄幸	19
クモ(12種)の産卵個数	松本誠治	21
北緯50度線上報告	小野展嗣	23

高山不動というところ	田中理恵	26
ハエトリグモの分類(IV)	松本誠治	29
都会のクモ I	新海栄一	35
飛鳥・栗島のクモ	吉田 哉	39
山梨県山中湖村旭ヶ丘のクモ	熊田憲一	41
DRAGLINE. コホラヒメグモと卵のう	高橋米夫	42
「ひぶがし」追録	小野展嗣	42
クモの産卵回数について	鈴木勝浩	42
三宅島にいたオダカグモ	鈴木勝浩	43
イソコモリグモとイシカリコモリグモ	高野・新海・熊田	43
東京蜘蛛談話会観察会報告		
伊豆半島の真正クモ類	新海栄一	44

No. 43 (1978. 7)

台湾クモ類採集旅行	吉田 哉	1
ビジョオニグモのフ化に接して	佐藤幸子	6
クモ標本観察のための一用材	松本誠治	9
DRAGLINE. アズチグモの食餌	小野展嗣	10
石垣島で採集したサヤヒメグモ	吉田 哉	10
イマダテテングヌカグモの採集記録	熊田憲一	10
アシナガグモ科2種の卵のうを確認	鈴木勝浩	11
クモ学会 1977年10大ニュース	運営委員会 選	12
観察会報告 1977年夏～1978年春		
八王子城跡のクモ(I)	新海・田中・栗原・高橋	15

No. 44 (1979. 3)

クモの住居拡大	中平 清	1
長生きをしたクロガケジグモ	田中穂積	4
コサラグモ2種について	佐藤幸子	6
北緯50度線上報告(2)	小野展嗣	9
研究雑記帳(1)	鈴木恵一	14
道北紀行	熊田憲一	17
北海道北部のクモ	熊田憲一	23
DRAGLINE. 未受精卵を食べるクモ	鈴木勝浩	29

野帳から	蓮沼克己	29
------	------	----

No 45 (1980. 3)

佐藤さんのビジョオニグモに関する文章を読んで	中平 清	1
タテヤマサラグモ	佐藤幸子	3
乾燥・収縮してしまったクモの復元方法	松本誠治	6
Note.クサグモ(1) 一共食いについてー	栗原輝代子	7
三浦半島の真正蜘蛛類	熊田憲一	9
DRAGLINE. 台湾の網を張るコモリグモ	吉田 哉	28
飼育中のアシダカグモの産卵行動	松浦祐司	28
卵のうから出たムシ	蓮沼克己	28
観察会報告 1977年春～1979年冬		
巾着田のクモ	鶴田順一・田中理恵	29

No 46 (1981. 3)

Simonのこと	松本誠治	1
クモ6種の卵のう	鈴木勝浩	6
或るコサラグモの記録	佐藤幸子	9
キゴシジガバチに狩られたクモ	鶴田順一	13
Note.クサグモ(2) 一天敵についてー	栗原輝代子	15
観察裏話	佐藤幸子	16
近ごろ面白いと思ったこと	中平 清	17
クモの卵のう写真集(1)	新海栄一	19
東京蜘蛛談話会観察会報告 1979年春～1980年冬		
城山(根小屋城跡)のクモ	高橋 登・松浦祐司	25

No 47 (1981. 8) 萱鳴泉先生古稀記念号

記念号発行にあたって	萱鳴泉先生古稀記念誌発行実行委員会	
表紙に寄せて	小澤實樹	
萱鳴泉先生の略歴	1	
萱鳴泉先生の研究・啓蒙業績目録	4	
萱鳴泉先生の古稀を祝して	八木沼健夫	19
萱鳴先生いつまでも	植村利夫	21

萱鳩さんと先生たち	大内 実	22
萱鳩先生との出会い	高野伸二	24
萱鳩泉先生の古稀を祝す	篠原圭三郎	25
クモ学会の紳士	青木淳一	26
宮崎での萱鳩先生	石野田辰夫	27
萱鳩先生と私	築地満男	31
萱鳩先生の宿題	菊屋奈良義	34
我が師・萱鳩先生	佐藤幸子	36
萱鳩先生、いつまでもお若くおすこやかに	梅林 力	37
さらなるご活躍とご指導を	古浜 隆	37
東京蜘蛛談話会発足当時の思い出	浜村徹三	38
慈父	松本誠治	39
萱鳩先生と私	大河内哲二	40
萱鳩先生と応用クモ学	国見裕久	42
萱鳩先生の古稀を祝す	小野展嗣	45
すまな顔	熊田憲一	47
萱鳩泉先生の古稀を祝して	栗原輝代子	48
萱鳩先生の古稀にあたり	貞元巳良	49
萱鳩先生と私	鈴木勝浩	50
萱鳩先生と談話会—萱鳩泉先生の還暦を祝して—	新海栄一	51
表彰状	NHK「ウルトラアイ」	53
カヤシマグモについて	八木沼健夫	55
アシダカグモ <i>Heteropoda venatoria</i> (Linne) の長期飼育報告(1)	萱鳩 泉	57
人工洞および洞窟外の調査と洞窟性クモ類の起源について	西川喜朗	65
シナカニグモの分布と系統	小野展嗣	69
シロオビトリノフンダマシの網の形態について	貞元巳良	76
シモングモの生活史について	佐藤幸子	79
ツノタテグモの再発見	斎藤 博	81
私のクモ観察ノートから	鈴木勝浩	84
オニグモ類の生態観察記録(第1報)	林 秀幸	87
岸田久吉先生同定による千葉県産クモ類	松本誠治	93
クモの人工飼料の工夫	中平 清	101
クモの卵のう写真集(2)	新海栄一	104

Nº 48 (1982. 4)

アシダカグモの長期飼育報告(Ⅱ)	萱嶋 泉	1
民話における蜘蛛の存在価値	貞元巳良	5
卵ノウ2種の観察	佐藤幸子	15
東京蜘蛛談話会観察報告 1981年夏		
赤城山の真正蜘蛛類	林 俊夫	17
神奈川県立野庭高等学校周辺の真正蜘蛛類	谷川明男	23

Nº 49 (1982. 12)

宮城県の真正蜘蛛類(1)	佐々木勝実	1
北海道のサラグモ(Linyphidae)について	斎藤 博	8
ムラクモヒシガタグモの生態(1) 網型と捕虫	池田博明	22
クサグモの爪の電顕写真	鳴田順一	26

Nº 50 (1983. 5)

ムラクモヒシガタグモの生態(2)

造網時刻、生態的地位、補修、日周活動	池田博明	1
アシダカグモ <i>Heteropoda venatoria</i> (Linne) の長期飼育報告(Ⅲ)	萱嶋 泉	7
ナニワナンキンギングモの観察	佐藤幸子	15
オニグモ類の生態観察記録(第2報)	林 秀幸	18
東京蜘蛛談話会観察会報告 1980年春～1981年冬		
高尾山のクモ	新海栄一・蓮沼克己	27
KISHIDAI Aの投稿規定		34

Nº 51 (1984. 3)

ムラクモヒシガタグモの生態(3) 卵と卵のう、幼生と令の判定	池田博明	1
アシダカグモの長期飼育報告(Ⅳ)	萱嶋 泉	7
新潟県十日町地方に伝わるジゴ(ジグモ)の		
唱え歌と喧嘩民俗について	新海 明・樋口 厚	13
東京蜘蛛談話会観察会報告 1981年春～1982年冬		
天覧山のクモ	鳴田順一・鈴木勝浩	15
東京蜘蛛談話会 1983年度例会・総会での講演内容		23

表紙に寄せて	小澤實樹	25
KISHIDAIA投稿規定		26

No.52 (1985. 4) 小松敏宏先生追悼号

小松敏宏博士略歴著作目録		1
1. 追悼文		
小松敏宏先生を憶う	八木沼健夫	6
小松敏宏博士の追悼号に寄せて	植村利夫	9
追悼の記	千国安之輔	10
小松先生の思い出	萱嶋 泉	11
小松敏宏先生の思い出	入江照雄	12
小松敏宏先生	松本誠治	15
2. 一般原稿		
アシナガグモ一種の張った半円網についての一例観察	新海 明	17
スソグロサラグモの初捕食について	佐藤幸子	22
クモの拍動, ウラシマグモ・ワシグモの飼育・観察会報告など	小田原城内高等学校生物研究部	25

No.53 (1985. 5) 高野伸二先生追悼号

1. 高野先生略歴・活動記録		1
2. 追悼文		
高野伸二先生を偲ぶ	萱嶋 泉	5
白いツバメ	中平 清	6
高野伸二先生	八木沼健夫	7
高野先生を偲ぶ	佐藤幸子	8
鳥の師・クモの師	高田 勝	9
高野先生々々	小澤實樹	10
高野さん永久に	梅林 力	11
先生を想うと	松本誠治	12
ニシキオニグモとハシグロビタキ	浜口哲一	13
高野伸二先生をしのんで 3ヶ月にかけた情熱	新海栄一	14
高野先生とゴマジロオニグモ	池田博明	15
高野さん	熊田憲一	16
「.....」	熊田理恵	17

高野先生の思い出	高橋 登	18
高野先生	鷗田順一	19
高野伸二先生の思い出あれこれ	小野辰嗣	19
高野先生	松浦祐司	20
3. 一般原稿		
宮城県網地島の真正蜘蛛類	佐々木勝実	22
神奈川県下のスズミグモの記録 2例	浜口哲一	26
アシダカグモの長期飼育報告（V）	萱嶋 泉	28
ヤマオニグモに見られた網の更新の一例観察	新海 明	31
4. 投稿規定		35

No. 54 (1986. 12)

沖縄クモ観察記	新海 明	1
はじめてのクモの飼育 ヤサコマチグモ	稻葉等代・稻葉茂代	10
ハネグモ跳ねた	熊田憲一	13
東京蜘蛛談話会活動報告		
昭和 58 年度観察採集会報告 広徳寺周辺のクモ	熊田憲一・加藤輝代子	15
昭和 60 年度観察採集会報告 高麗山のクモ	池田博明	22

No. 55 (1987. 5)

アズマキシダグモの婚姻贈呈	板倉泰弘	1
アシントヒメグモの生態	高橋祐子	3
クモ 3 種の新産地の報告		
シロタマヒメグモ・ニワオニグモ・アカスジコマチグモ	谷川明男・堀由起子	7
談話会活動報告に使用したクモの性別および齢期略号について	熊田憲一	9
東京蜘蛛談話会活動報告		
昭和 57 年度合宿報告 伊豆半島天城湯ヶ島町市山のクモ		
	熊田憲一・加藤輝代子	10
昭和 58 年度合宿報告 箱根合宿のクモ	熊田憲一・加藤輝代子	17
昭和 59 年度合宿報告 内浦山県民の森の真正蜘蛛類	浅間 茂	25

No. 56 (1988. 3)

8月の初島のクモ	稻葉茂代	1
----------	------	---

丹沢のクモ 1. 大倉周辺	山川 守・熊田憲一	4
神奈川県立野庭高等学校周辺の真正蜘蛛類（補遺）	谷川明男・田副幸子	11
キヌアシナガグモ <i>Tetragnatha lauta</i> Yaginuma の網構造について	新海 明	15
ジョロウグモ幼体の網の観察	瀬戸康彦	19
DRAGLINE. クモを狩ったハチは、ビソン (ツヤクロジガバチ) 属である	池田博明	25
コサラグモ <i>Aprifrontalia mascula</i> の 小観察	熊田憲一	25

No.57 (1988. 12)

宮崎産のコガネグモの俗称とコクサグモについて	石野田辰夫	1
オニグモ雄若虫の横糸を張る方向について	松本誠治	3
オオトリノフンドマシの卵のうあれこれ 一出のう時期と出のう位置	新海 明	6
ニセキクヅキコモリグモの生態小観察	谷川明男	9
合宿に参加して	貞元巳良	11
沖縄クモ観察記 (2)	新海 明	13
DRAGLINE. ワキグロサツマノミダマシ♂成体の「餌の掠奪」	新海 明	19
秋に見つけたアズチグモ	熊田理恵	19
アリの卵を食べるクモ	稻葉茂代	20
淨土平・微温湯温泉周辺のクモ	熊田憲一	21
昭和60年度合宿報告		
安曇野のクモ	熊田憲一・千国安之輔	25
KISHIDAI A 投稿規定・原稿作成上の注意		33
編集後記		34

No.58 (1988. 8) 東京蜘蛛談話会会誌 KISHIDAI A 発刊20周年記念号

談話会活動写真集

記念文

本田正次先生に聞いた岸田久吉先生のことども	萱嶋 泉	1
素晴らしいクモと人間たち	小澤實樹	4
私とクモの長いつきあい	浜村徹三	6
「KISHIDAI A」発刊20周年に寄せて	大河内哲二	7
KISHIDAI A 発行20周年に寄せて	松本誠治	9
自問自答	小野展嗣	10

KISHIDAIAと私	佐藤幸子	16
談話会をクモの博物学的研究のメッカに	池田博明	17
東京蜘蛛談話会と私	高橋 登	18
談話会と私 3年前の印象	板倉泰弘	19
バック・トゥ・ザ・フューチャー	新海 明	20
キシダイア発刊20周年によせて	谷川明男	21
入会と始めての投稿	熊田憲一	22
一般原稿		
岸田久吉先生の遺稿「ジャウゴグモ」について	新海 明	25
キシノウエトタゲモの交尾行動について	笛岡文雄	30
チリグモの交接について	稻葉茂代	34
我が師と蜘蛛 一萱鷗先生の喜寿をお祝いしてー	貞元巳良	37
東京クモゼミ報告(I)	池田博明	40
キヌアシナガグモの網構造について(続報)：幼体の網	新海 明	46
DRAGLINE. 8年目のアシダカグモ	熊田憲一	48
アシナガグモ♂成体によるジョロウグモの網の掠奪	新海 明	48
卵のうを食い破るアズマキシダグモ	板倉泰弘	49
田中徳久氏採集による各地のクモ同定記録		
—沖縄、小笠原、硫黄島、三宅島、真鶴、八ヶ岳、清里、北海道—	谷川明男	50
狼島のクモ	熊田憲一	56
1987年度観察採集会報告		
丹沢・大倉周辺のクモ	笛岡文雄	46
KISHIDAIA No.1～No.58 総目次		73
KISHIDAIA投稿規定・原稿作成上の注意		90
編集後記		91

— K I S H I D A I A 投稿規定 —

1. 投稿資格は本会会員とする。ただし共著者には、会員以外の者を含むことが出来る。依頼原稿については、本会会員でなくとも、運営委員会の承認があればよい。
2. 原稿内容は、クモや東京蜘蛛談話会に関する論文、解説、記録、紀行文、感想などとする。
3. 原稿の採否については、運営委員会にて決定する。また、原稿に対して加筆・削除・修正などをお願いすることがある。
4. 頁数は図表を含めて、刷り上がり8頁以内とし、超過頁分は、著者全額負担となる。（現状、一頁につき2,500円とするが、印刷費の変更等により、金額が変わることがある。）
5. 特別な費用を要する印刷は、その実費を著者負担とする。
6. 別刷は原稿の一頁目の上部に、別刷の必要枚数および表紙の有無を赤字で記入する。（別刷の金額は、全額著者負担とする。）
7. 原稿は、図表・写真も含めたコピー1部を添える。

— 原稿作成上の注意 —

1. 原稿用紙は、市販の400字詰め原稿用紙を使用してください。ワープロの場合はA4サイズに40～44字×36行を目安とする。
2. 学名などイタリック体を使用する場合には、その下に赤線を引いてください。（学名の場合、属名と種名、それぞれに赤線を引いてください。）
3. 写真は白黒にしてください。図は製図用インクなどにて、墨入れして下さい。
4. 文章は5行目から書きはじめ、1行目にタイトルを3行目に著者名を書き入れて下さい。

（1989年4月15日改正）

<1988年・1989年度運営委員>

池田 博明・板倉 泰弘・小野 展嗣・熊田 憲一・笹岡 文雄・新海 明・高橋 登・
谷川 明男・萩本 房枝。

代 表：萱嶋 泉 191 東京都日野市多摩平7-15-9
本 部：小野 展嗣 169 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部内
会誌編集：谷川 明男 223 神奈川県横浜市港北区新吉田町1523
通信編集：池田 博明 258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099
事務局（会計）：熊田 憲一 221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199
郵便振替 東京 7-74885

編集後記

KISHIDAIA創刊から今年は20年目にあたる。もうそんなになってしまったのか、と言う気がするのは私だけではないと思います。昨年の総会でこれを記念して“20周年記念号”の作成が決まり、運営委員会の中から新海明氏が記念文の依頼、谷川明男氏と熊田が編集をと分担してここに記念号が出来上りました。人それぞれの想いの込められた20年ということが良くわかります。月1回1号から年1～2号と発行形態は変わったものの、1年にはほぼ60頁前後が出せたのも、その想いがあったからだと思います。この1冊をKISHIDAIAの1通過点とせず、今までと一味違ったKISHIDAIAへの1歩としたいものです。

（熊田 憲一）

予定よりかなり遅れてしまいましたが、キシダイアNo.58、発刊20周年記念号が完成しました。たくさんの方々から原稿をいただき、豊富な内容にすることができました。ご投稿くださいました皆様には厚くお礼申し上げます。また、小澤實樹氏には素晴らしい表紙を作製していただきました。お忙しいなか快く引き受けさせていただきました小澤氏に深く感謝いたします。総目次は新海明氏、別冊の復刻版は熊田憲一氏に作製していただきました。両氏にあわせてお礼申し上げます。

キシダイアも20年を越えて新しい時代に入りました。この雑誌をこのまま発展させるのも、衰退させてしまうのも我々会員の活動次第かと思います。キシダイアを、クモの研究の同好者にとつて価値のある、そして息の永い雑誌にするようがんばっていこうではありませんか。

皆さんからのたくさんのご投稿をお待ちいたしております。

（谷川 明男）

編集補助：新海 明・熊田 憲一

KISHIDAIA No.58 1989年8月15日印刷 編集者 谷川 明男

1989年8月16日発行 発行者 萱鳩 泉

発行所 東京蜘蛛談話会

東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 小野 展嗣方

印刷所 イチカワ印刷所

〒357 埼玉県飯能市新町24-7

KISHIDAI A No. 58 正誤表

- 目次 20 始め →初め
 -15 貞元巳良 →貞元巳良
 - 3 KISHIDIA →KISHIDAI A
 p.24 1 られる →られ
 p.27 18 中部に 本→中部に i 本
 p.28 5 触鬚の は→触鬚の 跡は
 6 前段は の→前段は 跡の
 8 *fuliginea*
 →*fuliginea* E. Simon
 15 E.Sjmon → E. Simon
 p.34 図1 ♀マークが逆さま
 p.64 19 1987年10月18日
 →1988年2月21日
 p.70 3 *entittha* → *euttitha*
 17 Heteropodidae → Heteropodidae
 p.89 7 始め →初め
 12 貞元巳良 →貞元巳良

このほかに間違いがありましたら、編集
までお知らせください。

KISHIDAI
Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No.58 Aug. 1989

— 目 次 —

東京蜘蛛談話会会誌KISHIDAI A発刊20周年記念号

談話会活動写真集

記念文	1 ~ 24
一般原稿	
新海 明： 岸田久吉先生の遺稿「ジャウゴタモ」について	25
笛岡 文雄： キシノウエトタゲモの交尾行動について	30
稻葉 茂代： チリグモの交接について	34
貞元 良： 我が街と蜘蛛 —— 萱嶋先生の喜寿をお祝いして ——	37
池田 博明： 東京クモゼミ報告(Ⅰ)	40
新海 明： キヌアシカグモの網構造について(続報)：幼体の網	46
DRAGLINE	
館田 浩一： 8年目のアシダカグモ	48
新海 明： アシナガモ&成体によるジョウウグモの網の掠奪	48
板倉 泰弘： 鳥のうを食い破るアズマキシダグモ	49
谷川 明男： 田中徳久氏採集による各地のクモ同定記録	50
—— 沖縄、小笠原、硫黄島、三宅島、真鶴、八ヶ岳、清里、北海道 ——	
館田 浩一： 狼島のクモ	56
1987年度観察採集会報告	
笛岡 文雄： 丹沢・大倉周辺のクモ	64
KISHIDAI A No.1 ~ No.58 総目次	
KISHIDAI A投稿規定・原稿作成上の注意	73
編集後記	89
	90